

録

武蔵工業大学録主会

七十年度の歩み

上

緑

武蔵工業大学緑土会

七十年の歩み

土

緑

武蔵工業大学緑土会

七十年の歩み

土

表紙題字

木村笛風書

汝

自知

笛江書

汝、自らまさに知るべし

「大無量寿経」(浄土教の根本聖典)というお経の中にある言葉です。その意味するところは、人間は弱いものだからとかく何でも人のせいにしがちだが、要はすべてのことは相手サイドの問題ではなく、自分自身の問題であるということです。

木村笛風

経歴

小野道風展文部大臣賞

日本かな書道会展特選

京都水穂会（日比野五鳳主宰）推薦賞

日展入選 読売展入賞

埼玉県展運営委員・審査員歴任

子息 木村充男 本学昭和49年土木工学科卒業

孫娘 木村真理 本学環境情報学科2年在学中

ごあいさし



中部 恭一 緑土会会長

緑土会七〇周年記念を祝して

(昭三七土卒)

土木科の卒業生で組織される「緑土会」がめでたく七〇周年を迎えることができました。これもひとえに関係各位と多くの卒業生の皆様のご尽力によるものと深く感謝致します。

昭和五年（一九三〇）に高工土木科第一期の卒業生を輩出してから、その後工専土木科となり、昭和二四年より新制大学の工学部土木工学科となりました。取り分け戦時中は学徒動員で多くの大学生が戦地へ赴いたなか、本学はまだ工専であったにも拘わらず学徒動員を免ぜられた数少ない学校でした。このことから本学学生の技術者としての資質が高く買われ、期待されていたことが伺われます。戦後多くの優秀な若者達が、焦土と化した国土復興の建設を担うべく、土木科に入学致しました。入学者の年齢の幅は広く、人生経験も豊かで、教授達の困惑は大変なものであったと伺っております。

昭和三九年の東京オリンピックを契機に大々的な国家プロジェクトが目白押しとなり、土木技術者の需要は一段と高まりました。これらに本学卒業生が各分野で従事し、輝かしい実績を収め、戦後の高度成長経済の礎になりました。特筆すべきことは、五、

六〇〇名からなる緑土会会員の結束力の強さです。工業会の支部等の活躍に見られる本会会員の熱心さは顕著で、どの支部総会でも多くの会員の参加が見られ、本学を支える一大勢力となっております。

このように、輝かしい先輩諸兄の功績を我々は次の世代に引き継ぐ責務があります。

緑土会は七〇周年を迎えましたが、バブル経済崩壊後、土木を取り巻く環境は大きく変わりつつあります。戦後五〇年続いてきた公共事業も、その必要性が政治問題まで発展し、大手ゼネコンの再建計画が報じられる傍らで、公共事業への予算縮小、本年からの行革による建設省の国土交通省への再編、更に土木への若者の志願者低迷など、課題が山積みされており、大学も含めて建設業界は抜本的な改革を迫られております。

七〇年に亘って蓄積された技術と伝統を確実に次の世代に引き継ぐべく、この七〇周年記念は大きな意義を持つのではないのでしょうか。二十一世紀の建設を担う優秀な卒業生が巣立っていくことを確信し、皆様の益々のご活躍を祈念して巻頭の言葉と致します。



緑土会七〇周年記念をお祝いする

大政 正二郎 第二代緑土会会長

(昭三十三卒)

緑土会今川初代会長より昭和四八年に引き継ぎ、一二年余、会長を施行させて頂きました。

副会長 小林 博(昭二十四卒)

副会長 神山光男(昭二七年卒)

総務部長 田辺幸男(昭二七年卒)

監事 小玉克己(昭三一年卒)

の優秀なスタッフで無難に第三代小林会長に引き継ぎが出来ました。

四八年当時は、緑土会員も一、五〇〇名足らずで、基金は八二万円余でした。

何をするにも資金が必要で、田辺総務部長と早く基金を一〇〇万円以上にしようと、金利の良い郵便局へ貯金したり、幹事会や諸打ち合わせ会に出席の皆様より一、〇〇〇円を徴集して、緑土会の基金を増す努力をしたものです。

また、大成柏会の宍戸尚夫氏(昭三五年土卒)より、緑土会の総会に大成のクラブを使用すれば市価より大分安いとご教示いただき、渡りに舟とお願ひして、緑土会の総会は毎年開催出来る様

にお願ひし、今日に至っています。

新宿で交通の便もよく会場は高層ビルで眺めも良好だし、今後共宜敷くお願ひ申し上げます。

昭和五二年度より基金にも大分余裕が出来たので、土木工学科卒業生で成績優秀者に緑土会賞を授与しています。

今後、出来得る限り有効に基金を活用して緑土会の良き運営を図って頂きたいと思ひます。

現在、武蔵工業大学会員は四三、〇〇〇名、その中で緑土会会員は五、六〇〇名、一三パーセントの会員が全国各地で大活躍され、武蔵工業大学の名声を天下に拓められています。

緑土会員の諸兄、どうか今後共増々の御繁栄と御健勝を祈念申し上げます。御挨拶と致します。



小林 康一 緑土会前会長

激動の時代を共に生きて

(昭二二土卒)

緑土会七〇周年の記念事業に心から御喜び申し上げます。

私は今年七四歳です。昭和の激動時代を共に生きてきた同期の桜の感動を感じながら、自分の人生を回顧しながら、投函します。

一、入学について

昭和一八年ころ父が満州国の北支方面を視察して帰国した後、この戦争は大変困難な状況であると申して自家用の食料増産をはじめました。父は日露戦争に従軍した戦争の経験者のため戦争の悲惨、悲劇を知りつくしていました。その父のすすめもあり、理工科学生は卒業まで入隊延期制度があること、戦争の結果がどうなるにしても土木事業が将来拡大することを考え、受験し入学することが出来ました。

二、学校の思い出

戦争時の学生生活、勤労働員、農作業支援、住宅強制疎開、消防所補助員、学校での軍事教練、大変熱心だった猪狩校長や中野教官を思い出します。また、グラマン襲来、機銃掃射、逃げまどった時のあの恐怖感、学校のシンボル建物、木造段教室での講義、伊藤、修善寺峠地質調査体験行軍訓練旅行等々、思い出は限りあり

りません。多摩川堤防上における三角測量の教官久保田基氏や林田実氏(昭八卒)のお二人ともすでに鬼門となり、ご冥福を祈ります。卒業以来約三〇年ぶりであの懐かしい尾山台の道を歩いたとき、町並みの変革を感じながら校門の前に立ったときは、昔の面影はまったく感じませんでした。というより、近代的感覚の学校の姿は驚きを感じました。私の歩んだ道を振りかえるとき、教育の重要さが如何に大切であるかを痛感し、武蔵に学んだことを誇りに思っています。

三、緑土会について

卒業以来地方において施工管理に従事しており、まったく学校に関心がなかった昭和四六年ごろ当時、取締役土木部長山際文行氏(昭一二卒)が中心になって、東浦義昭氏(昭二六卒)、堀口正勝氏(昭三五卒)が発起人となって東急建設柏会が結成されました。これが後に東急グループ全体を統合して現在の東急柏会支部に変革し、当時札幌支店長だった私が初代支部長に就任しました。

(一) 当時の北海道緑土会支部

当時、工業会および緑土会の北海道支部長は田中鷲大先輩（昭六卒）でした。昭和四〇年後半、札幌冬季オリンピック開催を契機にゴルフ場建設、マンシヨン工事が増大し、各企業とも技術者を増員したため、在住卒業生数は約五〇〇名となり、道内各地において活躍していました。緑土会・工業会支部長田中鷲氏、その後、支部長は田中正彦氏（昭一二電気卒）、小林康一を経て昭和六一年一二月に深田武男氏（昭二二卒）にバトンタッチして札幌を去りました。一五年間の札幌勤務、在職中多数の卒業生諸君の交友を賜り、種々意見交換できたことは生涯忘れることが出来ない思い出となりました。

（二）支部活動の問題点

・支部運営について……支部は総会等の出席者が支払う会費や寄付金で運営されています。したがって、活動資金に余裕がなく積極的活動は出来ないのが現状です。また、交通費や経費等の多くは支部長の自腹負担となるため、支部長は自己負担可能なる人に限定されるのが現実です。この問題を解決することが支部活動を活発にするための第一の課題と考えます。

・受験学生増大について……支部長の推薦などにより、一定の枠内で卒業生の子弟の入学を認めたり、地域との交流を拡大強化するなどして、受験学生の増加を図ることが大学の将来のために大変重要と思います。また、インターネットを駆使して情報提供を活発にすることはもちろん、将来はインターネット経由で学生の選抜や入学許可をする時代が来ると思います。

四、緑土会前会長として

七〇年の伝統があり格式の高い緑土会会長に選任されたことは大変名誉であり光栄に思い感謝しています。七〇年の中のほんの一齣と思いますが、学内支部の神山・小玉・片田教授他の各位にすべてにわたってご指導・ご協力いただき、各先輩の皆様方、また各後輩の皆様方に、多大のご支援やご協力いただきましたことについてお礼申し上げます。現会長中部恭二氏（昭三七卒）は企業経営者としての能力は群を抜き、工業会常務理事でもあり、また若手に人気があつて将来工業会会長に推薦できる人物として推挙しました。今後、ますますのご健闘をお願いいたします。総会の運営はいかにして多数の出席者が得られるか課題です。ことに若手の卒業生の参加を増やしたいものです。また、情報の交換の場所として、あるいは各年時の同期会の会場として活用できないか検討をお願いしたいと思います。例えば総会の事業計画・収支報告・承認の他に学園支部・職場支部・地方支部の活動状況や支部運営の問題点の発表をすることも一考と考えています。開催場所については、東京と横浜で隔年開催することになっていました。東京会場は大成建設、横浜会場は奈良建設の関係者には多大の協力を賜り、お礼を申し上げます。

二十一世紀を迎えるに当り技術の発展進歩は格段の感があると思います。施工機械はすべてIT装備され、省力化・遠隔操作・高性能の時代が来ると思います。学校教育は基礎研究・分析能力・判断力養成・総合計画の立案等が必要になる時代が来ると考えています。緑土会の益々のご発展、会員各位の一層のご活躍を祈ります。



岩崎 征人 工学部 土木工学科 主任教授

土木工学科の名称変更について会員各位のご賛同を！

「緑土会」設立七〇年、おめでとうございます。

またこの間、長きにわたる武蔵工業大学土木工学科への有形・無形のご協力に対し深甚なる感謝の意を表します。

さて、武蔵工業大学土木工学科は昭和四年に設立された武蔵高等工科学校土木科を母体とし、二四年に新制大学へ移行した後、昭和三年四月に土木工学科として新たなる出発をいたしました。以来、七〇年余の長きにわたり多くの卒業生を輩出してまいりました。

この間幾多の社会・経済的な変動を経て、二〇世紀の最後の年である二〇〇〇年を迎えることもできました。

近時、「第三の開国」が叫ばれてから既に一〇年余りが過ぎようとしております。

また、大学の改革の必要性が叫ばれてからも同じような年月が経過しました。

土木教室は、この改革の時代を乗り切るためにこれまで多くつかの改革を行ってまいりましたことは、皆様もご存知のことと思えます。

しかしながら、近時の社会・経済的な変動は、既に皆様もご存知のようにこれまでの循環的な変化とは明らかに質的に異なったものであると言わざるを得ません。

外部的には、建設業界を取り巻く社会・経済環境の変化、公共事業に対する国民の意識の変化、少子化による受験生の減少、さらには多くの分野における国際化があげられます。

内部的には、学生の質的な変化は、これまでの教育方法を根底から揺さぶっております。

このような時代認識のもとに、土木工学科は新たな変革を目指し、平成一四年度から学科名称を変える決意をいたしました。

まぎれもなく、武蔵工業大学土木工学科の卒業生の多くは建設業界、なかんづく土木業界において目覚ましい活躍をされておられることは周知の事実であります。

しかしながら、本学土木工学科の将来にわたっての存続を考えますと、新たな地平を拓くための自己変革を成し遂げなければなりません。

私は、これから始まる二十一世紀はまぎれもなく、国際化の時

代であると同時に、国内的には地方の時代であり、かつ都市の時代になると確信しております。

このためには、今まで以上に卒業生の国外と、国内においては地方と都市における活躍を期待するものであります。

また、従来からの教育目標であった社会基盤構造物の設計・施工の技術者の育成のみにとどまらず、都市を人間の生活の場としてのシステムと捉え、これを計画・運用してゆく技術者や活躍の場を国外に求める積極的な技術者の育成が急務であるとも考えております。

土木工学科ではこのような認識のもとに、教室内で議論を重ねた結果、新たな学科名称として『都市基盤工学科』への名称変更を了解しました。

学科名称の変更には、何よりも七〇年間にわたる卒業生で構成されております「緑土会」会員皆様方のご賛同が不可欠であります。

皆様の心からのご賛同と大学の全面的な協力ならびに教室所属教職員の不断の努力なくしては、新学科は「仏作って魂入れず」に終わることは必定であります。

「土木」は歴史的な名称であり、かつまた卒業生の方々には学生時代から慣れ親しんでこられた「土木工学科」の衣を脱ぎ捨てることに対し、それぞれのお立場で違和感や寂寥感を抱かれるであろうことは十分に承知いたしております。

OB教員をはじめそれ以外の教職員の多くも、土木工学科の出身者であります。

それぞれの立場において複雑な感慨を抱いていることもまた事実です。

しかしながら、教室の将来を考えたとき「今しかない」との認識でも一致しております。

教室構成員一同、会員皆様のご支援とご賛同を心より願うものであります。

終わりにあたり、「緑土会」設立七〇周年祈念誌に、武蔵工業大学土木工学科の名称変更についての拙い一文の掲載機会を与えて頂きました、中部恭二会長をはじめ会員の皆様に感謝いたします。



土木工学専攻の現状報告と今後の課題

吉川 弘道 工学研究科 土木工学専攻 主任教授

一、現状の陣容と学生数

本学工学研究科（大学院）は昭和四十一年の発足以来、科学技術の発達や社会の要請に対応するべく、その拡大と充実に努めてきました。現在、修士課程七専攻、博士後期課程五専攻を設置しており、総定員二〇二名は工学系私大としては、有数の大学院規模を誇り、多くの大学院修了者を輩出してきました。

我が土木工学専攻は、昭和四七年四月に六学科目制にてスタートし、平成二年度から修士課程を一学年二四名に定員増し、現在に至っています。本年度は、新たに丸山助教、末政助教を専攻資格教員として迎えることができました。このことにより、六学科目すべてに指導教員二名以上、総勢一三名の教員スタッフにより、博士後期課程、修士課程における教育／研究への臨戦態勢が整い、開設以来の陣容となったことを報告いたします。

緑土会の皆様方にはご承知とは思いますが、ここに改めて土木工学専攻の教授陣を紹介させていただきたく、表―1に一覧しました。

表中には、次世代を担う各研究室所属の若手講師／助手も括弧

書きにて併記しました。このような、学科目制度は、多くの私立大学研究科にて採用され、国立大学における講座制度に相当するものですが、主要国立大学を中心とする昨今の大学院充実期にあっても、決して引けを取らない陣容と自負しています。

ただし、定年年令の引き下げとともに、シニア教員が早期に退職し、スムーズな補充がなされない場合、かくなる教員陣容を維持することが困難となります。これは、他専攻ではより深刻な問題として顕在化しつつあり、堤井研究科長のもと専攻主任教授会での懸案事項となっています。

二、専攻課程修了者数と在籍者

このような充実期を迎え、さらには社会からの要請のもと、土木工学専攻の修士課程の入学者も順調に増加してまいりました。数値統計を提示したく、平成期における修士課程修了者および現在籍者、ならびに博士課程修了者／論文博士授与者を表―2のようにならまとめました。

表中から判断されるように、六学科目にて毎年コンスタントに二〇名前後（時として三〇名以上）の修了生を送り出してきました

表-1

学 科 目	指導教授陣容		
応用力学	星谷 勝	丸山 収	
地盤工学	片田敏行	末政直晃	
土木計画	岩崎征人	中村英夫	中村隆司
コンクリート工学	小玉克己	吉川弘道	(栗原哲彦)
水 工 学	綾日出教	長岡 裕	(田中 厚)
構造工学	増田陳紀	皆川 勝	(白旗弘実)

た。これは、一研究室（一学科目）にM1、M2で七、八名の大学院生が在席していることを意味し、学部卒論生ともあわせると、研究室は大賑わいの様相を呈し、うれしい悲鳴を上げる一方、実験施設、コンピュータの不足や研究室面積自体の不足は否めず、目下の悩みでもあります。

また、専攻入学者には、女子の修士も毎年一、二名を迎え、就職大逆風の折り、頑張ってもらいたいところです。さらには、海外からの留学生、他大学からの受験

生および他学部（環境情報学部）からの入学者も増え、心強い限りです。ただし、表1・2にも示しましたが、博士課程となると、応用力学研究室の星谷教授が既に一〇名の俊英を輩出する一方、専攻全体として、なお努力を必要とするところです。今後、質と量の観点から、我が土木工学専攻の発展につとめる所存です。

三、土木工学専攻の今後の課題
さて、土木工学専攻は、第一段階・専攻発足、第二段階・定員増による充実期、を経て、これから第三段階への発展期にさしかかることになるのでしょうか。

表-2 土木工学専攻課程の修了者数及び在籍者数

●修士課程（平成期）

	学 科 目	応用力学	地盤工学 (旧土質)	土木計画 (旧交通工学)	コンクリート 工学	水 工 学	構造工学 (旧鋼構造工学)	合 計
修 了 者	平成1年度	2	4	1	—	1	1	9
	平成2年度	2	2	3	—	2	0	9
	平成3年度	0	2	1	—	3	4	10
	平成4年度	4	3	3	1	3	0	14
	平成5年度	4	2	5	4	6	4	25
	平成6年度	4	0	5	2	6	4	21
	平成7年度	5	2	4	4	6	4	25
	平成8年度	4	4	1	3	3	2	17
	平成9年度	6	4	5	6	6	4	31
	平成10年度	5	4	2	6	6	4	27
	平成11年度	1	5	3	3	3	1	16
	小 計	37	32	33	29	45	28	204
在 籍 者	修士2年	3	4	4	4	5	3	23
	修士1年	3	5	5	6	5	8	32
	小 計	6	9	9	10	10	9	55

●博士課程（累計）

課程博士修了者	2	0	0	0	0	1	4
論文博士取得者	8	0	0	2	0	1	11
在 籍 者	0	0	1	0	0	0	1

表-3 専攻主任教授の研究科長への報告

<p>1. 土木工学温故知新：教育／研究における基本的スタンスと目標</p> <p>我が国のインフラストラクチャー整備の推進役であった土木工学（Civil Engineering）について、再度自身のアイデンティティを見直し足元を固めるとともに、周辺領域と新規分野に教員の活動領域を広げ、かつ卒業生を送り込むことが肝要と考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●従来型土木工学の見直しと足固め <ul style="list-style-type: none"> →研究：本業回帰と知的／統合型土木工学の発展（進化する土木工学）。 →教育：即戦力のあるプロフェッショナルエンジニア（PE）の育成強化。就職率の好転。 【キーワード：インフラ整備、耐震防災、公共行政、統合化、ソフトウェア化】 ●周辺領域／新規分野への活動領域の拡大 <ul style="list-style-type: none"> →研究：当該分野への積極的参加と異分野との新規テーマの発掘と提案、etc. →教育：当該分野への学生の参加と卒業生の輩出。新規就職先の開拓。 【キーワード：地球／地域環境、通信情報、統合化、新交通、高齢化】
<p>2. 研究活動の活性化と多様化</p> <p>大学院の活動目標である研究活動について再度見直すとともに、その活性化と多様化を図ることが当面の課題であろう。具体的には、各種の学術交流と共同研究を促進するとともに、お互いに切磋琢磨できるような学術環境の整備を提案したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学内外／国内外／異分野との学術交流と共同研究 <ul style="list-style-type: none"> →一人ではなく複数の研究者で、同業から異業種へ、単発研究から統合型研究へ。 ●各教員による単年度ごとの研究計画および研究成果の文書化と開示。 <ul style="list-style-type: none"> →教員自身の研究目標の設定と研究成果の確認は、大学院教員の基本的所業。
<p>3. 教育改革：シラバス改定と単位制度の見直し</p> <p>昨年度より土木工学科にて先行、実施中であり、当面静観の構え。 また、大学院教務委員会にて検討審議中の各種方策を待ちたい。</p>
<p>4. 学科目名と専攻名の変更</p> <p>上記 1. に述べた目標の実施に際しては、現行学科目の見直しから始まるものであり、その結果として学科目名の変更（再編も伴うか？）、および新しい専攻の姿形にふさわしい専攻名の名称変更を検討したい。学科目名の名称変更は、学科目の構成教員からの積極的な提案を願ひし、専攻名については土木工学科での検討委員会と連動することになる。</p>

折りしも、経済／産業界の大変換期の奔流にあるなか、本専攻課程、工学研究科全体としても、行先進路をなお模索状態であります。

本専攻の今後の課題として議論百出するなか、土木工学専攻から工学研究科長（当時、谷口教授）への報告を再掲させていただきます（表1-3）。

ここでは、まずは土木工学専攻としての基本的スタンスを示しました。

これは、従来型土木の足固めと学際領域／新規分野への領域拡大、の二本立てとすることであり、同時に、大学院修了生への就職チャンス拡大も意識してのことです。

ここでは、防災と環境または国際化と学際化がキーワードでしょう。

二番目として、やはり研究活動の活性化と多様化をとりあげましたが、古くて新しい難問課題です。

冗談交じりで、土木工学専攻の目標は、「東工大に追いつけ、追い越さない」と、学生に言うことがありますが、一つの現実的な方向性とは考えています（あくまでも、個人的な戯れ言ですが）。

大学院教員一人一人の腕の見せ所と身を引き締

めております。

最後に三番目と四番目は、専攻名の変更とこれに伴うカリキュラム再編と科目目の再編が正念場を迎えています。

これにつきましては、すでに公式非公式な場を通じてご報告しておりますとおり、土木工学科が都市基盤工学科に名称変更することに連動し、同じく、都市基盤工学専攻に変更するべく、準備中です。このことについては、再度、機会をいただき、ご報告したいと思っております。

四、おわりに

最後に、緑土会からの更なるご支援を再度お願いを申し上げます。

これは、工学部とは違った角度からの手立てと可能性が考えられます。

従来型の共同研究／委託研究はもとより、産業界／建設業からのニーズとシーズの提供、最新情報の提供、大学院課程への入学（社会人入学制度の活用）、学位論文の提出、種々の講演／講義、学生への就職情報提供から叱咤激励まで、いろいろなお付き合いとコラボレーションが考えられます。

思い付きですが、毎年三回ある大学院生の研究発表会（公聴会、パネルディスカッションを含む）に際し、緑土会に招待状を差し上げ、オープンディスカッションとすることも可能です。

よいものがあれば、研究成果なり、学生なり、はたまた教員なりを「いい値段で買っていただく」のもやぶさかではありません。共同研究は、従来からある、「企業／団体から研究費の提供↓

大学から成果報告（リターン）」という図式ばかりではなく、共同チームによる新しい学際研究の掘り起こしと第三者機関への研究提案、あるいは特許の申請なども一案ではないでしょうか。

本学には、このための受け皿として、産官学交流センター（所長・中村英夫教授）が発足し、二年目を迎えました。これからの活用が期待されます。

最後に、本学の情報提供ツールとして、大学のWebサイト（ホームページ）を改めて、お知らせします。

武蔵工業大学：<http://www.musashi-tech.ac.jp/>

土木工学科／土木工学専攻：<http://cipc04.civil.musashi-tech.ac.jp/civil-j.html>

折りに触れ、ご覧いただきたく、ご活用ください。また、私事になりますが、鉄筋コンクリート工学の学内／学外の情報サイトとして、「もっと知りたいコンクリート講座」を開設／運用してあります。併せて、お知らせしました。

<http://e-pc8.civil.musashi-tech.ac.jp/RC/>

インターネットを介した情報網を英語でウェブ（Web・蜘蛛の糸）と言います。緑土会の現会員五、〇〇〇余名のネットワークは、本学の人的なWebとなります。この両Webの活用が、貴会と本専攻の新たな発展に寄与することを大いに期待します。



堀川 清司 学長

緑土会創設七〇周年をお祝いする

昭和五（一九三〇）年三月に、本学の前身である武蔵高等工科大学土木工学科を四一名の方が卒業されたのを機に緑土会が創設され、本年三月に七〇周年を迎えたとのことです。その長い伝統を育んでこられた緑土会会員の皆さんに、心からお祝いを申し上げますと共に、敬意を表する次第です。

私は、学長に就任以来今日までの二年間に、武蔵工業会支部の総会その他に出席する機会が数多くありました。そのような機会に、緑土会の方々が会の運営に積極的に関わっておられる姿をよく見かけ、これは学科の性格、あるいは職業柄によるものかと感じました。ある所の総会でしたが、土木以外の方が、「これは土木の会合だ」と評しておられました。それに緑土会会員が力を合わせて、会を盛り上げようと努力しておられる証左とも申せませう。この様に緑土会の皆さんが、各方面の重要な立場で活躍しておられるのを見て、驚きと共に大きな喜びを感じています。

近年公共事業に対する風当たりが強くなり、時にこの事業を悪とする論調には危惧を感じます。かつて公共事業を金科玉条とする風潮の時もあったように思いますが、公共事業によって、市民

がどれ程安全で利便性に富む生活を営むことができるようになったか、その効用についても正當に評価してもらいたいものです。

上記のような風潮と土木の仕事をつらねる三Kの代表とする市民感覚が影響しているのでしょうか、本学工学科土木工学科への志願者数は低迷しているようです。また教員の話によりますと、学生のやる気が低下してきているとのことでもあります。このような事態をいかにして改善するかは、現在土木工学科の大きな課題になっていると思います。

さて土木学会では、今から一三年前の昭和六二（一九八七）年に一月一日を土木の日と定め、毎年啓蒙活動を展開しています。これは土木の文字を十一十八に分解してこの日を設定したのだと聞いています。緑土会会員におかれましても、折にふれて土木の仕事をもっと紹介し、中でも青少年の理解を求めようという願ひがあります。そして情熱を傾ける若人が本学土木工学科に進学してくるよう、学外からも御支援下さい。

ここに緑土会の七〇周年をお祝いすると共に、今後ますますの発展を祈念してやみません。



萩野 昭夫 武蔵工業会 理事長

緑の豊かな大地を想う

(三七七卒)

緑土会の皆様、発会七〇周年の記念の年を迎えられ、誠におめでとうございます。

武蔵工業大学の各特別同窓会と母校の全同窓生で構成する武蔵工業会とは、一つの協同体として綿密な連携のもとに活動していただいております。緑土会の方々のご尽力に対し厚く御礼を申し上げます。

「緑土会」と命名された土木工学科同窓会の五、〇〇〇名を超える会員の皆様が、国内ならびに海外の各地に広く展開され、多くの分野で要職につかれ、国際社会に貢献されておられる現状と、今日までに築いてこられた数多くの実績は、武蔵工業会としての輝かしい歴史の一頁を飾るものと確信いたしております。

近年においては、急速な科学技術の進歩と相俟って、地球環境の保全が、国際的に重要な課題として取り上げられておりますが、「緑土会」の名は、この問題を「先見の明」でとらえられ、世界の各国が自然環境のことに目を向けるよりも、技術革新に優先注力していた昭和初期の頃から、将来の幸せな環境を配慮のうえ開発建設を進められてこられたことを、如実に表わしているものと

思考いたします。

それは、地球上の自然環境である緑と大地を大切に、クリーンで美しい環境の保全を考えながら、必要とする科学技術を駆使して、人類の生存と自然との調和を図り、より豊かな生活環境を創出して行くことに、土木工学の面から志向する会であると申し上げます。

新世紀の未来に向け、豊かな自然環境を保ちながら、住み良い社会として限りなく発展して行くことを願い、緑土会の方々と、共にある各特別同窓会の皆様とが、共存共栄のもとに、ご自身の未来構想の実現を目指して活躍されて行かれることは、さらに、武蔵工業大学同窓生の、社会への貢献が世間から高く評価され、武蔵工業会ならびに母校武蔵工業大学の素晴らしい将来への展開に継がれるものと推察いたします。

緑土会七〇周年記念にあたり貴会の益々のご発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



伊藤 泰郎 工学部長

七〇周年記念を祝して

武蔵工業大学の前身校を出発点として、土木工学科が創設七〇周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

土木工学科は電気、建築と共に本学が昭和四年に創立と同時に開設されました。

しかし、現在でも創設当時と同一学科名称を守っているのは土木工学科だけです。

したがって、この期に創立七〇周年を晴れて迎えられる学科は、土木工学科だけであると言えます。その意味では伝統ある緑土会の皆様には改めて工学部としてお祝いを申し上げます。

武蔵工大の卒業生の中でも土木の卒業生がいかに活発に活躍しているかを知らしめられることがあります。

これは東京では余り気付かないことです。

その一つは大学として父母連絡会で各地に伺った時、工業会の地方支部の方々にお世話になった折、もう一つは武蔵工業会の地方支部の会合に参加させていただいた折です。

支部の役員も、また実質的に各支部の運営に采配を振るっておられる方々も、土木工学科の卒業生が多いことです。

このことは土木工学科の卒業生は大学卒業後、いかに地域に密着し、地域振興に貢献した活躍をしておられるかの証左でありましょう。

これは学科の性質にも依存しますが、土木工学科の卒業生が伝統に持っているバイタリティーによるものと、改めて敬意を表します。

本学は創立七〇周年を迎えましたが、これは二十一世紀への入口でもあり、今後一八歳人口は減少し続けます。否応なしに大学を変えていかなければなりません。もちろん、土木工学科もその例外ではありません。

この期に、活力ある緑土会のOB諸氏からの大学の将来、土木の将来に対する有益なアドバイスが頂ければ幸いです。

緑土会の卒業生諸氏には、今後も土木工学科で培われたバイタリティーを更に発揮されて、社会の牽引者になっていただき、益々活躍されますことをお祈りし、大きな期待も寄せております。

七〇周年祝賀会

緑土会七〇周年記念祝賀会、開催される

皆川 勝 土木工学科 助教授

平成二二年一月一日に七〇周年記念祝賀会が、東京新宿のヒルトン東京ホテルで盛大に催されました。伊藤泰郎工学科長、堤井信力工学科研究科長、川名宏次郎事務局長をはじめとして三〇名のご招待者、母校土木工学科からほぼ全員のご出席を得て、会員およびその同伴者を加えると総勢三〇〇名にも迫るご参加を得て、まさに七〇周年を飾るにふさわしい盛会となりました。

司会の五一年卒・鈴木良春氏の開会宣言に続いて、中部恭二会長の挨拶、ご来賓として工学部長（兼学長代理）伊藤泰郎先生、武蔵工業会理事長萩野昭夫様、土木工学専攻主任教授（兼土木工学科主任教授代理）吉川弘道先生からご祝辞を賜りました。ご祝辞の概略は別掲の通りです。それぞれのお立場から緑土会の創設七〇周年のお祝いを頂戴し、特に吉川先生からは土木工学科の名称を平成一四年度より都市基盤工学科へと変更するべく申請に入ることが述べられ、同窓会のご理解を訴えられました。



次に、中部会長より本七〇周年記念事業に寄せられた醸金の一部が教育研究資金として土木工学科・綾日出教先生に贈られました。本資金が学科名称変更ならびに教育にかかわる諸改革に生かすべきとの決意が綾先生より述べられました。

これまで緑土会では功労者表彰をしていませんが、七〇周年を記念して、特に功労大であった諸先輩方に中部会長より感謝状と記念品が贈呈されました。昭和七年ご卒業の渡辺幸一氏は、永年にわたり武蔵工業会福島支部長として武蔵工業会・緑土会・母校の発展に寄与されました。当日は、三七年卒の佐藤安宏氏をご欠席の渡辺氏に代わって賞を受けられました。（佐藤氏のご尊父ならびにご子息は、ご本人と共に母校土木工学科のご卒業で、親子三代武蔵の土木です。関連記事をご参照ください。）

昭和一三年ご卒業の大政正二郎氏は、第二代緑土会会長として、昭和四八年四月より昭和六〇年三月まで六期一二年のながきに亘っ

て緑土会の発展のためにご尽力され、さらに昭和六一年四月より二年間、第一代武蔵工業会理事長を勤められました。

小林康一氏は昭和二二年にご卒業され、第四代緑土会会長を務められました。故小林博第三代会長から引き継がれた平成五年四月より、現会長の中部恭二氏に引き継がれる平成九年三月までの二期四年の会長時代に緑土会の諸改革がスムーズに実行できるよう円滑な会運営を旨とされ、実行担当者からは名会長として慕われました。

神山光男氏は昭和二七年のご卒業で、みなさまご承知のとおり、平成一二年三月で母校を定年退職されるまでの間、常に母校出身の教員として学生に暖かい教育を施され、また土木工学科教授であると同時に付属中高の校長として私学冬の時代の学校経営に携わられました。また、緑土会においては、ながきに亘って副会長として会長を大学勤務者の立場から補佐されました。

四方の今後のますますのご健康とご健勝を祈念して、会員からは盛大な感謝の拍手が鳴り止みませんでした。

次に、現会長の中部恭二氏が社長を勤められる日本設計株式会社から同社創設三〇周年を祈念して学術基金が緑土会に贈られたこと



に対して、感謝状が小玉克己副会長から吉岡千之常務取締役（四二年卒）に贈られました。同社からの学術基金のご寄贈は会社創設一五周年の折から二度目にあたります。

記念のセレモニーを滞りなく終わり、小玉先生のご発声で乾杯となりました。

会においては、祝賀会担当グループが作成したコンピュータによるスライドにより、緑土会と母校の七〇年の歩みが映写され、懐かしい顔、古き校舎や並木道、恩師の若かりし頃の尊顔などなどに食い入るように入入る方々、時間の経つのを忘れて同期で歓談される方々、恩師と数十年前に戻ったように懐かしい昔話に花を咲かせる方々、一時間半の間は瞬間に過ぎてゆきました。

最後に、元空手部の堀口利一氏（三七年卒）によるエールと校歌斉唱につづいて、長島睦副会長（三七年卒）より閉会の言葉が述べられ、七〇周年記念誌を参加者および醸金のご寄付をいただいた方々に近々お届けする予定であることが披露されました。

なお、祝賀会に先立って行われました定例総会においては、通常議題のほかに、片田敏行氏（五〇年卒）を副会長、皆川（五四年卒）を総務部長にすることが決まりましたので、あわせてご報告します。

中部恭二 緑土会 会長

三十七年卒の中部でございます。

本日は、ご多用の中、緑土会七〇周年記念祝賀パーティーに沢山の方のご出席を賜り、ありがとうございます。

先程、六時から開催されました定例の総会の議案も全て決議され終了致しました。皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

本日のこのパーティーへの出席者は、おおよそ二五〇名でございます。ご来賓と致しましては、本学の工学部長、伊藤泰郎先生、工業会からは萩野昭夫理事長、そして各科のOB、土木教室の先生方、教職員の方、そして本日は三〇名近い奥様方にもご出席を頂いております。本当にありがとうございます。

さて、この七〇周年に対しまして緑土会は醸金を募りました。醸金の賛同者は六三〇名にも及び、その醸金額は五二〇万円になりました。これを以って、緑土会は七〇周年記念事業として七〇周年記念祝賀パーティー、記念誌及び名簿の発行、そして土木工学科への寄付等、この様な事業を行うことができます。会員皆様のご協力に対しまして、厚く御礼を申し上げます。(拍手)

さて、昭和五年、一九三〇年に土木の第一回の卒業生を送り出して、今年二〇〇〇年、めでたく七〇周年を迎えることができました。この伝統を築いて頂いた先輩諸兄に感服し、感謝する次第でございます。この伝統をこれからの若い人がしっかりと引き継いで発展させてくれるものと私は期待しております。

日本国土の建設を担うべく、若くて優秀な学生が土木工学科に入学して参りました。皆さんご存知の様に、昭和三九年、新幹線が開通し、東京オリンピックが開催されました。これを契機に日本には大々的な国家プロジェクトが目白押しとなり、本学の土木の卒業生が全国津々浦々でこれらの仕事に従事され、戦後の高度成長経済の礎になりました。

ご承知の様に、緑土会会員の結束の強さはつとに有名でございます。特に工業会の各支部での活躍にみられる熱心さは、本学の発展を支える一助となっております。

しかし、バブル経済崩壊後、今、土木の環境は変わりつつあります。若い学生の土木への志願者が低迷しており、問題も山積しております。建設業界だけでなく、本学の土木工学科も大きな改革を迫られております。その中の一つとして、土木工学科という名称を時代のニーズに合わせて都市基盤工学科という

名称に変えることが、現在検討されております。しかし、先程申しましたように先輩方が築かれたこの土木の伝統というものは決して失われていくものではありません。私は確信しております。

こういう中で七〇周年記念パーティーが開催される訳でございますが、一つの大きな転機として、この記念事業は我々緑土会の心の記念碑とし残っていくものではないかと思っております。

本日はご多用の中、緑土会七〇周年記念パーティーに多くの方々にご出席を賜り、この七〇周年を祝って頂きました。特に三〇名近い女性の方に来て頂いて、花を添えて頂いております。重ねて御礼申し上げます、私の挨拶と致します。ありがとうございます。(拍手)



伊藤泰郎 武蔵工業大学 工学部長

ご紹介いただきました伊藤でございます。本日は、緑土会七〇周年記念祝賀会がこの様に盛大に行われますことを心からお祝い申し上げます。また、こんなにすばらしい祝賀会にお招きいただきましたことを心から御礼申し上げます。

お礼申し上げますと同時に、これだけ土木の卒業生の方々が大勢集まって来ること事態どちらかといえますと羨ましく思われるというのが本音であります。これは、多分、OBの方々の力もあるでしょうけれども、土木の先生方によるところも相当影響しているのではないかと思います。土木工学科の先生方は他学科に比べて一番年齢構成もよく、実にすばらしい先生がそろっているのは、大学の中で見ましても、どなたが見ても明らかであります。

先ほど、中部会長からお話がありましたけれども、土木工学科の卒業生の方々が地方も含めて活躍しているということは、私も強く感じているところであります。その一つの例を挙げますと、私たちが大学として入試や、または工業会の支部総会で地方に伺ったとき

に、いかに土木工学科の卒業生が支部を牛耳っているかということであります。活躍していただいているのが土木の卒業生ということ、今、つくづく感じている次第であります。これはやはり学科の性質によるのかもしれませんが、在学中、土木の先生方が、いかにバイタリテイに富んだ教育をされたかということの一つの現われであるように私は感じております。

大学自身も七〇周年であります。他の学科はこれだけ盛んな祝賀会を開くことはできません。今日の祝賀会は大学としてのお祝いにもしたいと思います。七〇周年を期に、来年からは二十一世紀に入ります。大学も少くとも今までの大学のままではいられません。相当大胆に改革を進めなければならぬ時期であります。そういう意味からしまして、工学部九学科ある中では一番スタッフのそろっている所にやっぱり牽引車になっていただくなければならず、土木の先生方にはそれをお願いをしたい。このお祝いの席ではございませすけれどもこの点をしっかりとお願いをさせていただければと思います。

卒業生の方々も、土木工学科に対してはもちろんの事ですが、できれば大学全体の将来に対してもいろいろすばらしいアイデア、ア



ドバイスをいただければ幸いに存じます。この機会ではございますけれども、ぜひ先輩諸氏にお願いを申し上げて、今日のお祝いの言葉にさせていただきますと思います。創立七〇周年記念祝賀会本当におめでとございます。(拍手)

萩野昭夫 武蔵工業会 理事長

ただいまご紹介にあずかりました昭和二十七年に電気工学科を卒業いたしました萩野昭夫でございます。緑土会の皆様方、会の設立七〇周年の記念すべき年を迎えられまして、本日は大変おめでとございます。また、このように盛大な祝賀会にお招きいただきまして、厚く御礼申し上げます。

緑土会の皆様方には、武蔵工業会ならびに武蔵工業大学の発展のためにいろいろと積極的に活動を展開していただいております。武蔵工業会へのご尽力に対しまして、この席をお借りしまして厚く御礼申し上げます次第であります。

先ほど、中部会長の方からもお話がありましたように、緑土会の会員総数は六、〇〇〇名を超えており、会として年々着実に発展して来ておられます。緑土会の皆様方は、国内だけではなく、海外へも非常に多方面に展開され活躍しております。その貴重な実績は、武蔵工業会の長い歴史の中に輝かしい礎として記され、また、後世に引き継がれていくものではないかと思っております。

今世紀後半の特に近年には急速な科学技術

の進歩がみられ、私は特に土木工学の分野の発展は目覚ましく非常に技術革新が進んだのではないかと感じております。ご承知のように、日本列島を東西南北につなぐ鉄道や道路の幹線網ができております。また、豊富な水資源を活用する電源開発とか、最近では海上に広大な施設用地を造成していくというような事業が展開されております。このような事業展開に伴って、私たちを取り巻く環境が大変近代化いたしました。その一方では地球環境への悪影響の問題が出ております。私は緑土会という会の名称は、このような国際環境の問題に先見の明を持たれて対処していくということと命名されたのではないかと受け取っております。

緑土会の皆様方が、今までの素晴らしい実績を基に大地の緑など自然環境のことを大切に、これからもクリーンで美しい幸せな環境の造成と保全を考え、人間と自然との調和を図りながら、さらに豊かな生活環境の創出について土木工学の面から事業の展開を進めていかれ、来年から始まります新しい二十一世紀に、ますますのご発展をされますことと共に武蔵工業会ならびに武蔵工業大学が限りなく発展し続けることを祈念いたしまして、緑土会設立七〇周年記念の挨拶とさせていただきます。

きます。本日は、緑土会七〇周年、おめでと
うございます。(拍手)



吉川弘道 土木工学科 専攻主任教授

こんにちは、土木工学専攻主任の吉川です。本来ならば岩崎主任教授からごあいさつすべきところ、海外出張ということで、私が土木工学を代表しましてごあいさつさせていただきます。

この場でいろいろお話ししたいことがありますが、時間も限られているようなので、大切なことをここで皆さんにご報告し、ご理解をお願いしたいと思います。

先ほど、中部長からありましたように、私たち土木工学科、土木工学専攻は、名称を都市基盤工学科及び都市基盤工学専攻に変更すべく、現在準備中です。平成一四年度、二〇〇二年からの実施を予定です。ここに、まずご報告しますとともに、その趣旨といいますか、方向性を少しお話しさせていただきたいと思います。

これまで主として物づくり、あるいは設計を含めて土木工学というを進めてまいりましたが、社会的変化あるいは就職も厳しい折に、さらなる発展を期するという意味で、英語名でありますシビル・エンジニアリングということをもう一度ひもときました。本来

意味する社会基盤工学あるいは社会基盤、インフラストラクチャーの整備ということで、土木工学、シビル・エンジニアリングを考えてみました。それに相ふさわしい名前としては、社会基盤がよからうということで、さらに私たちの陣容を勘案して、もう少し限定した意味で都市基盤工学ということを選びました。

ここで一つのポイントは、英語名としては、今までどおり、シビル・エンジニアリング、学科でいえば Department of Civil Engineering ということです。そういう意味では、本来の土木工学に戻ったと考えています。これまでのハードウエア、物づくりを含めて、ソフトウェアあるいは社会資本投資、防災工学、そういうことまで含めてやろうということで、決意も新たに再スタートする所存です。

もう一つは、就職ということが私たち大学から見て出口だとすれば、もう一つ大事なものは、入り口、つまり受験生、高校生向けということです。そういう高校生あるいは一般的な社会に向けての名前からいっても、やはり都市基盤、あるいは都市基盤工学というネーミングが耳当たりがよからう、ということがもう一つの理由です。

本件については、後戻りなしということで、



これからいろいろ強力に進めていきたいと思っています。加えて、大学院の学科目（研究室）の名前も変更いたします。先ほど申しましたように、入り口という高校生からの入試は、今、本学は極めて厳しい状況にあります。幸い、先輩方のご協力により就職の面では何とか体裁を保っているんですけども、実際のところ、やはり高校生の目から見ると、土木全体としても非常に厳しい状況であります。この名称変更を契機に新たに躍進するべく方策を画策中です。この機会を新たに、緑土会の先輩方いろいろな面でご支援、ご協力あるいはご提案をいただいて、さらなる発展を期したいと思っています。ひとつよろしくお願いいたします。（拍手）

長島 睦 緑土会 副会長

宴たけなわではございますが、この辺で
開きにさせていただきますと思います。

本日の七〇周年祝賀パーティーは、皆様の
御協力を賜り盛大に挙行することができまし
た。本当にありがとうございます。

七〇周年記念事業で記念誌を発行すること
になっておりますが、この七〇周年祝賀パー
ティーの模様を記念誌に掲載したいと考えて



おります。

現在記念誌を制作中でございます。来年三
月頃には、皆様のお手元に郵送いたしますの
で、御了承いただきたいと思えます。

それでは、校歌で盛り上がったところでご
ざいますが、七〇周年を記念いたしましたして、
二十一世紀に向かって緑土会が、ますます発
展されますよう、また、御参会の皆様のみす
ますの御健勝を祈念いたしましたして、万歳三唱
で締めたいと思えます。

皆様の御協力をよろしくお願いいたします。



(拍手)

武蔵工業大学緑土会 万歳！ 万歳！ 万
歳！

どうもありがとうございました。(拍手)



若き日々の思い出

六〇年前の思い出

昭一四土卒

渋谷高雄



緑土会七〇周年記念おめでとう。

私も昭和一四年に卒業以来六十数年になり、まるで夢のようです。

昭和九年に千葉県立東葛飾中学（現高校）を卒業しましたが、戦争のため兄が応召され、農家の次男坊として、仕方なく農業に従事したのです。姉、兄、私と三人兄弟で、私が末っ子で、一〇歳の時に父親が他界したため、喧しい母親に育てられまして、田畑の耕作で作物（野菜類が多い）は毎日市場の職員が車で取りに来ておりました。そのため朝は五時に起き、夜は暗くなるまで働くのです。

こんな生活が約二年間続き、三年目に兄が軍隊から召集解除で家に帰って来た時は、本当に家中安心しました。暫くしてから私の将来の生活問題について、母親を中心に姉、兄、私との相談です。

私は「農業は不適です。」と話す。

母親は「サラリーマンとして暮らすには、最少限度、大学か専門学校を卒業せねば駄目だ。」と強く語る。兄も母と同じ意見でした。

「上級学校を卒業するには、なるべく安い学費の学校をセレクトして公立の学校に入学するには、お前は勉強不足で無理だ。」と母の談です。実は私の中学同級生が武蔵高工に在学していることを知りまして、同じ武蔵高工に入学したのです。入学試験の口頭試問の時に、土木科の高山教授から「学費は誰が出してくれるのか、また本校は個人主義の学校だから入学したら良く勉強してくれ、成績が悪いと官庁は勿論大会社にも雇ってくれないよ。」

その言葉は今でも忘れず思い出す。一

年生、二年生、三年生の時も良く勉強したが、クラスは五〇名位の生徒の中で一年、二年位の浪人者はクラスの三割はおりました。皆優秀で私は一〇番以内の成績には、どうしてもなれなかった。私の「親友」三人は常に一〇番以内の成績でした。

とにかく三年生の五月頃には、大会社は入社決定するのです。官立学校と同等の待遇でした。私も卒業すれば就職はなんとかなると、思っておりました。

ところが三年生卒業近くになって、軍隊から召集令状です。千葉連隊に入隊後三ヶ月目に、我が部隊は北支那方面（徐州付近）に移動です。大隊本部の情報部に属し、戦争には時には参加しましたが、忙しい職務で毎日、夜一二時〜一時頃の時間に文書で隊長に報告です。約六ヶ月

ほど滞在すると、私の体は少し変になり、軍医さんに診断してもらいました。

「洪谷よ！ 内地へ帰って、陸軍病院に入院し、再検査をした方が良い。」との話です。内地の陸軍病院でも確実な病名は不詳で、とうとう洪谷の日赤病院に入院し、初めて大手術をしたのです。

約二年間入院し完全に健康を取り戻したところ召集解除となり、学校に行つて就職に付いて話しました。測量の先生が「川崎市水道局で大工事があるので募集しているから、今日中に川崎に行きなさい。」との話です。午後になって、秘書課に行

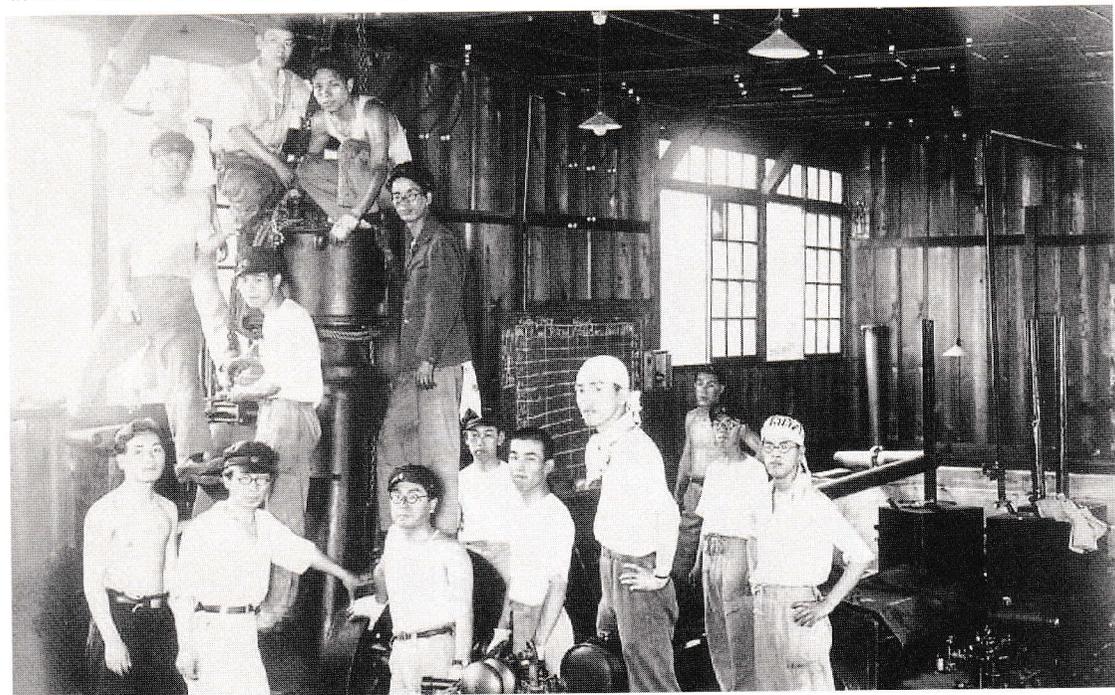
きましたら「良く来てくれました。明日から水道局に勤務して下さい。」とのこと。

「後輩二名がおりますから一緒に仕事するようお願いします。」とのことで、三十数年間高橋さんと仕事をやりました。大変お世話になりました。彼は局長級までになりました。



洪谷高雄（向かって左）

昭和14年頃 大岡山キャンパスから尾山台キャンパスへ引越



学生時代の思い出

昭一四主卒

松永 進



今回「緑土会」より、学生時代の思い出をとのご依頼を受けました。

卒業してから満六一年にもなりますと、日頃からの物忘れと同様、思い出すのに苦労するこの頃ですが、少しずつ書いてみたいと思います。

その当時は私の近親者が佐世保海軍建築部におりまして武蔵高工土木科を勧められ、一年に上京、受験しました。その時の面接試験官は高山先生で、学科試験の出来、入学の動機とか色々質問され、先生には大変好感を覚えました。

学生生活では学校の近くに間借りをし、食事ももっぱら大衆食堂を利用しました。娯楽といえば、玉突とか卓球をしたり、洗足公園へ出かけボートを漕いだりしてよく遊んだものです。日曜日などは有楽町で下車し、銀ぶらや浅草などへ映画を

見に出かけました。

授業はおもに教科書を補足しながら教わりました。高山先生の応用力学などは講義で筆記するのに大変苦労しました。所々に脱字したり、誤字の整理など、帰宅後一仕事でした。製図は金子先生で、橋梁の図面で鉄筋の配置などがわからず長い時間をかけたようです。

一二年には日中戦争が勃発し、教練も厳しくなり、下志津原野での演習や代々木の練兵場にて東京の各大学生約一万人の閲兵式に本校も参加し、その壮大さに驚き、感激したことは今でも忘れられない思い出の一つです。

秋の中頃には土木科同級生全員で工事見学を兼ねて年に一回は温泉へ一泊旅行があり、懇親会になって酒が出て芸者も出ては歌をうたい、夜遅くまで酒を飲み

かわしました。

夏期実習は地元佐世保市のダム工事で測量を実習し、三年生のときは宮崎県西米良で西松組の発電所工事現場へ学友三名と山奥の飯場に寝泊りして測量に励み、自信をつけることが出来ました。

最後になりますが、就職は一四年二月海軍省で身体検査を受け、三月一六日には卒業式があり、同月二一日には佐世保海軍建築部に採用が決まり、翌日から職務につきました。

終戦になって佐世保市役所に就職し、定年を迎え、無事に退職することが出来ました。

現在こうして生きながらえることの出来るのも母校のお陰と感謝いたしますと共に、緑土会七〇周年記念事業のご成功とご発展をお祈りします。

私の経験したこと

昭一六五年

漆山雅教

在学中に大岡山から尾山台に移った時代だった。尾山台当時の猪狩校長は陸軍中将だったので、軍事色華やかな時代であった。

軍事教練で多摩川の土手下に散開、交代で歩哨に立ち、一服する者も有り、スリル満点。

夏休みに、勤労奉仕と称し、土木科は砂利集めの土方仕事が割り当てられ、汗まみれの一日も良き思い出である。

緑土会の幹事長を命ぜられ、演説の苦手な私は往生した。

卒業設計は大島の岡田港を模して港湾の構築設計でケーソン（潜函）の設計計算から海上曳航・沈埋工法・港湾設備等計画は広がるばかりで、設計しているうちにいつの間にか夜が明けていた。

お陰で港湾関係の先生から最高点を頂

いた。

部活では山岳部・自動車部のリーダーを勤め体力と技術をマスターしたのが学業と共に、戦中戦後に大変役に立った。

台湾ではダム建設の調査のため険しい山中での測量・地質調査に従事しているうちに開戦を迎え、南方志向で転職し、フィリピンでは農業関連の仕事で、兵隊二人の護衛のもとに、ポケットコンパス一つと歩測で、広大な農場の地図を作った。

その地図がゲリラ掃討作戦に使われたりもした。

約半年間の山中の逃避生活も、山岳部で鍛えた体力と知識のお陰で切り抜けて、無事生還し得た。

フィリピンで、ガソリン不足の折、アルコールで乗用車を動かしたこともあつ

た。

マイカーは戦後五台乗り潰し、今のは六台目。

五台目の車で日本全国、北は北海道宗谷岬から南の九州佐多岬までドライブ踏破した。

学校を卒業以来、波乱と数奇な運命に翻弄されたが、学業で得た知識と「門前の小僧習わぬ経を読む」で万事興味深く物事に関心を持ち、習得した知識を、臨機応変に活用応用出来たことが、今日の私の姿であると自負している。

応用問題を解く如く、学校・社会で得た知識を応用し活用出来る生徒が育って欲しい。

戦中における学生生活

昭一九五辛

江口祐一

中国で一〇年を超える戦争が続いてい
たとは言え、学生、生徒の生活は、軍事
色が少しずつ強化されるくらいで、平穩
な毎日でしたが昭和一六年は、現代史の
転機となった年でした。ナチス、ドイツ
の大軍が突如ソ連に侵入したのに続き、
一二月には日本軍が真珠湾を攻撃し、そ
れまで参戦してなかったアメリカを巻き
込んで第二次世界大戦が本格化しました。
緒戦はフィリピン、ビルマなど南方戦線
を含め、日本軍の大勝で幕を開けまし
たが、国力の差は如何ともしがたく攻勢は
半年ほどしか続かず、運命は破局に向か
って暗転していきました。

貧しく、苦しい学生生活でしたが、土
木に集まった若人達は、大陸への夢やロ
マンをかきたてられ、海外に雄飛する日
を想いなかなか元気でした。学校での教

練、各科対抗の競技、関東地区の大学、
高専一〇〇キロ行軍など、目覚ましい働
きを發揮したものです。

一般の青壮年男子が召集されたり、軍
需工場に徴用された後の農山漁村や一般
工場は、老人や女性が生産を支えており、
当てにできる戦力、生産力は男女学生、
生徒しか残っていない情勢下、政府は
「修業年限短縮」、「徴集延期停止」、い
ゆる学徒出陣、徴兵適齢の一九歳への切
り下げ、軍需生産への女子挺身隊の拡充、
男女学生生徒の勤労働員通年化等国民を
根こそぎ動員し、私たちも軍需工場で石
炭を運んだりハンマーで鑄鉄を砕く等の
力仕事をさせられました。仕事は大変辛
かったのですが動員で行くと特配があり、
食に困っていた毎日から開放されるので、
一時は喜んだものです。

学生生活を振り返ってみると、思い
出すのは衣、食、住に苦労したことす
が、一杯の雑炊を求めて走り回り、すき
腹を抱えて軍事教練で匍匐前進をさせら
れたことなど、今となるといろいろの辛
さなどむしろ懐かしく思い出されます。

昭和一七年一月関門海底鉄道トンネル
が開通し、食料を担いでの連絡船への乗
り降り、長い下関のホームを走って東京
行きの列車に乗り換えなくてすむよう
になり、土木の仕事の偉大さを思い、一生
の仕事として選んだことを誇らしく思っ
たものです。建設の仕事も失業救済事業
のつるはし、モッコの時代を経て近代化
が進み、社会資本の整備に益々その威力
を發揮できるようになりましたが、今後
もさらなる努力を積み重ねてゆかねばと
痛感しています。

戦中における武蔵工専時代

昭一九五年

後藤恒次

昭和一六年一二月八日ハワイの真珠湾攻撃によって太平洋戦争の火ぶたが切れ翌一七年、比島マニラからのマッカーサー將軍の脱出、シンガポール陥落、ビルマ、ジャワへと快進撃が続いた。四月私立武蔵高等工業土木科に入学する（白線高下駄を諦める）。

校長は陸軍中将猪狩亮介、配属将校中子大佐、教練金子中尉他で軍事色の濃い学校であった。

〔綱領〕

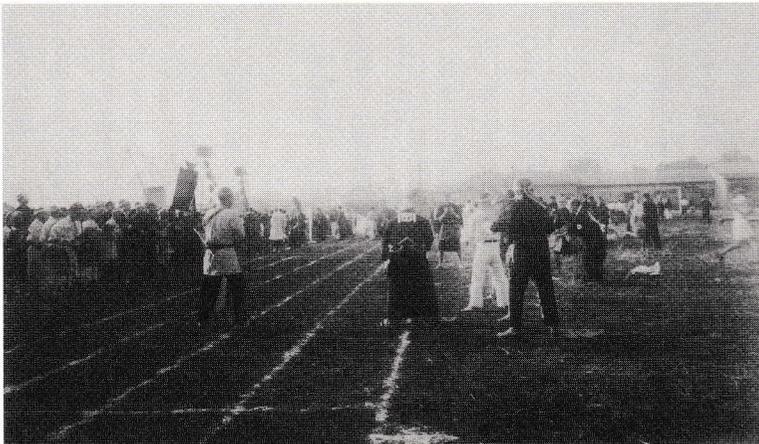
- 一、聖旨を奉体し忠君愛国の至誠を致すべし。
- 一、校規を遵守し学業に励み皇国有用の人材となるべし。
- 一、心身を鍛練し質実剛健負荷の大任を全うすべし。

クラスメートは北は北海道から南は鹿

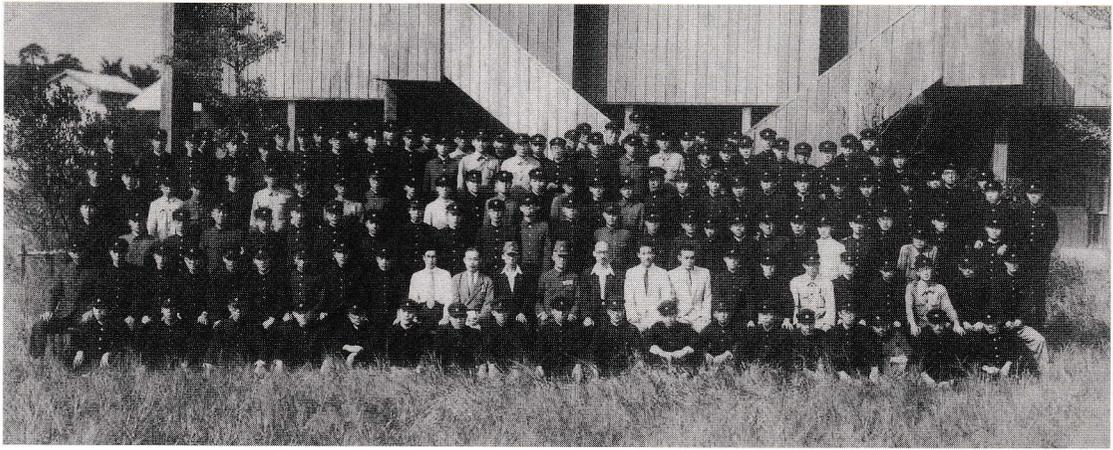
児島と全国から集まり特に韓国の上本文基（金溶會）君は秀才で帰国後母国で工学博士号をとる。橋本君（旧姓阿部）は何故か医学博士となる。

入学後一週間の躰教育によって初めて本校生徒たる自覚を持つ様になる。そして週一回四時間ぶつ続けの教練によって肉体を鍛え精神を養っていった。武道場における猪狩校長の訓話はかなり好評で、碧巖録にある「日日是好日」の解釈や託孤の辞「曾子曰 可託以六尺之孤 可以寄百里之命 臨大節而不可奪也 君子人與君子人也」などは今でも心に残る言葉である。当時の学生は「何はなくとも皇国の為に捨てる命が一つある」の心境だった学校生活スケッチ集を二つ三つ披露して見よう。

一、教室オーケストラ……ドイツ語の



運動会



昭和18年春土木科2年全員（4列目左から6番白い服）

時間である。「教師はさる高校の少壮教授」、時ならぬ菩提樹のメロデーがどら声に乗って流れだした。音頭取る先生の声に和して初めて歌うドイツ語の歌。この前欠点を取って青くなった者とは別人の様に得意気に歌うその面こそ見物である。歌となると今まで涎を垂らして眠っていた御人もむくむくと鎌首を持ち上げて歌い出すから奇妙である。黒板に書かれたドイツ語をすらすらと歌う力量は正に百十点だ。

二、幸運と不運……〇〇語の時間だ。教師が入ってくると同時に皆平蜘蛛の如くにうつ伏してひたすら存在を認められぬよう弓矢八幡、八百万の神に祈っている。この瞬間だけは普段蜂の巣を突ついていた様に騒がしい教室内もシーンと静まりかえりコツコツと先生の足音のみが異様に響く。指名B君。やれやれ今日も俺は助かったぞ。隣り同士顔を見合わせてお互いの幸運を祝福しながら本を開ける、エンピツを削るなど急にざわめいてくるのだ。

三、運動会……ウワァー うわあー
Warrior ドンドコドコ ドコドコ うわあー ウワァー 今日には武蔵工晴れの

運動会である。翩翩とひるがえる緑、白、エビ茶、紫の四流の大旗のもとで競い立つ若人の熱戦が今や正に繰り広げられんとしている。こちら応援団の連中ははやくも装いを凝らして……（以下紙面の都合で削除。昭一九年報国団誌第三号に記載）。

日米海軍の明暗を分けたミッドウエー海戦後、圧倒的物量の米軍がガダルカナル島に上陸し、日本軍の玉砕は続いて行く。我々は外食券食堂に並んで雑炊を空き腹に流し込んで「欲しがりません勝つまでは」と頑張っていた。一八年学徒出陣「文系学生」、一九年一〇月には我々も繰上げ卒業して殆んどが兵役に参加する。終戦がもう少し延びていたら同級生の大半が靖国神社に祭られる運命だったと思う。

汚職が多発し金目当ての殺人が横行する日本、そして目的感のない少年達の犯罪が頻発する荒んだ現代に対して先輩友人たちがこんな日本人を作る為に死んでいったのではない。貧しかったけれど死を目前に見ながらの緊張した日々が懐かしく思はれる。物質は豊かになったが失ったものも多い。

戦中における学生生活の思い出

昭一〇七年

田村建夫



私は戦中の昭和一八年四月に工専土木科に入学しました。

尾山台の駅を降りて途中、世田谷の静寂な住宅街の坂を下って行くと、垣根越しの沈丁花の可憐さや、その芳香に暫らく足を止めたくなる景観等々、今でも強く印象づけられております。

着いた校舎も木造の清楚な建物で、恵まれた環境に、良い学校に入れて良かったと思えました。

学生達も全国からの出身者で、真面目な学生が多く、楽しい学生生活を一年間だけ送る事が出来ました。

晴れた日には広々とした一級河川多摩川と、霊峰富士に連なる丹沢の山塊も格別で、戦時中の学生生活を暗然とさせずに、何か爽やかに支えてくれたのではと感謝しております。

そして、何と言っても感銘を受けたのは、当時の猪狩亮介校長の訓示でありました。

退役された陸軍の技術将校で陸軍中將と伺いましたが、広いグラウンドの朝礼台に立たれた校長が毅然として鋭く響く声で「此の戦争は負ける。これからは必ず技術を競う時代になる。貴重な日々の中で諸君は勉学に励み、技術をしっかりと研鑽し我が国の若い力の軸となつて欲しい。」と醇々と教え諭すように激励されました。

入学早々の事で学生達は緊張して傾聴しました。戦争の真最中であり、負ける等と言えぬ時勢ではありませんし、又思つてもいませんでした。

勉強もその一年間だけで二年生からは

勤労働員の日々となり、各区や疎開工場の平坦地や丘陵地の地形測量、又沼津の海軍施設本部の技術将校の土木材料の強度試験の手伝い、更には九州耶馬溪山麓の軍工場の隧道建設の測量、最終は相模原造兵廠の地形測量で、そこで終戦の詔勅を伺い総ての勤労働員を終了し、勉強も繰上げ九月卒業となりました。

学生も非常事態に良く力を併せ頑張りました。

その後終戦の混乱を経て再度学部に入し二七年三月に卒業しました。

今思うのは猪狩校長のような冷静な先を見抜く優れた見識と決断力が如何に大切かを、今尚、問われている様な気がしてなりません。

またほんとうによい学校でありました。

海軍施設本部に動員された学生生活

昭二〇土幸

坂倉正二

動員されたところは、沼津市郊外の香貫山の麓にある海軍施設本部実験所であった。

戦争の敗色が濃くなった一九四年、土木科と建築科が海軍に動員されました。人数は夫々約五〇余名でありました。

海軍の守備範囲は、占領した島々を守ることであり、飛行場などを速やかに築造する必要に迫られることになりました。しかし海軍には土木、建築の技術者が殆んどいなかったので、人員の確保と養成を目的として技術的に幼稚、未熟な私たちが動員されたのです（そのときの記念写真）。

毎朝五時頃起床ラッパで起こされ、午後は八時頃まで働きました。晴雨にかかわらず「月月火水木金金」ということでした。

各班に分かれて行った仕事は、

一、戦車にブルドーザの刃形を付けて建設機械様の操作の実験操作

二、ダイナマイトに代えて過酸化水素を日本紙に包んだオガクズに浸して、これをダイナマイトの代用

（危険極まりない。）として

て発破の実験

三、付近から採石した石灰分を

含んだ岩石を粉碎し、これを鉄板の上で

焼いて代用セメントを生産

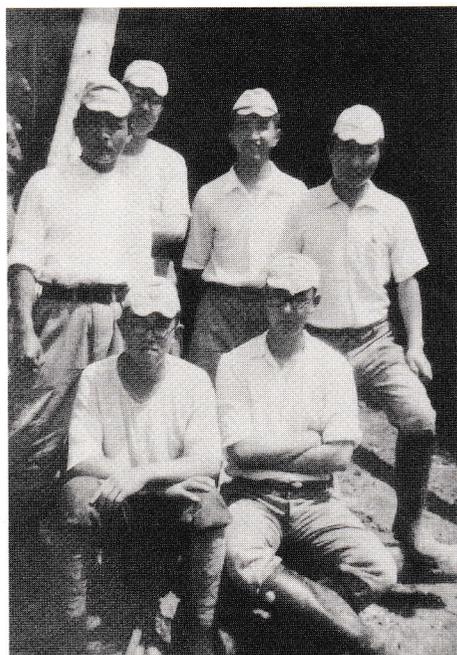
した素材でコンクリートの

布設などの実験

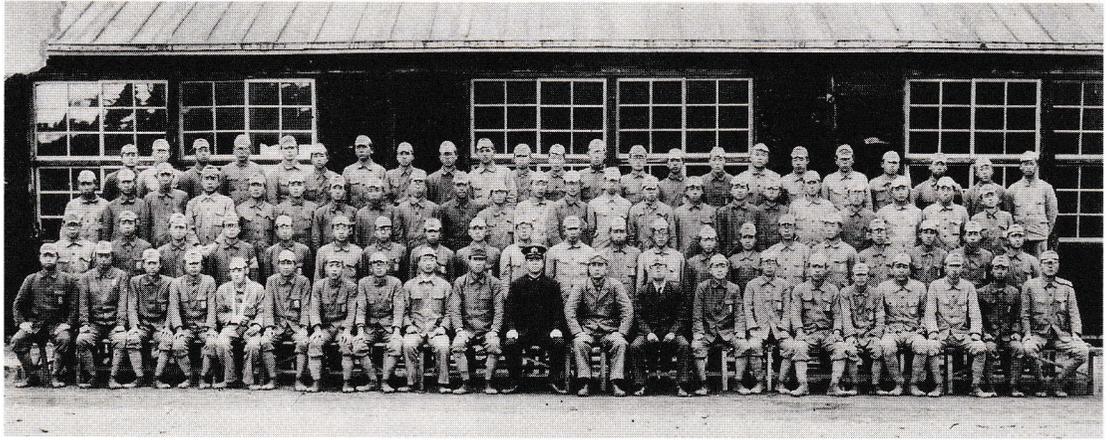
四、日本軍の要塞の原点であるトンネル築造の測量、施工の実施、実験

等でした。

この頃、本校の測量の教授であった南先生（陸軍陸地測量部出身）が実験所へ



隧道掘削工事の入口で



沼津市郊外（現、中瀬町）にあった海軍施設本部実験所での土木科、建築科の全員写真

昭和17年頃の尾山台駅



来られ、私たちに初歩から三角、地形、
 隧道、平板測量など殆んど丁寧に実務的
 に教えられたことを強く記憶しております。
 このことは敗戦後一同が社会に立った
 時、大いに役立ったことは云うまでもあ

りません。クラス会るとき、いつも話し
 合っております。
 今日考えると夢のように時代が過ぎ去
 りました。辛いことも淡い想い出として、
 ホロ苦い感じが残っています。

慰霊の月

安 義宗

昭三十五

例年がない暑さが続く毎日。

今日は、八月十五日、五年の歳月が経過、また終戦記念日を迎えた。

八月は日本人にとって「慰霊の月」である。

旧暦のお盆というだけではない。

六日の広島と九日の長崎、さらに二二日の御巢鷹と、身近なかけがえのない人を失った悲しみは決して癒えることはない。

「思い起こすと、その日は、朝からあつい日ざしが照りつけていた。」

鹿島灘の息栖かみすに駐屯、本土防衛の沿岸本土上陸作戦は、関東では鹿島海岸を経て東京に進撃す、というのが当時の常識であった。新設された護宇師団に動員下令され、兵力も僅かな部隊に編入され

毎日、空き腹を抱え、初年兵訓練にあけくれていた。

といつても、兵器らしいものは何にもなく、兵員は補充兵の集まりで戦力にはならなかった。

当時、我々には戦局の情報など、何一つ与えられなかったが、民間人との交流の内から重大なニュースを知っていた。

八月二日未明B二九による、水戸の大空襲により、市の八割強が焦土と化した惨禍は、多くの市民を悲しみのどん底に落とした未曾有の大災害であった。

そして、八月六日に広島に原爆が投下され、九日、長崎にも原爆の投下を聞いた。

世界で初めて、恐ろしい原爆の惨劇に戦争の終わりを感じていた。

話を戻そう。

朝から部隊内に、異変が起きたようだった。

週番下士官により、正午に重大な放送があるので、校庭に全員集合するようにとの達示だった。

一五日正午、声もなく静聴の間に陛下の終戦の詔書の玉音が放送された。

一同沈黙のうちに終わった。
敗戦、降伏したのである。

今は全く虚脱の状態、誰も沈黙のままそれぞれ自室へ戻った。

誰も口を聞かない。
ただ呆然たる体だった。

間もなく軍の命令を受領して帰隊した隊長は直ちに部隊の解散式を行った。

大空襲の惨たんたる焼け野原の水戸に帰る。

住む家もなく、親戚に身を寄せる。



東京千石での尾山会（71回）右端

農家の為、田んぼの手伝いをして一日も早い学校への復帰の機会を願う日々だった。

去る八月旧盆前、級友の内村君が訪ねてこられ、当時の話をしてくれた。

三月一〇日の東京大空襲で焼け出され、親戚、知人を頼って住居を変えながら、学校授業一ヶ年停止措置の学徒動員の為、横浜線、淵野辺にある陸軍造兵廠に電車で通勤、自動車エンジンを船橋迄、トラックで運搬作業に、栄養失調気味の身体で大変だったと、話を聞き戦中の学生生活を偲んだ。

全国民が、ひもじい思をしながらの日々。

私達もその一人だったが、さだかではないが秋ごろに授業再開、食べるのが一番大事だったような気がする。

二〇〇〇年、古稀を過ぎた級友は、皆元気で年、数回、東京に集まり、時を忘れて語り合っている。

最後に、渡辺真治君の住所を知っている人は、ご連絡下さい。

昭和5年頃 学生査問（代々木）



伝言板

昭三十五
中村広壽

西暦二〇〇〇年といふ世紀の節目に「緑土会」七〇周年記念事業が開催されることは、大変喜ばしい事であり、会員各位の努力の賜とお察し申し上げ、敬意を表するものである。

私達が学校を卒業して早や五〇有余年となりますが、月日の経つのが早く、私の人生も「緑土会」と同時に歩んで来たのだナア……と思ふ此頃である。

あの戦争の終結以来、日本の社会基礎整備の一翼を担い頑張つて来たが、昨今の世相は、政治、経済、社会全般に亘り目まぐるしく変化し、混迷を来たしている。

バブル経済破綻後は、民間企業の倒産とリストラによる失業率増加が進み、景気回復策にもかかわらず、延びなやんでいるのが現状である。

今後は、情報技術革命に象徴される大きな変動期の中にあると思われるが、我等土木二三期は、東京在住の保坂幹事の努力による今日まで発行の「伝言板」で、一層の団結を図り、有意義な余生を送りたいと思っている。

この「伝言板」は、暗夜航路の燈台である。



2000年9月18日淡路島花の博覧会、23年土木卒の家族ぐるみのスナップ

昭和二〇年頃（敗戦前後）の 思い出

昭三七年
保坂誠治

我々旧制中学生は、二〇年三月に四年生と五年生と一緒に卒業しました。戦時中の事で学制改革で中学も四年制に変更になり、その第一号です。入学試験も大変なものでした。首尾よく武蔵工専に入学しましたが、学校より連絡がある迄自宅待機でした。その間にも空襲が激しくなり東京も大分焼け野原になりました。

中学では、三年生の二月期頃から勤労働員で工場に行っていました。六月半は頃だと思いますが学校より連絡があり、確か七月一五日に相模原の陸軍造兵廠に出頭するようにとあり、横浜線の淵野辺駅で降りて行きました。手塚さん達三年生（二〇年九月卒・六ヶ月短縮）の居た寮に入りました。大豆入り外米を蒸気で蒸した飯等が食事でした。作業は、日は防空壕掘り、夜は先輩達の話があり、

更に警戒警報・空襲警報のラジオ放送とサイレンが鳴ると近くの山の方に退避していました。

八月一五日は、朝から上級性に引率されての一日の行軍でした。前日より正午に天皇陛下のお言葉があるので、ラジオを聞く様に云われていましたので、正午少し前に南多摩丘陵の農家の前で休憩してラジオを聞き、戦争が終わったのを知りました。先輩は、「一応、行軍は中止、夕食迄に帰ればよい」との事で「解散」しました。米軍機が正午まで上空を飛び、空襲警報が発令されていました。翌日、「学校より連絡のある迄自宅待機するよ」に云われ、各自帰宅しました。

一〇月半頃から学校が始まり、食糧難で買出しの為などで学校を休んだ人もいましたが、曲がりなりに勉強が



地元の平山中学校のグラウンドにて

来たのが嬉しかった。

正味二年半の学校生活であったが、今も連絡を取って集まっています。これも、人との出合いを大事にして行きたいと思います。

私自身は、現在山に登り、スキーをし、マラソンなどをやり、又地元の平山中学校育成会に参加して、夏はキャンプ、冬は「浅川ふれあいマラソン」に準備段階より参加、走者もしています。

敗戦直後における学生生活等について

昭二四主筆
矢島富廣

未曾有の戦争も、彼我に多くの犠牲を強い、敗戦を以て終結した。本日は、満五五年に当たる。当時を振り返り誠に感慨深いものがある。

私達は、敗戦の混乱未だ脱せぬ八ヶ月後の、昭和二十二年四月本校に入学した。

今でこそ飽食だの就職難だと言われるが、当時、首都東京をはじめ殆んどの主
要都市などが、連日の空襲、艦砲の直撃に曝され、焼土と化していた。巷には失業
業者、浮浪者が溢れ、食糧難、物資欠乏、
闇市、社会不安など筆舌に盡し難い荒廢
混乱の状況下にあった。

私達は、戦後最初の入学生のことであ
って、年令、出身共幅広い構成である。
海軍予科連習生の教官と生徒、海軍兵学
校や陸軍士官学校出身者、学業半ばで軍
務に服してきた者、旧制中学卒業生など、

多彩な九十余名である。しかし学生生活
は全く歳の差などを越え、戦中失われた
勉強と目的意識を以て励み、団結し、そ
して、よく遊びもした。

今でこそ大学が数百もあるが、当時は
旧制専門学校と大学を併せてもその数は
少なく、まして「土木科」専攻課程は数
える程である。

戦後は社会秩序が一転し、民主、平和、
国際主義への道を歩むこととなった。前
述した社会状況下から、緊急課題として
荒廢した国土の復旧、食糧ならびに物資
の増産流通、そのためのエネルギーの確
保等々が挙げられた。

今迄夫々異なる道を行って来た若者が、
「土木科」を選び集い、一日も早い国土
の復旧と復興を希っていたが、その後殆
んど級の級友が、建設行政、ダム、鉄道、



標名山登山（発電所見学後、標名湖畔でくつろぐ。右から二人目）

道路、河川、港湾等々の事業に従事し続
けている。折ある毎にそれぞれの足跡を
振り返り語り合い、土木事業を通じ、国
土復興と住民福祉の向上の一翼に参画し
得たことを誇らしく思うところである。

経済最悪化の時代にもかかわらず、破
帽、高下駄、旧軍服などが混じりながら
も、夫々自立した学生として行動し、そ
れなりの服装で勉強していた。昨年作成
した「在学時写真集」であらためて再発
見したところである。

次に、ご指導を戴いた諸先生の一端に

触れる。印象深いお一人が物理学の中野先生である。授業中私語でもしようものなら、教室外へ突き出され、まして試験中カンニングらしい動作でもすれば、強烈なピンタが飛んで来る。それでいて授業は分かり易く笑顔で接して下さった。

東大教授で河川工学の泰斗本間仁先生は、分かり易く教えて下さるが、お声が小さく試験の点が辛いので、皆真剣に授業を受けた。土木科長の太塚全一先生は、建設省へ勤められることになり、途中で退職なされた。後年東京都建設局技監となられ、小生など都庁勤務の多くの級友が、再びご指導を受けた。後任の當山道三科長は土質、地質学の権威で、六尺豊かな存在感ある先生であられた。私達は卒業以来毎年クラス会を開催しているが、会には欠さずご出席下さる森宣制先生には、構造力学、製図、測量など私達が理解するまでご指導下さった。そのほか各分野の権威ある諸先生に学び得たことに深く感謝している。

ところで、各学年末には成績下位の者は、厳しく落第させられた。この頃になると様々な憶測情報が飛び交ったものである。

多摩川は今では上流にダムが造られ、水量も少ないが、当時は清流で川幅も広く、常に背丈以上の急流であった。有志で鍛練のためしばしば横断水泳に挑戦した。各科対抗の陸上運動会、世相を反映した仮装大会、学内公開展示会など、各科が競いあい意気盛んな部外活動もした。土木施設を近県まで出掛けての見学会、腹を空してのハイキングなども忘れ得ぬ思い出の一駒でもある。

軟らかい話も少し紹介する。街では社交ダンスが盛んだった。廊下にチヨークで書いた足形を、男子校故の笑えぬペアーレッスンがある。演劇部は土木科有志が始めた。他校の女子学生を誘い「毎日ホール」での公演は、諸新聞などで、好評を得た。なお、後日ロマンが実り、幾組かのカップルが誕生したことを付記する。学校帰りに自由ヶ丘の南風座（洋画館）で、駅売店で求めた和英本を片手に、英語の勉強！に足繁く通ったものである。

一方、学業や遊びの合間には、食糧の買出し、アルバイトなどに精を出し、一生懸命生き抜いてきたことも記さねばならない。

昨平成一一年一月、各科合同の卒業

五〇周年の会を母校で開催したが、卒業生出席者八九名中「土木科」は全体の三割近くの二六名で、その健在振りを示すことが出来た。これも在学中の結束と、その後の継続的交流によるものと、関係各位に感謝している。

昭和二四年四月学制改革により、母校は大学に昇格した。級友の殆んどが卒業就職し、大学には小生を含め七名が進み、昭和二六年一〇月、最初の大学卒業生となった。大学の基礎科目は合同授業であった。閉口したのはヒヤリングになじめぬのに最初から日本語禁止の英会話があった。クラブ活動では、占領下の柔道は禁止で、やむなく町道場へ通った。

卒業旅行は関西へ行き、二見が浦で幸い大潮に当たり、勢いにまかせ夫婦岩に登ったまでは良かったが、営業写真屋からどなられ、やむなく引き返した。

あれから五〇年が過ぎた。昨年の卒業五〇周年の会の際、土木科「在学時写真集」を作成したので、当時の私達の一端をご覧願えれば幸いである。

緑土会の益々の発展を希うと共に、早逝された級友各位のご冥福を心より祈る次第である。

授業風景

昭二七年

高橋 壯



「前回の試験結果を発表します。○○君、○○君、○○君 合せてゼロ。」

「合せてゼロはひどいなあ。」

「あつ、それボン！」

隣の教室では、中野先生の数学の授業中ですが、こちらの教室では、麻雀の自習時間です。

「暑いなあ、昼食済んだら、多摩川に泳ぎに行くか。」

斯くて、数人の一団は、テニスコートのはずれの、畑の細い道を一列に多摩川に直行です。

ひと風呂あびる様な気分で、ベルトに手ぬぐいをはさみ、フンドシの代わりにしたり、越中フンドシの者は、その儘、川に「ドブン！」

適当に時間をつぶして、又教室に帰ってくる時は、フンドシ代わりにした手ぬ

ぐいや越中フンドシを両手で持って、白旗をかかげた一団が、教室にすい込まれていくのです。

窓には、ぬれたフンドシや手ぬぐいを掛けて、授業再開と云ったのが夏の風物詩であり、授業風景だったのです。

私達が武蔵工専に入学したのは、昭和二年でした。六〇名位が一緒でしたが、二年の時に、新制大学が設立され、旧制工専と新制大学に分かれ、二五年に工専で卒業した者は三五人、二七年新制大学で卒業した者は一七名でした。

授業は同じ様な事をやっていましたが、特に工専だ、大学だ、と云って、分けへだてする事もなく、よく遊び、よく遊べ、と遊んでいたものでした。

卒業してからも同期会と云うと、合同で集まっています。

会の名称はよく卒業年度でつけていますが、卒業年度が違ふと云う事で入学した時の年度を取って、〃柏二二会〃と称して、仲良く、老いています。

もちろんほとんどの人がリタイヤして、〃サンデー毎日〃、つまり、毎日がサンデーの身です。

お互いに一年に一度位は集まって、旧交を温めております。

〃としよりだと、云うも口だけ、つもりなし〃の句の様に、口だけ達者で、身体が動かなくなってきた今日この頃です。

この頃、気になる事。校歌が出来た「経緯」をまとめて、何時か卒業生に知らせて置かなくてはならないと思っています。

在学当時の思い出の数々

昭三十七年

田中弥寿男



昭和三十一年三月二日、八木秀次学長名の卒業証書第四四六八号の授与を受けて、晴れて「武蔵工業会」と「緑土会」の会員に加えて貰いました。

以後、両会の総会時や同窓会誌「武蔵」のニュースなどによって母校が教育施設の整備拡充を急速に図り、先生方のご努力と相俟って教育効果が挙がり、優秀な人材を世に送り、これらの活躍によって社会の高い評価を受け母校の名声が益々高まっていることを知りましたが、誠に喜ばしく誇りとも致す所です。

在学当時の母校は、建物・施設ともに現在とは比較にならない程貧弱で、古ぼけた木造校舎、校庭や運動場はぬかるみが出来、校舎間の移動が、しばしば困難になったことなどの記憶があります。

土質工学やコンクリート工学関係の実

験施設は充実していましたが、新任の王先生の手で計画された水理学の実験施設が着工されていたことも思い出されます。

講義も、英語学の熊切先生、応用力学、橋梁工学の山際先生、衛生工学の佐合先生、道路工学、土質工学の川浦、神山両先生。

さらに、工業経営学の某先生などの講義が、何故か今も鮮明に思い出します。

特に、佐合先生の衛生工学や某先生の工業経営のフォードシステムなどは、私の社会生活の大きな支えとなりました。

また、川浦、神山両先生には、公私にわたってご指導を賜りました。

両先生の学恩に対し、深謝致しております。

此処に「緑土会」の七〇周年を祝い、在学当時を偲び、今日の様な母校の栄光

をもたらした先人の労に感謝し、大学冬の時代に備えて、歴史と看板を尊重した経営がなされて母校永遠の発展を期待しています。

芋喰った報い

昭三十五年

八木利夫

退寮イコール退学だ、退学だ、と頭から湯気を立てて怒鳴っている井上先生の夢を、四五年経った今、未だに見る。

事の顛末は忘れもしない昭和三〇年の秋、学校の近くの農家の方が先生の処へお出でになり、「薩摩芋の収穫をしたが、学校側の畝は蔓ばかりで芋がついていなかった。犯人は、お宅の学生さんらしいとの噂もあるので調べて下さい。」という。そこで内密に調査したら、城南寮の八木と佐野（昭和三三年卒業の佐野利秋氏、阪神大震災時、大阪で事業を営んでおり、復興に全力を傾注。それが因で体調を崩し鬼籍に入る。合掌。）の部屋で、時折焼芋の匂いがしていた、と情報が入りました。当時、寮とは名ばかりの木造校舎を、六畳間位の広さにベニヤ板で仕切り、二段ベッドを左右に置き、四人で生活していました。又、寮の食事は、五

種混合で、外米、人造米、麦、稗、普通米が同じ比率の配合で、それも井七分目（大型の茶碗一杯分位）、味噌汁におかず一品が定番で、冷めてポソポソの飯を突かない味噌汁で胃に流し込むのが、バイト帰りの私の遅い夕食でした。

退寮から話が脱線しましたが、井上忠夫先生は、数学の授業を受け持つ傍ら寮監も兼任され、学校内で生活されており、私は時折、囲碁の相手等を仰せつけられていました。「芋を掘って電熱器で焼いて食ったのは認めます。だが、寮中に匂うので、匂いだけでは悪かろうと、皆んなに現物支給しました。誰も俺達が芋を買ってきて焼いていると思った奴はいないのに、俺は要らない、と返品はなかった。全員同罪でしょ。」と食い下がる。「よし解った。退寮だけにする。」

その晩、一局相手をさせられ、自由ヶ

丘のフルーツパーラーなるバーで御馳走になる。飢餓しい思いはしたが、大らかで存分に大学生活を享受した、と往時を回顧しています。

退寮後、最後は玉堤二丁目の川沿いの下宿に落ち着く。下宿屋の親父は殺生大好き人間で、私が静岡の海岸近くの育ちで、投網が打てる事を知ると、夏は鮎、多摩川が増水し水が濁ると鯉、鮒狙いで駆り出され、日当はその日の釣果で遣る晩酌でした。投網では、一尺五寸の草魚、夏場に巣になる深みを造っておき、冬に釣る多摩川ならではの「丸太釣り」（この釣りは一ヶ所で必ず二匹釣れた。）等、楽しい放課後の生活も有りました。

今、多摩川の淵近くに佇むと、川は時を忘れたかの様に昔の儘の姿で悠然と流れています。この自然を何時迄も残したいものです。

緑土会七〇周年記念誌発刊を祝して

昭三十四卒

谷川操一



この度、我が母校武蔵工業大学「緑土会」が、創立七〇周年記念事業を実効されますことを衷心よりお祝い申し上げます。二十一世紀に向かって、輝かしく発展されておりますことに喜びと感激で胸を熱くしております。また、記念誌を編纂するにあたり寄稿させていただくことができ、誠に光栄に存じます。

私は、昭和三〇年、土木工学科に入学しました。当時の大学は、現在と違って校舎も木造が殆んどであり、鉄筋コンクリートの校舎がぼつぼつ建ち始めた頃でした。

当時の思い出として、勉学は言うに及ばず、何と言っても山岳部に所属し、少ない金で何とかやりくりしながら、青春時代を思いっきり楽しんだ事です。

そのための資金源は、先輩の会社での

土方専門のアルバイトでした。辛いけど短期間で高収入になり、しかも土木屋スピリットは、どこでも教えてもらえない貴重なものでした。

山岳部の先輩はいずれも筋金入りで、四〇余年を経た今でも楽しい交流が続いています。

当時、山が縁で知り合った先輩の機工学科保坂英雄氏（三三年卒）の勤めもあり、学友会執行委員長鈴木勉氏（建築工学科三四年卒）のもとで、私が運動部執行委員長を引き継いだ時に、初の室内体育館建設の運びとなりました。

東急電鉄をはじめ五島育英会のお骨折りで、二子玉川園の鉄骨の一部を再利用して、念願の体育館の完成を見たのです。こけら落としの際、付属の高校生ばかりで、大学生の参加が少なく、荒川学長

に大目玉をくらい、皆で大慌てして学生を動員したこと等、今では学生時代の懐かしい思い出の一つになっています。

卒業論文は、土木科でありながら当時としては全く新しい「建設機械」でした。中岡教授の予言によれば、これからの建設工事はますます機械化が進み、工事の大部分は機械作業になるであろうと言う事でした。

自分でもそのような予感がしたので迷わず選びました。

実習は教授の顔で各企業の研究室等でを行い、卒業後も大いに役立った事は言うまでもありません。

自分達は第二回目の卒論者であったと記憶しています。その後、機械化施工がめざましく発達した事は皆様ご承知のとおりです。

卒業当時は、大変な就職難の時代でしたが、中岡教授の推薦で、ある会社に入社することができました。

教授の学生を見る眼力は大変なもので、その人の性格、学力、その他細かい点を普段から、良く観察しており、「君は、何処そこへ行きなさい。」と、会社の大小に関係なく、ある程度の方向付けをしていたことは、四〇余年を経た今でもそれぞれの分野で活躍している卒業生を見ると、くるいはなかったと感心しています。

その後、日本の経済発展と共に建設業界も多に活況を呈し、現在に至っています。

その一端として、日本を代表する建設工事の数々を担うことができ、自分の技術屋人生も、齢と共にそれなりに全うすることができたかな——という満足感に浸っています。平均寿命が延び、年々高齢化社会となっている昨今、気持ちだけでも学生時代と変わらない若さで、生涯現役として、少しでも建設業界に貢献できる自分でありたいと願っています。

これも、武蔵工業大学、とりわけ土木工学科で培った精神と、お世話になった

先生方、諸先輩のご指導の賜ものと感謝の気持ちで一杯です。

七〇周年記念事業にあたり四〇余年を振り返り、ここに改めて心より感謝し、厚くお礼申し上げます。

我が母校武蔵工業大学「緑土会」が、二十一世紀に於いて更なる飛躍を遂げ、益々御発展されますよう祈念致します。

昭和35年 西脇先生の設計製図の授業風景



学生生活で思い出すこと

昭三五十年

宍戸尚夫



卒業が昭和三五年（一九六〇年）、今年が二〇〇〇年だから四〇年が経過します。

加えて「緑土会」七〇周年記念の年に当たると云う物凄く区切りのいい、記憶しやすい年次に当たります。

我等昭和三五年卒業の「珊瑚の会」（昭和三五年の三、五に因み、何時までも燃える珊瑚の様にと卒業と同時に命名）も世の不況に負けじと九月上旬に、卒業四〇周年記念大会を北海道で予定しています。

会長、副会長、さらに地方幹事の継続開催のご努力と会員の協力を深謝致します。

さて、昭和三一年（一九五六年）の入学から昭和三五年（一九六〇年）迄の四年間の学生生活は確かに、他大学（特に

総合大学の文科系）の「日米安保闘争」等、デモ中に死者が出るほど華々しいものであったことを思い出します。

しかし我等単科大学にあっては、安保闘争の意義、判断の不足もあったのか？ 又は土木専門知識の修得に全力投球をしたのか？ 我等学生には、馬耳東風の感があった、と記憶しています。

良かったと云えば良かったのだが、この頃は食生活が充足されておらず（特に、私の様な寮生）、昭和三一年の入学時は米穀通帳なるものがあり、住所変更の時持参し、これによって外食券を貰い、外食券食堂なる食堂でやっと米の飯を食べることが出来た時代でした。

今でも「鱈フライ」の味が鼻につき懐かしさで一杯の人がいると思います。

食堂での飯の盛り方が全く合理的なも

ので、ドンブリに飯を盛り、公平の為に「台計り」で計量したものでした。

飯の量の多い時は減らされる、その不快な感覚は今でも頭にこびりついています。

田舎から米を送ってくる友達の下宿に顔を出したこと、尾山台周辺の畠の秋の実りがとても気になったこと（特に、サツマイモ、トウモロコシ、トマト）等々、安保どころか食することに全精力を傾注したことは間違いなかったと思っています。

斯くして、学校を出て四〇年、誠に飽食の時代を過ごしていますが、懐しいのは、大変お世話になった、尾山台駅裏近くの十字路にあった（今はない）「外食券食堂」ですね。

大学は心の故郷

昭三六土卒

府川好夫

もうすぐ二〇〇〇年一月二三日がくる。当日、何もせずとも二四時を回れば、二〇〇一年一月一日となり二十一世紀が始まる。

しかし、このミレニアムの歴史的瞬間に我々が生きている、立ち会っていることは素晴らしいことと思う。

武蔵工業大学「緑土会」七〇周年記念がこの年に合致したことに歴史的な因縁を感じる。

私は学生時代、小田急線を利用して通学をしていた。

玉川学園へ向ヶ丘遊園間の車窓から日本住宅公団（都市基盤整備公団）生田土地区画整理事業の現場がよく見えた。今では普通だが、四三年前に山林を削って大規模（約八〇ヘクタール）に宅地造成を行っている現場は初めてだった。

道路工事では昔から山腹をカットしてジグザグ道路を作り、峠はトンネルを掘るスタイルは目にしてきた。

戦後、しかも首都圏での大規模開発はこの生田は早いほうだったかもしれない。昭和三〇年に日本住宅公団が発足し、手掛けたものとしては、生田より大規模な土地区画整理事業はあったが、藤沢第一・日野（豊田）・常盤平（松戸）等ほぼ平地の事業であった。この中であって、生田は山林を開発するものであり都心からも至近距離であった。

造成後は、百合丘一、二、三丁目と呼ばれ、現在は落ち着いた高級住宅街となっている。

その時、目にしたものは山へどんどんブルドーザーが登り、切り崩し、スクレーパーで土運搬する迫力ある現場だった。

強く印象に残った。

土木の学生として建設機械の免許はともかく自動車の免許ぐらいは早く取ろうと思った。

専門課程に入り、建設機械ゼミナールで中岡二郎教授にお世話になることとなった。生田での印象が強烈であり興味があったため、このゼミナールは渡りに船だった。

教授の計らいでブルドーザーの解体・組み立て実習をマルマ重車輛（株）（世田谷区）で行った。夏休みの暑い最中に通ったことを思いだす。小松製作所（川崎市川崎区）も見学させていただいた。大きな製作工場を体験し、生まれてはじめて社員食堂にも入った。

さらに、春休みには一週間のブルドーザー運転実習があった。場所は石川県小

松市の小松製作所で中岡教授をはじめゼミの仲間が現地に集合した。

大きなグラウンドに土の山とブルドーザーが何台も用意されていた。仲間は思い思いに運転をしたが、トラブルと珍事の連続だった。

教授に連れられて「安宅の関」に行き、そこで相撲大会が始まった。ゼミの仲間はことごとく教授に破れたがO君のみが勝負になった。教授と寝食を共にしたこの実習は忘れることはできない。

現地集合の過程、一週間の課外、帰路のできごととは語り草となっているが、ここでは割愛させていただきます。

このゼミのメンバーのほとんどが卒業論文を橋梁設計で取得した。中岡教授のおかげで卒業ができたと感謝している。有難いと思う。

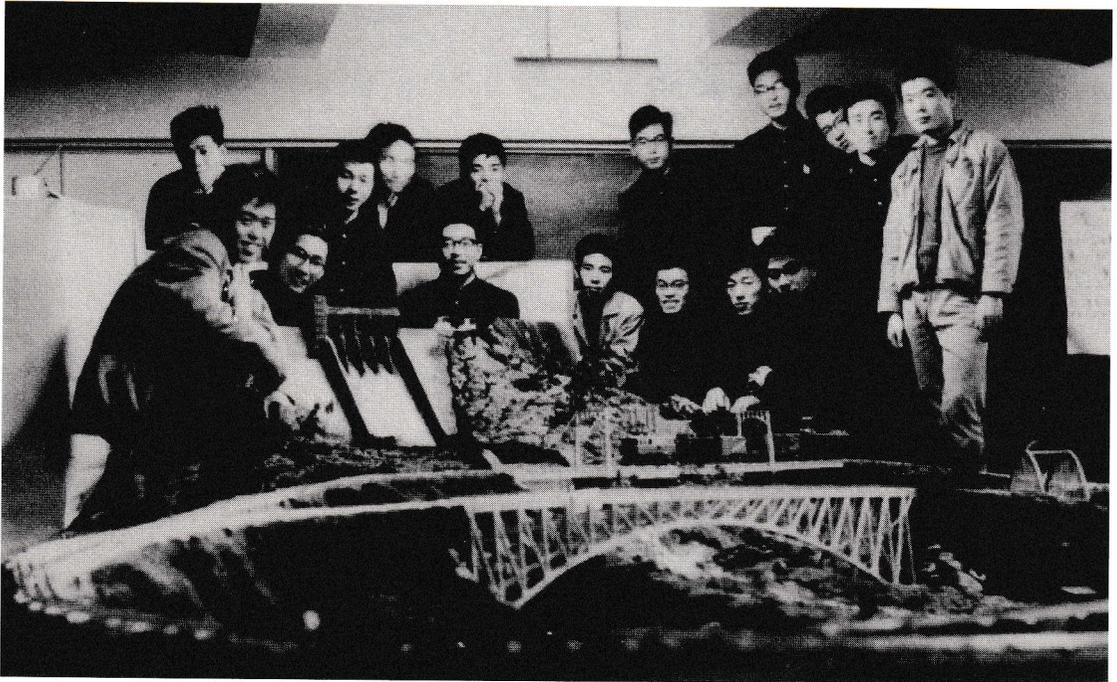
学生時代の思い出はいっぱいあるが、紙面の都合でゼミナル関係のみとした。年齢とともに大学が懐かしく、ありがたみが増してくる。今あるのも大学や諸先生および仲間のおかげと感謝している。

少子社会となり、各大学とも生き残りを賭けている。武蔵工業大学の存続・繁栄を願わずにはられない。卒業三十九

を過ぎた私にとって大学は心の故郷である。

七〇周年記念にあたり、緑土会のますますの発展と五島育英会、武蔵工業大学・武蔵工業会の弥栄を祈念するものである。

昭和35年頃 緑土会の学生さん製作の模型



六〇年安保闘争時の思い出

昭三十五

広瀬晴次

本学学友会は、日米安保条約改訂に賛成した数少ない大学のひとつである。

当時は安保の他に「警職法」「勤務評定」の法案が国会に上程され、それに反対する勢力がデモを繰り広げ政府・与党と激しく対立していた。学生界にも保守陣営、特に革新側から反対側に加わるよう強い働きかけがあった。

学友会執行部にいた私は、安保問題について他大学と協議する為、同級生の植村治君の跡を継ぎ「私学連」の中執委員となり、本部のあった御茶ノ水の日本大学に通う事となった。ここでの議論の凄まじさを今でも懐かしく思い出す。

革新側は学生のデモ動員を主軸とする大衆行動を企画していたので、中執委員を入党させようとして勧誘も激しいものがあった。本学も立場をはっきりさせる

必要をせまられた。一言でいえば「安保反対」でないと学生でないとの風潮に巻き込まれる危機感を持ったからである。

同じ学友会執行部にいた同級生の中尾洋君を中心にしてこの問題について研究を開始する事となった。

その結果、サンフランシスコ講和条約締結時に結ばれた日米安保条約は非常に片務的で、日本が従属的であるとの結論に達した。例えば在日米兵の犯罪に対し日本には裁判権がないのである。米兵が電車で銃弾を撃ち込んだ「ジェラード事件」では国民は屈辱感を味わったものである。独立八年後に双務的にしようとする安保改定に反対する理由がないとの結論に執行部は達したのである。昭和三四年、代議員会に諮った後、学友会の方針を学内外に公表したのである。予想され

た事であるがマスコミの評価は芳しいものではなかった。

昭和三十五年、三四万人のデモ隊が国会を取り巻く中、安保条約は自然成立した。それから四〇年、当時の国際情勢と日本の立場を考えれば我々の決定は間違いではなかったと思っている。しかし今の日本の置かれている状況から安保条約はこのままでもいいのか？ 検討の余地があると思う。

「警職法」は「デートもできない警職法」との名コピーで世論の支持を失い、「勤務評定」は日教組の猛反対を受け、共に廃案となった。次に国を揺るがす大きな波として憲法改正が待ち構えていると思う。その場合でもプロバガンダに惑わされず条文を良く理解する事が必要と思う。

活かそう七〇年の歴史!

昭三十七年

隈元 力



三年生になった一九六〇（昭和三五）年、史上最年少のケネディ米大統領が颯爽と登場します。国内では、安保条約の反対闘争の混乱の中で女子大生が死亡します。一方、池田首相の所得倍増論が登場したのもこの年です。これ以降、政治の季節は去り、経済重視へのギアチェンジが行われた感があります。時は遡り入学もない頃、八木秀次学長と若手代議士の中曽根康弘議員の講演会が本学講堂で開催されました。学長の話は、人にもって生まれた器があること。良き友を得て、本学学生は中堅技術者を志向すべきだ、とする言わば分限論でした。

現在の一F学生食堂の正門側の約半分が小さな図書室（館）でした。入り口の正面の壁には、私が小学生の低学年の終戦直後、拙宅でお会いしたことがある猪

狩亮介武蔵工専校長（元陸軍中将）の威厳に満ちた顔写真があり、“運動部大好き人間”である私に勉学の手落ちがないか、あるいは新制になって未だ社会的な評価が定まらない本学の行く末を不安げに見守っておられるように見えました。卒業と同時に清水建設に入社し、現場の工事を担当する所謂、中堅技術者の道を歩んできました。その後、本学の客員教授を拝命して、学生に接しています。

大学の評価のひとつに、就職内容の良否があります。経済膨張期と新制大学発展期のなかで、本学は幸いにも就職の良さを維持してきました。土木受難の現在、教職員や学生の力量だけでは、じり貧状態が予想されます。就職の良否は、一般社会から分かりやすい大学の評価であるとともに顧客（父兄、高校生）の重要な

選択肢となります。視点を変えれば、本学は生き残りのため、他との差別化の要素としても就職内容の向上に努めるべきです。七〇年の歴史をもつ緑土会員、特にコンサルタント、公務員の方々の協力を母校へいただきますようお願いいたします。

東京オリソピツク頃の学生生活

昭和三九年
榎本金二

我々が、武蔵工大に在学していた昭和三〇年代半ばから、三九年にかけては、今振りかえってみると、土木の一時代の始まりの様な気がします。

昭和二五年の特需以来産業界の復興が著しく、それに伴った輸送量の増大、特に自動車輸送に対する高速道路網の整備が渴望され、昭和三一年には日本道路公団、昭和三四年には首都高速道路公団、昭和三七年には阪神高速道路公団が設立され、昭和三三年には名神高速道路が、昭和四〇年には、東名高速道路が着工されました。

また、昭和三九年の東京オリソピツクの開催にあわせ、東海道新幹線および首都高速の環状線が開通しました。

この様な時代の背景をふまえ、我々学生生活は非常に活況にあふれ、武蔵工大

生は、第一線の現場マンを目指すんだという意気込みで、勉学・実習に励んだ事が思い出されます。

特に、現場実習の後などは、実習経験等と話しながら、あたかもベテランの現場マンになったつもりで夜の更けるまで、皆で話したものです。

卒業と同時に、その様な国土建設という夢を持ってそれぞれの道に進んだことが昨日の事の様に思われます。

昭和35年頃の測量実習。山田秋夫さん、府川好夫さんの顔も



私のあゆんだ高度経済成長期

昭三九土卒
高原 昭

「緑土会」七〇周年おめでとうござい
ます。

私は昭和三五年満開の桜となつかしい
木造の大学正門をくぐっての入学式から
数えて、今年で四〇年目を迎え、改めて
月日のたつのは早いものだと感じにふけ
っています。

昭和三九年の卒業時は、東京オリンピ
ック、新幹線開通、高速道路等の建設が
花ざかりの時代で、まさに土木ブームで
した。

私は公務員として、横浜市へ就職し、
高度経済成長長期にのり、本市の大きな柱
の「六大事業」の建設で働きがいのある
時代で、私は道路部門で市内の骨格であ
る幹線道路の建設にたずさわり、大いに
満足しており、毎日楽しく過しております。

これも良き時代での高度経済成長の時
代があったからだと思います。

又、私は土木の卒業生を中心とした横
浜市役所支部の会長職をあくまでお
りますが、私が入庁した時代は先輩ばかり
で約二〇名の会員でしたが、現在では五
倍強の約一一〇名の会員で構成される大
きな支部にまでなり、これも高度経済成
長期にめぐまれ、優秀な後輩が入り、皆
仲良く仕事を進める上でも円滑に機能し
ている状況で、定期的に総会・懇親会も
開催し、仲間意識も強く、全体として大
きな役割をはたしております。

今後も発展するよう努力していきます。

昭和41年頃の土質研究室



高度成長時代の学生生活

昭四〇五年
形山嘉宏

戦前の人海戦術からブルドーザー、パワーショベルなどのような高性能土木機械が登場し、ダム・トンネル・道路などの建設に驚くべき力を発揮した。こうした技術革新や設備投資の嵐のような展開は日本経済の生産力を飛躍的に高め国際競争力を増大させていった。

私が入学した昭和三十六年は、六〇年安保騒動後であり、その後の池田内閣は経済の高度成長、所得倍増などのキャッチフレーズをかかげ社会の諸々が猛烈なスピードで変化していた。

特に、昭和三九年に開催された東京オリンピックの影響で東海道新幹線、名神高速道路が開通し、高速時代の幕が開かれた。業界も建設ラッシュにわいていたし、あちこちで突貫工事も行われていた。またカラーテレビが普及し、マイ・カー、

スキー、レジャーなどがブームをおこし始めていた。

武蔵工業大学の近傍でもオリンピックの第二会場が駒沢であったことで首都高速道路の延伸に拍車がかかり、環状七号ができ、目黒通りも拡幅され、東横線も高架工事が行われていた。また、街には近代的なマンションができ始めていた。

登校途中、春になると桜の花トンネルができた小道（現在の環状八号）がなくなつたのはその後であつたと思う。

多くの学生たちは衣食住のうち衣食だけはどうか事足りていたが、住まいだけは近代国家にほど遠く、地方から入学された学生の大半は三人部屋の寮生活か木造アパートの生活であつた。現在の学生のエアコン、バス・トイレ付鉄筋マンションとは大きく違つていたし、電話

（もちろん携帯電話などない時代）、テレビ、冷蔵庫など持ち合わせていなかった。

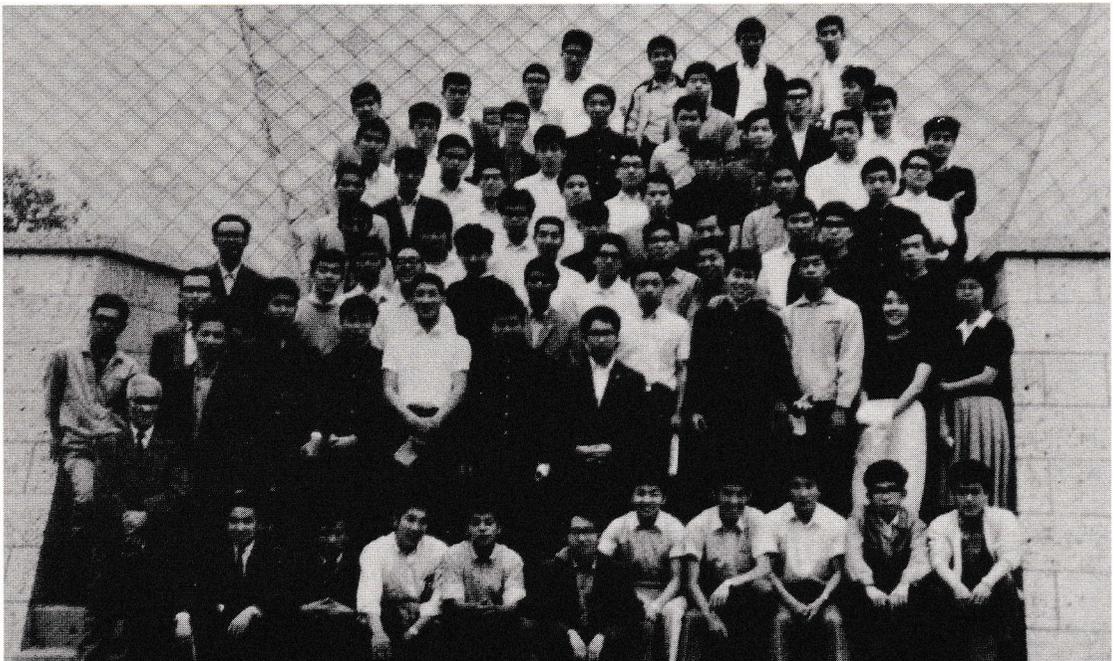
校舎は木造建物が多く、室内は防腐剤の匂いと隙間風の中での授業であり、冗談半分には先生と生徒の情熱で暖める方針であつたようにも聞いた。校庭には樹木が少なく多摩川からの西風に砂塵が舞い上がり、とても現在の緑多いキャンパスのようになるとは想像できなかつた。

学生気質はバンカラの人が多く、特に土木工学科は、硬派の体育会系の学生が四〇〜五〇名ほど部活動にも活躍されていた。また就職は官民の給与差が大きき民間のゼネコン系に巣立つて行かれた方が大半を占め、社会資本の整備に貢献されていた。

卒業後三五年間、強い絆で旧交を温めてきた小玉先生と私たち緑土四〇年会の

昭和40年 3月	卒業		
昭和45年10月	ゴルフ第0回大会	箱根・仙石原 G. C	参加者 8 名
昭和50年 3月	同期会第 1 回 (卒業10周年)	自由が丘大島屋	
昭和58年 1月	ゴルフ第40回大会	ハワイ	
昭和60年 6月	同期会第 3 回 (卒業20周年)	熱海温泉	神山先生、西脇先生、小玉先生、田辺先生、成山先生他参加者30名 参加者多数
昭和61年 6月	野中正之君ご逝去 享年43歳		
昭和61年 8月	ゴルフ第50回大会	タイ国	
昭和62年 4月	田辺幸男先生ご逝去		葬儀参列
昭和63年 6月	成山元一先生ご逝去		葬儀参列
平成 2年 9月	ゴルフ第60回大会	韓国・濟州島	
平成 5年 5月	ゴルフ第70回大会	オーストラリア	参加者12名、内ご夫人 3 名
平成 6年 3月	剣持英雄君ご逝去 享年52歳		葬儀参列者、奨学寄付金賛同者84名
平成 7年 5月	同期会第 6 回 (卒業30周年)	山梨・石和温泉	神山緑土会副会長、小玉先生 他参加者56名
平成 7年11月	緑土会へ寄付金 (卒業30周年記念)		
平成 8年 3月	武蔵工業会柏40年会 卒業30周年事業参画		M. I. T メモリアルホール 基金参加者200名
平成 8年 8月	観光&ゴルフ第80回大会	カナダ	参加者26名、内ご夫人12名
平成 9年 9月	杉山哲士君ご逝去 享年54歳		葬儀参列
平成11年 8月	観光&ゴルフ第90回大会	西アメリカ・ハワイ	参加者18名、内ご夫人 8 名
平成11年11月	同期会第 8 回 総会・懇親会	山梨・石和温泉	小玉先生他参加者28名
平成12年10月	観光&ゴルフ第94回大会	福岡・佐賀	参加者33名、内ご夫人12名
今後の予定			
平成13年 9月	観光&ゴルフ第97回大会	北海道・北見	
平成14年4,5月	観光&ゴルフ第100回大会	モロッコ・スペイン	

昭和45年頃の現場視察



私が学生の頃は……

昭四二卒

堀内岩夫

昭和三八年四月、静岡県掛川市から東海道線の鉄道に乗って憧れの東京に上京した。

東京での一人暮らしを夢見ていたのである。

当時の東海道線には、まだ蒸気機関車が走っていた。

今では新幹線の掛川駅まで来て東京へ掛川間は一時間五〇分となった。

兄が国鉄（現在のJR東日本）に勤務していた関係もあり、私は文化会の鉄道研究会に入会した。

研究会に土木の先輩がいた記憶はないが、私を含め、何故か土木の連中が多数入会した。塩谷、首藤、伊藤、堤、島村、川口、澤田君などなど。

昭和三九年は新幹線の開業と併せ、東京オリンピックが開催された年でもある。

鉄道研究会では先輩の案内で埼玉の蕨市にあった日本車輛製造（株）の新幹線車輛の工場見学や鴨宮にあった新幹線試験走行路での新幹線試乗会にも参加することができ、楽しい思い出の一コマである。

大学二年の頃は世田谷区の等々力三丁目に下宿することとなった。

産業道路沿いの橋本運送店、二階の四畳半の間借りである。

木造の古い建物で出窓は一箇所だけの部屋だったこともあり、夏の暑さのために、しばしば目が醒めて眠れなかった苦しい記憶がある。

今では笑い話である。

下宿代が四、五〇〇円／月、当時のラ

ーメン代が三〇〇四〇円の時代であった。

私が在学していた昭和三八年～四二年

は池田内閣から佐藤内閣の時代であり、池田首相の所得倍増計画による「いざなぎ景気」（昭和四〇年一月～昭和四五年七月）に湧いていた。

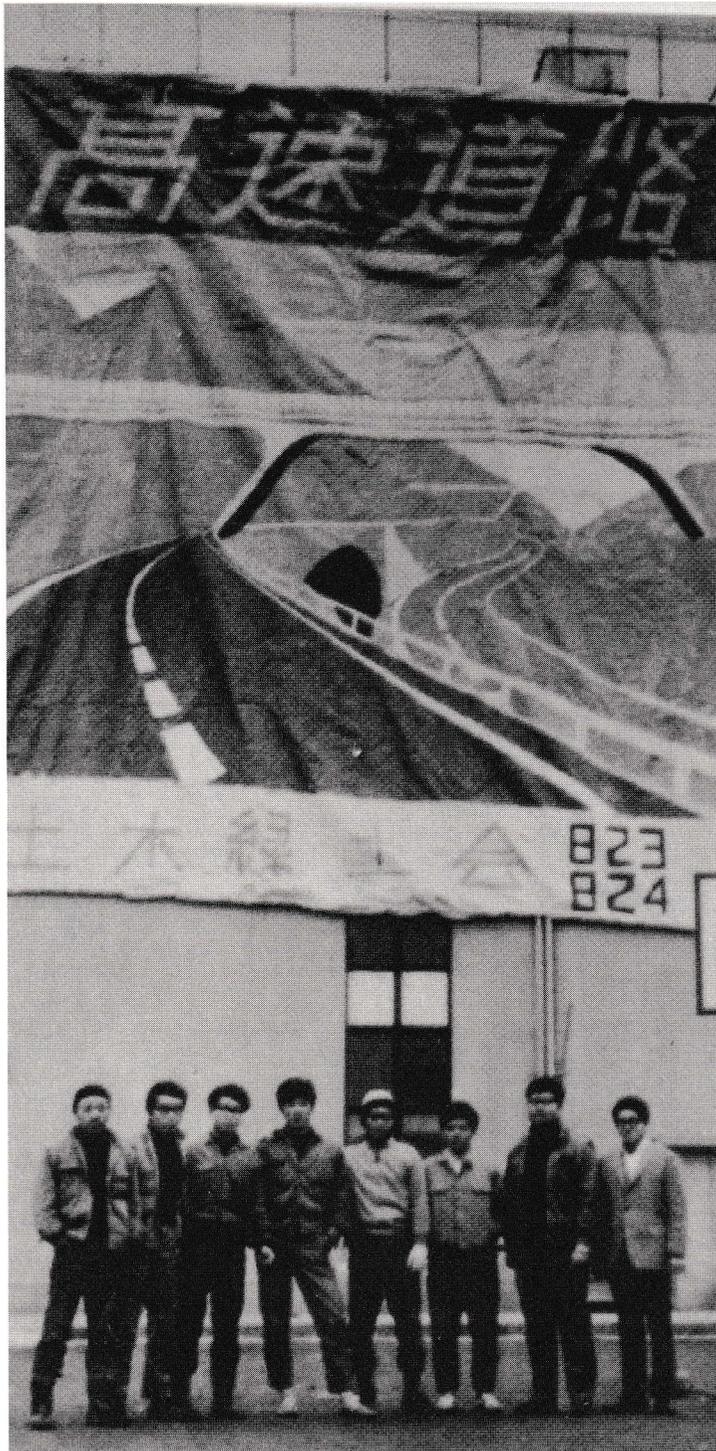
実質経済成長率も昭和四一年の一〇・七パーセントから昭和四五年の一〇・八パーセントと五年間連続一〇パーセントを越える勢いであり、今日の社会経済状況を越える勢いではない高度経済成長の時代であった。

昭和三九年四月、日本はOECDへの加盟が実現し、先進国の仲間入りを果たした。

私が橋梁研究室（現在は構造工学研究室）に仲間入りしたのは大学二年生の頃であった。

きっかけは全く想い出せない。

諸先輩の卒論研究を夜遅くまでお手伝



昭和45年頃 緑士会の大弾幕

いさせていただいた。

当時の実験室は、すきま風の入る木造平屋であったが、鋼製のリブアーチ全体模型が威容を誇っていた。

この模型を使って固有値解析の実験であったと記憶しているが、振動測定はいつも静かな夜間の時間帯であった。

当時の先輩には、安藤、李、剣持、吉

野、野村、岩田、林、吉野の諸先輩が在室されていた。

昭和四二年三月の卒業前年には西脇先生と私達（井田、前田、藤沢、堤）は東名浜名湖橋の基礎施工現場見学、神戸の摩耶大橋見学、四国徳島の瀬戸大橋見学の卒業旅行ができた。

西脇先生に御指導いただいた卒業論文

は三月末の卒業直前までかかった気がする。

昭和四二年以降の四〇年代は公害問題が大きく報じられると共に、日本大学の経理不正に端を発した学生運動の高まりのなかで、私の社会人としての生活が始まった。

高度経済成長期における学生生活等について

昭四五年

酒井公二

一、なぜ私が土木を選んだか？

私が高校三年生の時、東京オリンピックがありました（新潟地震もありました）。その数年前から、東海道新幹線、名神高速道路、首都高速道路等の建設で世の中は、まさしく高度経済成長の時でした。

高校生の私は、将来どんなことをしようかと考えており、テレビでは盛んにビジュアルプロジェクトの完成、名神高速道路開通等のニュースを流しておりました。

高速道路の流れるような白いレーンマークの美しさに一目惚れした私は、将来は高速道路を造る人になろうと土木を選びました（今の若い人のように偏差値で志望学科を決めませんでした）。

二、学生生活

昭和四〇年入学時、学内にはまだ木造

の校舎が残っていましたが、四年間で実験棟、本館等が整備されました。世の中も武蔵工大もまさしく高度経済成長期だったのでしょうか。他の大学では、学生運動が盛んで、学園封鎖が行われたりしておりましたが、武蔵工大は静かでした。しかし中央大学の先生が講師の授業では休講が続き、連絡がつかないと言う事態もありました。

今でこそ自家用車は当たり前前の時代ですが、当時車で通学していたのは少数の学生でした。その車も廃車寸前のものばかり通り、帰校時同乗したときは、大分から環八までの坂を一気に上りきれず、アパートのようにジグザグに何度か脇道に入り、加速し直してから坂を上りきったのも今では楽しい思い出です。

三、現在の私

昭和四四年四月に初任給三三、〇〇〇円でスタートしてから早や三二年間のサラリーマン生活を続けておりますが、公共事業に対する世間の強い風当たり、またリストラの嵐と、厳しい社会情勢ではありますが、何とか頑張っていきたいと思っております。

この秋には三六年来の夢、イタリアのフィレンツェに、妻とともに観光に行く予定です。と申しますのは、大学に入った時、一般教養の美術で学んだ、フィレンツェに憧れ、将来絶対行ってやろうと思っていたからです。

当時は、高度経済成長期といえども、一般の学生が海外旅行など思いも寄らないことでした。今、やっと昔の夢がかなおうとしています。機会がありましたら次はそのご報告でも……。皆様お元気で。

学生時代の思い出

昭四十六年

豊田哲也

私の在籍した昭和四二年前半は、学生運動の盛んな頃で、学内でも覆面・ヘルメットという格好の学生が大勢いました。

そんな中、私は入学と同時に橋梁研究室（現在の構造工学研究室）へ飛び込み、四年まで西脇先生にお世話になりました。一年生の時は、現在の四号館脇の木造校舎で、四年生の実験の手伝いをしていました。夏休みの間も毎日二時間近くかけて学校へ行っていたことが懐かしく思い出されます。

この一年生の時の出来事で自分にとって最大のものは、初めてお酒を飲んだことです。大学へ入学するまでは、一滴のお酒も飲んでいなかった私が、研究室へ入れてもらって歓迎会ということで、かなりの量を飲まされたことを覚えています。このときは、お酒を飲んでどうなる

のかもわからず、深夜に二時間かけて、最終電車で家まで帰りました。

そして次の日、一時間目から授業に出席したものの、体がふわふわしていたことを覚えていません。

最新の設備を備えた四号館ができて研究室にいたことが楽しくて仕方がありませんでした。朝から晩まで実験室にこもっては、何かをしていました。

四年生の時には、卒論の「吊り橋の大ブロック架設における主塔への影響」を書くための実験を社外で行わせていただき、九月から一二月半ばまで、模型に対する直射日光の影響を避けるため、毎日夜の一時頃から日の昇るまで実験を行いました。

実験の場所は西那須野にあり、寮から工場への道すがらや実験の合間に満天の

星を見上げては、星に詳しくなかった下級生から星座の話が聞きました。しかしながら、今では星座もいくつかがわかるだけで、教えてもらったことはすっかり忘れてしまいました。

この実験に使った模型は、卒業後何年かしてお世話になった会社の工場の脇を通りがかった時に見つけて懐かしく思いました。学校に帰ってから実験結果の整理や論文の執筆を行い、卒業論文は、卒業式の前日にと西脇先生に提出し無事に卒業しました。

今では一年生から研究室に入り込む学生はいないと思いますが、四年間同じ研究室で過ごせたことはいい記憶になっています。

昭和五四年卒業当時の社内環境と学生生活について 思うこと

昭五四年
主幸

林 克彦

私が卒業した昭和五四年は、第二次オイルショックから若干立ち直りかけた時期でした。

就職環境は今の時代と似ているところがありますが、社内環境はかなり変化していると感じられます。

また、それよりまして変わっているのが学生生活ではないでしょうか。

私は、体育会サッカー部出身でしたので、現場での生活には慣れると言うより、クラブの合宿生活そのものの延長と実感していました。

毎日グラウンドを走る代わりに現場を走り回り、先輩後輩の区別は厳しいけれど人間関係はとても暖かいものでした。

現場で働いている農家のおじさん、おばさんはとても親切で、いつも新鮮な果物や野菜を分けてくれたものです。

そんな現場生活も、学生時代クラブ活動をしなくて入社した一部の人の人にとって、慣れることができないようでした。

仕事が終わってからもプライベートな生活がない環境にも耐えられなくなり、悩んだ末に辞めて行った人もおりました。

学生生活をあまり自由に過ごしてしまふと環境のギャップに対応できない人は、いつの時代にもいるのですが、最近は特にその傾向が強くなっているのではないのでしょうか。

そんな理由でゼネコン志向の学生が減っているのではないかと私は思っています。

冒頭に触れましたが、会社が変わるスピードより世の中が変わるスピードの方が早いと言うことでしょうか。

今後、もっとスピードアップする社会

に古い体質を引きずってはいけな
いのかもしれませんね。

人間臭い良いところを残して社内環境も変えて行く時代だと感じています。

特に女性の雇用に関しては、古い体質を感じざるを得ません。

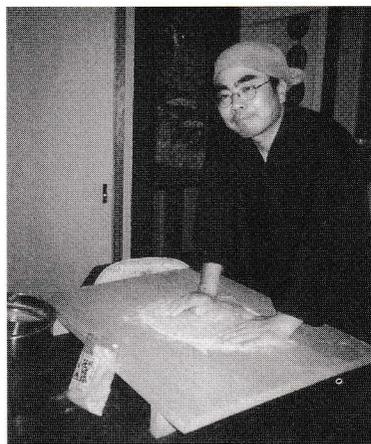
「九号館二階」の思い出

昭五十七年

永田佳敬

一九七八年四月、キャンデーズの解散コンサートが行われた次の日、私は武蔵工大の学生になった。世田谷の閑静な住宅街にある母校の落ち着いた雰囲気は一年余計に受験勉強をしてしまった私の心を癒すに充分ではあったが、何か足りないような、そんな気持ちでいたあるとき、ふらりと入った場所が九号館の二階だった。整然としたキャンパスにそぐわない、薄暗く、独特の異臭を放つそのスペースに踏み込むと、かつては激しかったのである。学生運動の名残を感じさせる落着き、立て看板、気味の悪い人相風体の学生達が私を圧倒した。そして、気がつくくと、その異臭の元凶といえるトイレのそばに部屋を構える鉄道研究部に入室願いを書いていた。九号館は、そのものが迷宮のような建物であり、そこに

ある文化系各クラブの部屋は、魔人の住処である。魔人達はやさしく、確実に、新入りを洗脳していく。そこがどこよりもすばらしい場所であり、未知の世界への入り口に立っていることの喜びを感じるように。そして私は、彼らの手によって本格的な魔人に成長する。「革命を起こす、起こせる」という幻想にとらわれている人たちは、その当時でも世の中にいたし、身近にもいた。しかし、それは何かが違う。自分たちが今、エネルギーを向ける矛先は、もっと自由に楽しいものでなければならぬ。私は学祭の委員を経て、文団連の本部長をさせていた。くだることになるのだが、この気持ちがすべての行動の基本だった。その間様々な人に出会い、ぶつかり、喧嘩もしたし、教えられもした。そして多くの友を得た。



私の青春は「九号館二階」とともにあり、そこは私にとってどこよりも居心地のよかった場所、もっとも多くのことを学び、喜び、また、泣いた、場所だった。今はもう美しく変身を遂げている九号館だが、母校のどこかにまだこんな場所はあるのだろうか。一生懸命勉強しなかった言い訳になるのだけど、学校は教室や、研究室ばかりではなく、学生が自分たち自身のためにある場所もまた、大切なのだろう。

大阪に転勤しました

昭六〇主卒

街道 浩

今年の四月に大阪に転勤しました。卒業後、東京都北区に本社がある会社に就職し、仕事の内容はおもに鋼橋の建設に携わっております。

入社後の勤務先は東京が主体で、住まいは越谷、与野、鴻巣と埼玉県内を転々としていましたが、今回はじめて関東地方から離れ、大阪にやってきました。

生まれが北陸であることから、言葉や食べ物に比較的違和感がなく、すんなり引越してきた感じです。

現在、大阪府北部の吹田市に住んでいます。

こちらでは摂津の北ということで、吹田市、豊中市、箕面市などをまとめて北摂とよんでいる地域のようなのです。

私の住まいは、昭和四五年に開催された万国博覧会EXPO'70の会場の西南五

〇〇mほどにあり、窓の向こうには太陽の塔、エキスポタワー、大観覧車、ジェットコースターなどが一望できます。

なかでも、夜にライトアップされた大観覧車を眺めながら一杯は、平坦な埼玉では味わえないものがあります。

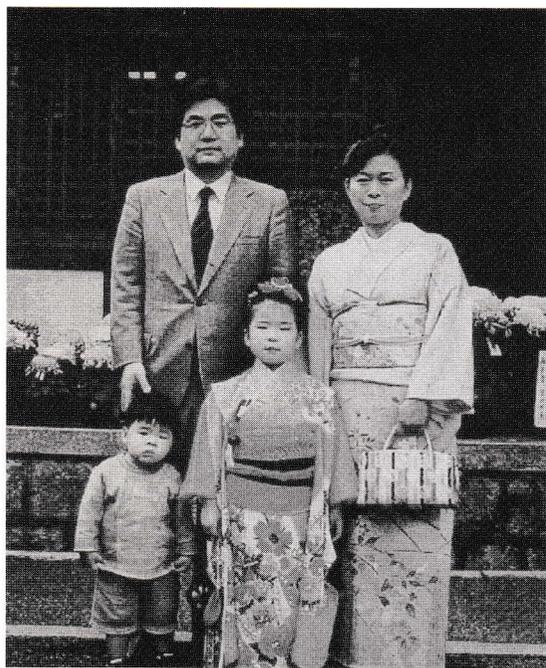
小学三年生のころ、何度か足を運んだ万博会場の目の前に住むことになるのは、思いもよらないことでした。

アメリカ館の月の石、ソ連館の威容、インド館の白い虎などが鮮明に思い出さ

れます。

今ではすべて公園になっており、子供たちにとっては格好の遊び場です。

大阪での生活は予想以上に快適で、通



勤に関しては距離が二〇キロメートル弱、朝晩の通勤電車では必ず座ることができません。

電車の編成も、私の知る限りでは八両程度が標準です。

これは、大阪が快適というよりは、東京の一五両編成でおしくらまんじゅうをしているのが異常なのでしょう。

また、食べ物についても、昼食時に外食をしてみずいと感じたことはほほありません。

味覚は主観的なものなので断定はできないのですが、待たせる時間が短く、値段が安いことはまちがいありません。

ここまではいいことづくめなのですが、いくつか馴染めないことがあります。

特に、車の運転が荒いのに閉口しており、割り込むときと割り込まれるときのタイミングには、いつもぶつかるのではないかとひやひやさせられます。

また、路上駐車のごさは噂に聞いていましたが、交差点での駐車や複数車線の並列駐車などにはあっけにとられるものがあります。

さて、ようやく大阪に引越して半年たち、仕事や生活になじみはじめたとこ

ろです。

今後、関西地区の同窓の方々、特に緑土会の方々の親交を深めたいと考えております。

新参者ではありませんが、どうぞよろしくお願い致します。

昭和60年 衛生研究室としてスタート。綾先生とはしゃぐ学生諸君



とりとめのない話ですが……

昭六十年

浅野雄一

「緑土会」七〇周年、誠におめでとうございます。

母校が輝かしい歴史を刻むのはOBとしても、嬉しいところです。

さて、執筆のご依頼をいただき、「バブル経済時代における学生生活等について」というテーマを仰せつかり、少々気の進まないテーマですが、当時のことから現在までを少しお話しさせていただきます。

学生生活そのものは、現在と大して変わらないのではないのでしょうか。自由が丘あたりの安い飲み屋で騒いだり、課題（特に設計製図）の提出に追われ、徹夜をしてやっとなにに合わせたり、また、サークル活動やアルバイトに明け暮れたりそんな毎日でした。

しかし、就職活動は言うまでもなく今

とは違って好調で、現在ののように多くのゼネコンが経営不振に陥るなどは、誰も予想していなかったことでした。バブル経済を甘受したといえば、学生の身としては就職内定を早くにもらったことが何よりも大きいと思います。

私も、一旦は某ゼネコンに就職し東名高速の改築工事に三年間従事し、休みもろくに取れず、毎日、現場を駆け回って出張しや現場管理に汗を流していたことを思い出します。その後、運良く神奈川県に転職することができ、現在に至っております。

しかしながら、土木屋としての基礎は、ゼネコン時代の三年間にあることは間違いありません。大学の卒業式で当時の石川学長先生が「実際に体を動かし、手を動かし、ダテティーワークを恐れぬ技術

者になれ」という内容の訓辞をされておりました。

現在は仕事柄、現場仕事はめっきり減ってしまいましたが、そのぶん、汗をかくことを惜しまずに自分の納得できる仕事をして行きたいと思っています。

また、経済情勢に若干の明るい兆しが見え始めたとはいえ、依然厳しい時代に人生の選択を迫られる学生諸君は、どうか目的意識をしっかり持って、日々努力してもらいたいと思います。

最後とはなりましたが、緑土会のみならずのご発展と会員各位、ご家族共々のご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、終わりとさせていただきます。

バブル経済崩壊後における学生生活について

平四土卒

新家忠彦

私が就職する頃（平成六年入社）バブル期が終わり、就職難の始まりでした。二、三年先輩からは、かなりおいしい話を聞くことができましたが、私たちの代ではもうありませんでした。

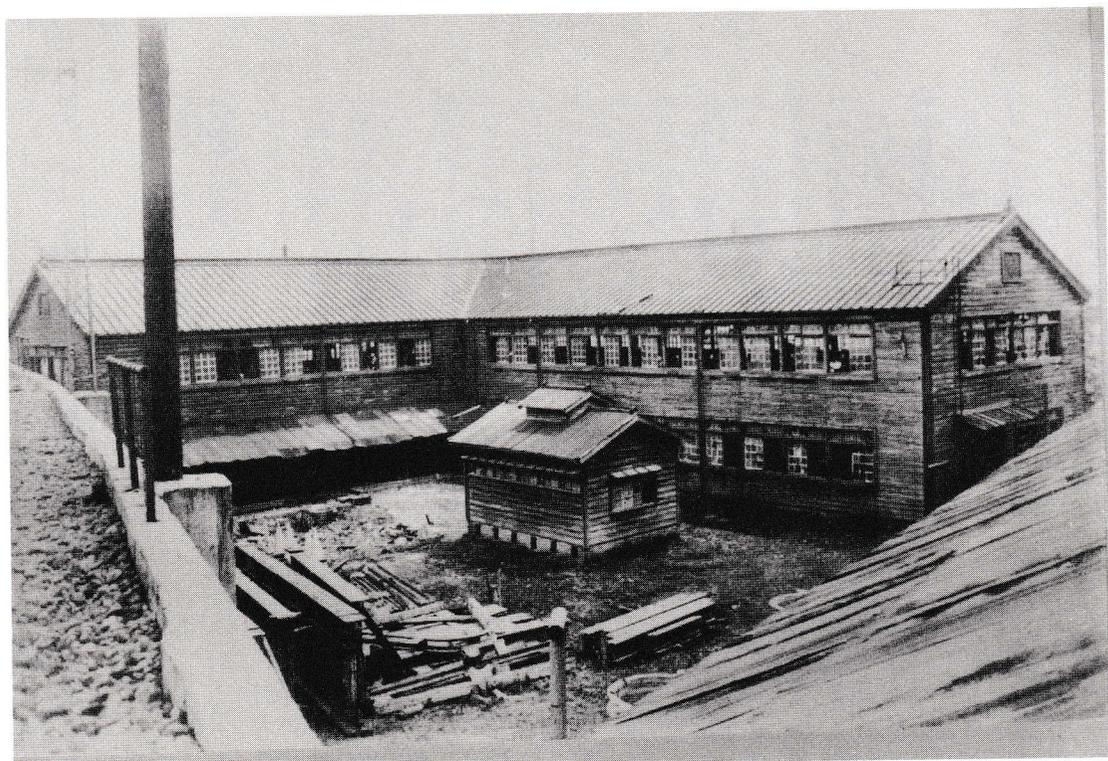
私が学部生の時期は、皆4K、5Kと言われる建設会社に就職することを嫌い、公務員、その他の職種企業へ就職するものが多数いました。しかし、平成六年頃から建設会社は嫌だと言ってはいられず、厳しい就職時期を迎え始めました。我が会社もここ数年採用人数がかなり絞られ毎年後輩を迎えることができなくなっているようです。最近入社してきた人間は最も狭き門をくぐり抜けてきた人物ですので優秀なはずですが、頭ばかり大きくて言葉使いを知らない、挨拶ができない、人と上手く接することができないなど自分の意見を持たない輩が多いそう

です。我が社の恥部を披露する訳ではありませんが、寮の廊下ですれ違いに会って挨拶しても相手は頭を垂れる訳でもなく無視をする。このような挨拶一つできない人間では職人を使って現場で良い仕事が出来ない訳がありません。

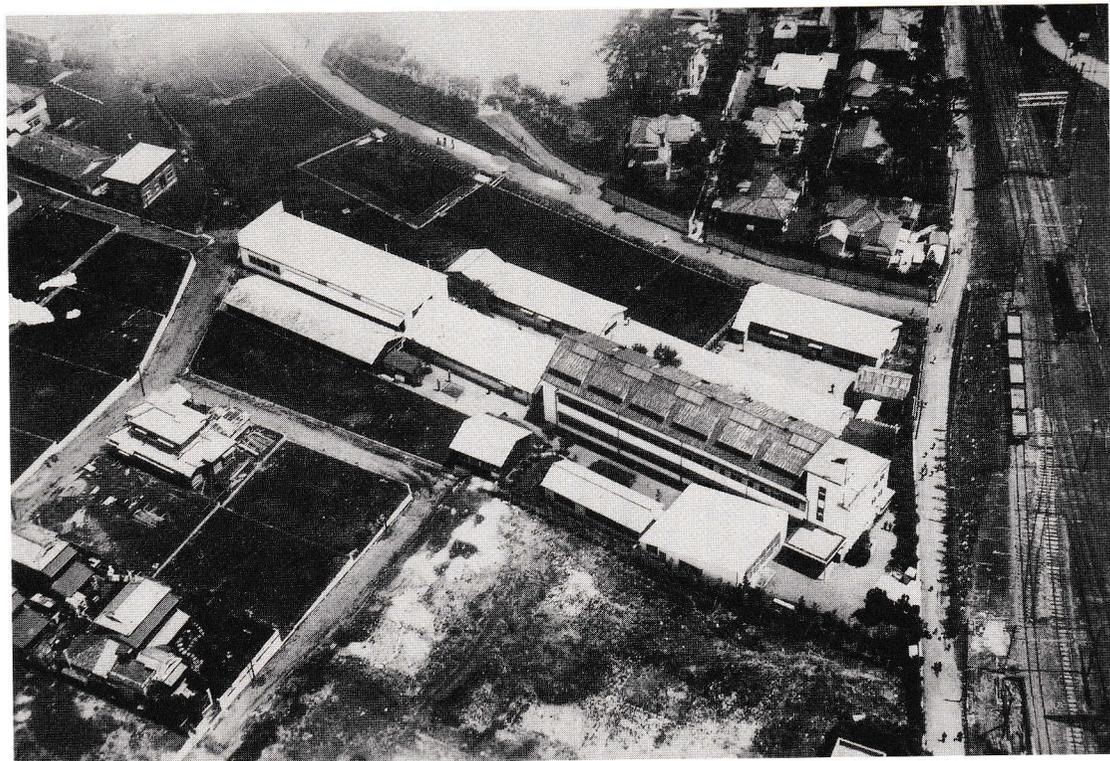
学生時期に勉強も大事ですが、人との繋がりを大事にたくさんの先輩、同期、後輩を作ってください。自分が抱えている悩み、疑問は皆同じように抱えています。また、暗い学生生活を送らないよう毎日明るく挨拶ができる学生生活を送ってください。現在二四歳で人間八〇年生きたとして（八〇年―二四年）×三六五日＝二〇、四四〇日。健康体で八〇年生きたとして後二〇、四四〇日。これを多と思うか少ないと思うか？ その人生の一部の学生生活ですから悔いを残さぬよう過ごして下さい。

最後にこれは私の意見ですが、自分が適正だと思ったら工学部土木工学科なのでから建設会社を目指してください。

そして設計・技術部等大事なスタッフ部門ですが、やはり建設会社は物を作ってなんぼの世界です。現場はきつく、汚く、測量一つの間違いがすぐに何百万、何千万円に跳ね返ってきます。その大変な中でも現場が生産部門であり現場の人間がスタッフを養っているという気持ちです。それが新入社員でも二〇年生でも変わりません。ですから内勤希望でも現場を経験してから内勤スタッフに行ってください。現場の苦勞を知らない絵空事の仕事を出来ません。厳しい時期ですが仲間をたくさん作り、悔いを残さない学生生活を過ごして下さい。



五反田校舎（昭和4年当時）



大岡山校舎（昭和9年当時）

座談会 & インタビュー



座談会

親子二代 土木を語る 親子二代、母校を語る

高橋三郎・昭和24土卒 高橋利明・昭和61土卒

有馬禎男・昭和37土卒 有馬敬幸・平成7土卒

須藤 忠・昭和39土卒 須藤圭司・平成7土卒

中埜 豊・昭和44土卒 中埜智親・平成8土卒

中部恭二・昭和37土卒 小玉克巳・昭和31土卒

皆川 勝・昭和54土卒 仲宗根茂・昭和51土卒

司会 最初に会長からお願いします。

中部 現在緑土会の会長を仰せつかっております三七卒の中部でございます。

きょうはご多用の中、七〇周年の記念誌を飾るのにふさわしい、二世代土木工学科を卒業した親子会員にお集まりをいただきまして、食事をしながらの座談会という企画でございます。よろしくお願いいたします。

小玉 お忙しいところ、本当にありがとうございます。親子二代ということで、私の記憶に残っている手取り早い人に電話してお集まりいただいたということでございます。

それでは、皆様のご健勝を祈って乾杯したいと思います。(拍手)

親子二代は、一四、一五組ぐらい

有馬(禎) 親子二代というのは、土木では何組ぐらいあるんですか。

小玉 きょうは四組の方々ですけども、このほかに、例えば川崎市役所の府川さん、息子さんが神奈川県庁。それから、四〇年は、ハザマをおやめになった今井さん。息子さんもハザマ。小原さんもハザマですが、今はライト工業で息子さんも土木です。それから四年の五艘さんは今、日本建設コンサルタンですが、前は前田建設工業におられた。息

子さんは福田組。四九年では、佐川さんの娘さんが大林道路で、お父さんは福島でご商売をされている。

今、学生にも何組かおります。もう少し調べれば一四、一五組ぐらいはおられると思います。

当時の正門は木造アーバン式

小玉 恐らくお父さん方が出られた武蔵工大も大分経ちましたから、相当様変わりしているんじゃないかと思うんですね。

有馬(禎) 土手つぶちの東急ゴルフのところがマンションになっていました。

小玉 そうですね。ゴルフ場のクラブハウスはマンションの後ろの方にあつたはず。昔は校舎も木造でしたからね。

高橋(三) 木造だし、校舎の廊下はどこどころ穴がいちちゃって、運動場は草ぼうぼうなもの。冷房はないし、暖房はダルマストープが一つですよ。

中埜(豊) 最近、学校へ行かれたことがありますか。

高橋(三) ありますよ。

須藤(忠) 最近は何年に一回位大学に行きますね。

中埜(豊) びっくりするでしょう？(笑)

高橋(三) 当時の学校の門は木造で、五メートルぐらいあつたかなあ、アーバン式で空間のある門で有名でした。

小玉 蔵田先生がつくられたんです。

高橋(三) それを設計した蔵田先生が後に早稲田の建築科の主任教授になられたというので建築科の連中は鼻息が荒かつたね。早稲田よりおれたちの方が先に蔵田先生に習ったんだということでしょうね。

小玉 正門、通用門というんですね、古い建物にしてはちょっと光っていましたよ。

高橋(三) 我々の入学は終戦の翌年で、土木建築はこれから復興だということですので競争率で、土木は一三倍でした。

皆川 当時、学科は幾つ？

高橋(三) 土木、建築、電気、通信、機械の五科でした。

土木、建築はほかの科と全然違う感じだね(笑)。土木科の生徒が何でも一番中心になっていた。終戦直後に入ったから、一番年上は二八歳でした。その中で陸士、海兵を出ている者は四つぐらい上だから三年生よりみんな年上でした。先生は「僕は」といつているのに、生徒は「わしは」といつてるんだから。(笑)

皆川 高橋君はそういう話をよく聞く？

高橋(利) さんさん聞かされてもう耳にタコができています。(笑)

中部 卒業されて、須藤さんはゼネコンに行かれた。中埜さんは親子でコンサルタント。息子さんの方は親に対して競争意識というかどうかですか。

中埜(智) 社会に出て、見方が変わりましたね。

中部 えらくよく見える。

中埜(智) この業界でよく三十年近くやってきたなあ、と。(笑)

中部 有馬さんと高橋さんは親子二代の経営



中部泰二・緑土会会長



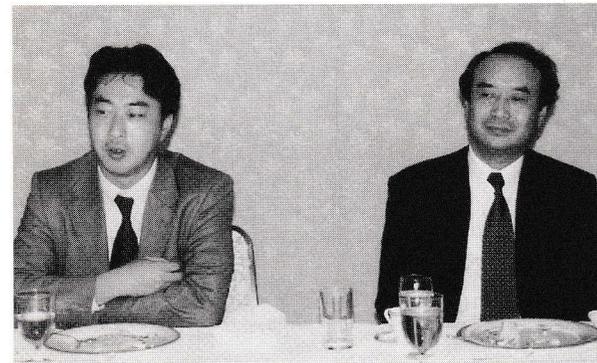
有馬禎男・敬幸父子



高橋三郎・利明父子



須藤 忠・圭司父子



中埜 豊・智親父子

者ですね。有馬さんは家へ帰られてどうですか。

有馬(禎) もう水みたいなもので、何にも感じませんよ。実際に生活していても信頼していますから。

小玉 息子さんは丸磯には何年いたんですか。

有馬(敬) 三年と一カ月いました。

小玉 丸磯である程度修行されて、それで父さんが、もういいだろうと。

有馬(敬) いや、まさしく水のように自然な形でした。

「緑土会」はまず学生会からスタート

司会 親子で武蔵工大、同じ大学、同じ業界でやっていて、今、水みたいだというお話でしたが、大学に対して親子で違った見方かありますか。それぞれの時代で大学の設備も世の中の背景も違うんですが、その辺どうですか。

有馬(禎) 大学時代、息子とどう違うかはよくわかりませんが、私の学生時代を思い出してみると、楽しいのはクラブ活動。たまたま一年生のときはワンダーフォーゲルだった

んですが、息子も土木でワンダーフォーゲル(笑)。ワンダーフォーゲル部では創部以来最初の親子二代だというので、何かと顧問の安味先生に声をかけられました。二年生のときには私は緑土会の方へ肩入れしちゃって、自然とワンダーフォーゲルを抜けちゃったんですよ。

司会 緑土会の学生会ですね。

有馬(禎) そうです。

小玉 三六、七年ぐらいに、緑土会というのは「学生会」がまずスタートして僕の記憶で

いうと、四一年ぐらいから緑土会という「卒業生の会」をつくらうということで、田辺先生をはじめ東京ガスにおられた今川さんに会長をお願いして、緑土会がスタートしたんです。ですから、昔をひもといていると、学生が緑土会という名前をずうつと伝えてきて、緑土会が延々と続いてきたんだらうと思うんですが。

有馬(禎) そうですね。高橋先輩とご一緒に自由が丘で緑土会をやったことがあります。私の緑土会というのは、文化祭にいろいろ出展するとか、企業に卒業生の配属先を問合わせる手伝いや雑誌の発行が緑土会の活動だったんです。

小玉 三七年の隈元さんが、同窓会的な緑土会、卒業生の会は必要だということでガリ版で名簿をつくって、ホチキスで止めたような名簿を出したんです。

須藤(忠) 私は三〇年代の中程の入学で後半の卒業で、息子は平成の入学ですが、まあ、学問は基本的にはそう変わってないんですけど、その勉強をする手法はもの凄く変わりましたね。僕らはタイガー計算機、計算尺、そろばんの時代ですけれども、今は電卓、パソコンの時代。計算・作図の手法が凄く変わって今の学生は本当に楽じゃないかと思えます。

小玉 初任給が大卒で一万円ぐらいのときに手回しのタイガー計算機は、三万五千円でしたからね。

須藤(忠) 大学に数台有ることは知っていましたが、私達は、使えないんですね。それで、橋梁設計の計算なんかする時は、アルバイト先の社長に頼み込んで借りてきて計算した記憶があります。

小玉 そうですね。やつぱり大変でした。
皆川 中塾さんは有馬さんからまた少し後の世代ですね。

中塾(豊) はい。私はお父さんの中では今日一番若くて、安心したんですけど(笑)。

私の学生時代はクラブ活動を積極的にするわけではなかったんですが、緑土会の学園祭の時に、恐らく三年か四年の時に初めて貢献らしいことをしまして、その記憶だけは鮮明に残っています。小玉先生は私たちの担任だったんですけれども、四年生で研究室に入るときに、先生に拾っていただいたような状況でした。卒業する段階で先生には大変お世話になりました。そのころから先生には頭が上がりません。息子も同じ土木でお世話になりました。中塾家の歴史は小玉先生なくしては語れません。息子がどのような経緯でこの学校を選んだのか、私なりに解釈すると、私の後姿を見

て土木を選んだのかなあとという気がしたんです。会社の人々が良く自宅に来ていて、土木とか都市計画などの話に触れる機会が多かったことも影響したようにも思います。

司会 その辺、息子さんはどうですか。

中塾(智) 実は工業化学と土木で迷ったんですが、化学で受験できるということで武蔵工大を受験しました。当時は都市計画やゴミ処理に興味を持っていましたので、土木を選びました。

皆川 そういう意味では、お父さんが「武蔵工大がいいよ」と誘導しなくても、間接的には……。



小玉克己・土木工学科教授・緑土会副会長



有馬禎男氏

中埜(智) 結果的には父から影響されたように感じています。(笑)

戦後の武蔵工のクラブはまず土木科から

司会 高橋さんの時代のクラブというのは

……。

高橋(三) 戦後の武蔵工のクラブは昭和二年の九月頃に、まず、土木科から生まれました。校舎はぼろぼろ、運動場は草ぼうぼうだし、ひどいなというんで、「学生生活をみんな楽しんでやろう」ということで、私らが一年の二学期につくったんです。

戦後、谷川岳で遭難した土木科の私と同期の小林君という男が陸上競技部をつくり、機械科が野球部、あと卓球や剣道、柔道などほとんど全部生徒が始めましたね。それが今日の各クラブの始まりです。

それから運動会は三年生が主体でやったんです。二年生になったら、小林は遭難したから、私が初代部長をやったんです。だから、二年生が部長で、三年生を部員でこき使っているんだから、今じゃ考えられないですよ。演劇部も土木科の小沢が俳優出身だったんで(笑) つくったんだよ。当時、昭和二、三年ごろは、早稲田と武蔵工の演劇部は日本で双璧だった。ラジオの放送劇では、早稲田が赤い陣羽織、武蔵工がモリエールの「タマゴ」をやった。その二つだけ。

私はよくみんなと飲んで酔っ払って悪さしたりしていたら、演劇部の小沢が来て、おまえしかないというんで、演劇部にも無理やり入れられて、八木柎一郎の「湖の娘」をやらされた。当時、毎日ホールとか神田の共立講堂で武蔵工は公演したんです。

小玉 男ばかりですか。女性もいたんですか。

高橋(三) そのときに、女性がいないと困るというんで、交渉役を決めるのに、くじ引きを引いたんですよ。大岡山にげた専がある。げた専で、歯の学校ね。歯を入れるからげた専と呼ばれていた。(笑) きれいな子がいるとおふくろがいったもので、じゃあ、げた専をスカウトしようといって、全権大使でだれ

か行ってくれという。あのころ、男女は七歳にして席を同じゅうせずだから、女と話したこともない。全然だめだから、みんな嫌がって行かないんですよ。で、抽選したら、私と県会議員をやった井田君が当たっちゃった。

その当時、げた専へ入るお嬢さんはみんな金持ちのお嬢さんで、下宿して、一部屋でもベッドを入れてる。そこへ案内された。ベッドがあったから、私と井田は固くなっちゃった。(笑) もうカチカチだよ。今でも覚えてるけど、話も何も、女と話すなんて生まれて初めてだから、もう真っ赤っかになっちゃって、用件だけいって、じゃあ、今度学校へ来てくれませんか。

学校もひどかったねえ。げた専のお嬢さんを二人連れて、私と井田が、ちょうどメモリアルホールの草ぼうぼうを男二人に女二人が



有馬敬幸氏

歩いてきたから学校は授業にならない。女が初めて入ってきたからみんな窓をあけて「ワット」ていって、授業中止だよ。私と井田は戦後初めて女性を学校へ入れたようなものだよ。(笑)

それで演劇部に女性が入って、やっと女形から脱したんです。げた専の演劇部の次は文化服装学院の演劇部とやって、当時は武蔵工の演劇部といたら、早稲田の連中も一目お大したものだった。

それと、陸上競技部で私は関東予選で、当時日本で一番速いという中央大学の仁田脇(二〇秒三で日本新記録をつかった男)を、決勝で八〇メートルまで先に走ったんです。最後にやられたけど。ちょうど私は、今でいうチフスカ疫病だったんだね。一カ月ぐらい下痢がとまらないんですよ。一〇キロぐらいやせちゃって、「おれは無理だ。出ないよ」と部員にいったら、「第三のコース、武蔵高専・高橋君」と呼ばれたから、むずむずとして、「負けてもいいから、相手が仁田脇じゃ一発やってやるか。おい、スパイク持っでこい」といって、それで走ったら、私の方が速いんだね。それだから、陸運会長の織田幹雄さんがびっくりしちゃって武蔵高専にはとんでもないやつがいるという。

小玉 今のオリンピックじゃないですか。(笑)

高橋(三) それから、インターハイが新潟の白山競技場であった。普通は一番優秀な選手だけ申し込むんだが、部員一三人全部申し込んだ。新潟へ行く金がない。それで、学校の門のところにのほりを立てて、みんな生徒から徴収したんだよ。それで行ったら、今度は新潟日報に「武蔵高専ダークホースの高橋」って出ちゃって、えらい宣伝しちゃった。

だから、新潟近辺の連中がみんな応援に来てくれてね。泊まったところが酒造会社なんだ。武蔵工の後輩で一年生の家だった。みんな、酒好きだろう。毎晩のように晩酌やって。その色白の女の人が三方に乗せて、持つてくるんだよ。で、あした試合だけど、少しはいいだろうというんで、一合が二合、二合が三合で、一升ぐらい酒を食らって……。

皆川 そういう経験される方ってなかなか少ないんじゃないかと思うんですけども。須藤さんはそれから一五年ぐらい時間がたっていて……。学生生活というのはそういう面ではどうでしょうか。

須藤(忠) これといつて、皆さんの前で話すような事はありません。私はクラブ活動も

やっていますでしたから。息子はサッカーの同好会に入会していたようですが。皆川 息子さんはサッカー同好会へ入られていたんですか。

須藤(圭) 途中であんまり出れなくなっちゃいましたけれども、違った方向で学生生活を楽しんでしまったんで、それで四年で卒業を出来ませんでした。

小玉 違った方向というのはどういうことですか。

須藤(圭) マージャンもやりましたけれども。車、オートバイを乗り回すのが好きでした。

小玉 でも、今の人はあんまりマージャンや



皆川 勝・土木工学科助教授・緑土会総務部長



高橋三郎氏

らないですね。

須藤(圭) そうですね。今はいろんな遊びがありますから。

小玉 でも、高橋先輩なんかのときは、結構そういうことで全国大会だとかいろんなところに行つて、新聞に出るわ、学校の宣伝というのは随分やっていましたね。

皆川 随分新聞に出ましたね。谷川岳はちょっとあんまりよくないかもしれないけれども。

小玉 三〇年代になると、中部会長るとき空手で全国大会で優勝するわで新聞に出たりなんかするのは結構ありましたね。

皆川 自分たちが大学をつくっているというような感じがすごく伝わってきますね。

高橋(三三) 自分たちの学校にしようと、いい学校に。

学生運動、五〇年近くまで続く……

中部 三六年、三七年のころは安保闘争で、四四年は安田講堂で学園紛争が盛んでしたね。

小玉 まだ四三年ぐらいはうちの学校は、それほど学生運動はなかったんですよ。だから、四五年ぐらいから集団団交だとか、学長もつるし上げ、育英会の理事長だとか事務局長を呼んできてつるし上げを……。そういうのが五〇年近くまで続いたんですよ。だから、中壘さんなんか卒業してから後に学生運動が……。

中部 須藤さんたちは安保のころどうだったんですか。

須藤(忠) 安保とか学生運動というのは、学生の時は殆んどなかったですね。会社へ入ってから、現場でよく学生デモに遭いました。そのデモ対策で、重機の燃料を全部抜いたり、凶器となり得る仮設材の盗難防止に努めました。

小玉 あのころは今のガードマンとかなかったでしょうから、自分のところで全部守ったんですね。

須藤(忠) 当時、歩道は平板ブロックで舗装されていました。その平板ブロックを砕いて投石するので全部はがしてアスファルト舗装に代える時代でしたから。

小学生の時は父の現場を見たのがきっかけ

皆川 須藤さんの息子さんは、そういうお父さんのお話を聞かれたことはありましたか。

須藤(圭) うちの場合家族の事、私の学校の事を含めて父との会話があまりありませんでした。

須藤(忠) 会話は少なかったと思います。まだ息子が小学生のころ、私が新幹線の上野駅の工事に携わっていたころ、日曜日に一回現場へ連れていったことがあるんですね。息子が武蔵工へ入った事と、また、建設業へ入ったのは、どうも後で聞いてみると、これが一つのきっかけのようです。それから、高校受験のころになりました。武蔵工大の附属へ行きたいという。「受験しても受からないよ」「受かったら行つていいか」という話になり、どうにか入れてもらえて、卒業してか



高橋利明氏

らまた土木の方へ進んで、会社は違いますけれども、同じ仕事をやっていると、仕事の内容がわかりますから、逆に心配な事が多いですね。

須藤(圭) 子供から言わせると、余計なお世話なんです。(笑) 会社へ行って仕事をして、家へ帰ってきて細かい事をごちゃごちゃ小言を言われて。

須藤(忠) 小言ではないんですが、現場の施工管理は皆さんご存知のとおり、安衛法、道交法等、みんな違反すると法違反になりますから、その辺がやっぱり心配で、「おまえ、こういう場合どうやっている?」という……。小玉 うちに先生がいるような……。(笑) 現場の所長さんとか、お父さんがそういう感じなんだろうね。(笑)

須藤(忠) 仕事の内容が想像できますから。逆に上の息子の場合は全然違う仕事で、内容も分かりませんから心配もないですが、しかし上の息子から見ると私とこの息子との会話を聞いていると、内容は分からないが羨しいそうです。

父とは、やはり水のような……

皆川 有馬君、お父さんはあなたの存在は水みたいだとおっしゃっていましたけれど、有

馬君にとってはお父さんはどういう存在ですか。今、仕事を一緒にされている状況で見られると。

有馬(敬) やはり卒業して会社へ入って、落差というんですかね、衝撃がありました、それから比べると今やはり家へ戻ってきて仕事を一緒にしていると、まあ、普通という感じになってしまっていますけれども。

皆川 やはり水みたいは……。

有馬(敬) そうですね、本当にそんな感じですよ。

皆川 お父さんのパーソナリティーが何となく温かく、少し遠くから見守りましようという感じのお父さんですから。それで水みたいな関係になるんでしょうか。(笑)

有馬(敬) うちの場合、そうなんですか。そうかもしれないです。

昔は本当に、ただうるさいおやじ

司会 高橋さんのところもやっぱり親子で同じ会社でやっていて、二代目ということだろうと思いますけれども、その辺、どうですか。今の親子の関係とか、大学に関する思いとかお父さんのときは創成期だから全然違うだろうと思います。

高橋(利) こういう親父だから、ワンマン

で大変厳しくて、早く死ねと思ってた。(笑) ですが、一緒に経営の一端をやるようになってから、親父は経営者としてはすごい男だなあと見直すようになりましたね。昔は本当に一〇時の門限はあるし、ただうるさい親父だなあと思っていた。

中埜(智) 一〇時は早いです。(笑) 部活で何か延びちゃったら絶対無理ですね。

今、武蔵工大には女性が六五〇人

小玉 いや、中埜君は部活でバレーボールをやっていたから。僕もバレーボールを学生時代やっていましたが、部活をやるとやっぱりコンパだとかがあるから、どうしても一〇時



(司会) 仲宗根 茂・構造実験棟技士・緑土会総務



須藤 忠氏

は無理だからね。

今、工学部には女性が五〇〇人近くいるわけですよ。環境情報学部には三割ぐらいが女性ですから、あわせて六五〇人ぐらい武蔵工大に女性がいるわけです。だから、先ほど高橋さんのお父さんが昔、女性を二人連れてきて授業を中断させた云々なんていうのは、ちよっと信じられない話ですよ。だから、それだけに女性に対する指導というのものはものすごく難しいんですよ。

きょう、佐川さんは土木を出た女性だから、お父さんと娘さんに来てもらって、いろんなことを聞いたかったですね。土木でありながら女性が多くなったというのは、いい面もあるし、逆に悪い面もある。悪い面というのは、全体的に男性がちよっと意気地なしになっているんだね。

高橋(三) 昔、「花と竜」というのがあったけど、それほど世の中が殺伐としていた。空手でもしてなかったら、昭和二〇年代というのは土方をおさめ切れない時代でした。今の労働者自体に力が全然ないね。私たちは、穴を一日一八立方メートル掘ったです。

小玉 一八立方メートルといったら、トラック二台。

高橋(三) だから、昔はブルドーザーより人間の方が安くて早かったんだ。ブルはあそころ一日三万円、土方は三〇〇円。百人でやった方が、ブルより余計掘っちゃう。昭和二八、九年に、今の東急の前の道玄坂の坂は私の会社でやったんだけど、あのととき、武蔵工の空手部の連中を引張ってきて、手で掘ったんですから。(笑) あのところ、空手部は八〇人ぐらいいたから、「おまえら、みんな一〇立方メートルやれ」といって、もう泣きの涙で掘ってね。それがみんな、今、大手の重役になっているでしょう。それが同窓会誌「武蔵」に書いてあるんだよなあ。

先輩、後輩の人間関係を大事にする武蔵工大小玉 堀川学長も古浜前学長も、どこへ行っても土木の卒業生が集まると驚かれます。土木あるいは緑土会には、一種独特な人間関係

があるんだと思うんだね。

皆川 それに何か意味を感じている度合いも大きいんじゃないかなという感じがしますね。

高橋(三) 根本的には土木は受注産業なんですよ。だから、どうしても先輩、後輩とか、人間関係を大事にしたんですよ。私は武蔵工の工業会の役員をやって、支部担当で全国歩いているときに、北海道支部の田中さんとか、福島支部の佐藤さんとか、千葉の磯部さんとか、みんな土木なんですよ。結局、営業をやりながら、先輩、後輩のつながりを強くしてやろうというので、ああいう人は自費で支部をまとめていらしたんだね。

小玉 面倒見がいいね。

高橋(三) 私が福島県の支部へ行ったときは、大先輩の佐藤さんがあいさつに來られて、何を言われるかと思ったら、「徳川さんは一



須藤 圭司氏

五代だけど、わしは一八代、親子代々みんな武蔵工へ入れる」という。で、帰ってきて、当時の山田学長にいったんだ。「佐藤先輩はそうおっしゃっていた。佐藤先輩の息子だけは、どんなに頭良くて悪くても何でも、一八代だけ入れなきゃだめですよ」といったら、「わかった、わかった」っていつて。(笑)

皆川 親子三代は多分大学の中でも数件しかないと思うんですが、皆さんは親子三代土木にしたいという気持ちはありますか。

父が一番忙しい時には思春期だった

中埜(智) もし自分の子が土木を望むなら、そういうことはあるかもしれないですけど、本人の希望を曲げさせるといふことはしなれないと思いますね。

皆川 私の友達に、三歳ぐらいの子供におもちゃを与えるときに、ブルドーザーとか、全部土木関連を与えて洗脳しているというやつがいたんですね。

中埜(智) ああ、消防車のはしご車じゃなくてクレーン車とか。

皆川 そうそう。(笑)

中埜(智) それで、実際はどうなったんですか。

皆川 あの子は土木屋になるでしょう。まだ

小さいんですね。

中埜(智) 子供の事は、まだ考えてないですね。

皆川 多分お父さんがそんなに強く誘導されなくて土木屋になったからでしょうか。

中埜(智) 今思うと、一番父が忙しかった時にいわば思春期を迎え、父がいなかった時期が多かったものですから、ある意味で反発もあつた気がします。

小玉 昔は土木屋さんというのはそういうものでしたけどね。

中埜(豊) あるとき、女房から、うちは母子家庭とほとんど同じですよという話を聞かされて、そうだったかなあつて初めて認識したんですね。私は現場には行くことはなかったのですが、ただ、会社は忙しかつたため、土曜日は毎週出ている状況でしたから。

皆川 好きでそうなるわけじゃないですね。



例えば、連休が始まる前に役所から、連休明けの月曜日までに持つてこいとか、そういうことに対応しないといけない。

中埜(豊) そうなんです。三月の納期は全部連休明けまでですからね。連休が終るとほつとしたという状況が何年か続いたことがありましたね。そういうところを恐らく息子は見ていた。たまたまそういう感受性の強いときに、そういう親父を見ていて、何かを感じたのかなあと私は思っているのですけれども。

子供のころ、親父に「おじちゃん、きょう泊まっていくなの？」

小玉 須藤さんは恐らく現場であちらこちらというんで、ほとんど家に帰つてこないときもあつたと思うんですね。息子さんにとつては、おやじがいらないような感じで、親子の対話ができなくなる。いや、僕もよく聞くんですよ。息子がぐれちゃつたとかいふのをね。そういうことはなかったですか。

須藤(忠) そうですね。忙しかつた時ですから子育てはすべて家内にまかせっきりのよくな訳です。確かに朝早くて、夜遅くて、僕ら現場ですから、休日は第一、第三日曜日で月二回休みが取れば上等でした。そういう父親を息子達はどう感じておつたか分かりま



中埜 豊氏

せんけど。

皆川 どう感じていたんですか。

須藤(圭) 子供のころ、親父というのを知らなかつたです。今、母親に聞く話だと、家に帰ってくるのは、遠い現場は月に一回とか、現場が近くても朝早く、夜遅く、僕は寝ているので顔を合わせる事が少なく、ある時、「おじちゃん、きょう泊まっていくの？」って言った。(笑)

皆川 だけど、「おじさん」といわれるとシヨックですよ。根底で支えているのは一体だれなんだって。(笑)

小玉 いや、それはあると思いますよ。

須藤(忠) 今みたいに土休制になるとは夢にも思いませんでした。せめて日曜日だけでも休める日が来ないかと……。

高橋(三) 昔の土木は、大体雨でなきや休

みはないでしょうか？ 日曜日は休みなんて昔はないから。

小玉 雨が降らなきや休みにならなかつたですからね。

司会 三代目をどうするかという話、中埜さんにお伺いしましたけれども、高橋君はどうですか。

バンカラがすごく好き、できれば空手部に

高橋(利) 好きなことをやらしてあげたいですけど。できれば武蔵工に入ってもらいたいなという気持はありますね。まあ、昔はもつとすごかつたらしいんですが、僕らのころもまだ少し蛮カラが残っていて、そういう学校がすごく好きだったから、できれば息子も入れたいと思っていますね。それと、空手部に入っていましたんで、武道をやってくれればと思う気持ちはあります。

司会 先ほどから親父さんの方の武勇伝を聞いてきましたけれども、息子さんの方も、大学四年のときに四、五人で黒いつなぎで歩いていた。(笑) 本人は気がついてないのかもしれないけれども、後輩たちは怖くてとても近寄れなかつたといっている。空手では世界大会まで行ったんですよ。

小玉 それはやっぱりすごいですよ。お父さ

んの厳しさが息子さんにちゃんと伝わっているから。そういう点ではやっぱりすばらしいですよ。親子二代というのはすばらしい。司会 須藤さんどうですか。

土木をやりたいと思わせる父親になりたい
須藤(圭) 僕の場合は、親父から、土木だとか武蔵工だとかという入れ知恵をされたことではないんですね。さっきも話があつたように、現場にたまたま連れていってもらつて、俺もこういうことがやりたいと。自分の子供にも見本になるような土木工事をやりたいなと思わせるような父親になればなあ。土木の道を選んでくれて、武蔵工へ行つてくれれば、まあ、うれしいなあ、そういう感じですね。

司会 私はよく娘を連れていくんですけれど



中埜智親氏

も、娘が土木屋になっちゃうんじゃないかと。小玉 いや、多いですよ。娘さんが土木屋になられる。例えば佐川君は福島で生コン屋をやっているわけです。女学校へ行つてた娘さんがいきなり、どうしても土木へ入りたいたいで。センター試験入試で入ってきたんですよ。で、僕が面接したんです。そのときに、どうしても親を見ていて、そういうものにつきたいといったから、これはすばらしいなあと思えましたね。

それで、今、大林道路にいますすけれど、「頑張っていますよ。えらいいい学生を紹介してくれてありがとう」と、四二年卒の水谷所長がそういつているくらいで。

司会 同じ質問なんですけれども、有馬君はどうですか。お子さんがきたら、やっぱりおもちゃはクレーン車を与えて、ブルドーザーのおもちゃをとというような、そういう意識はありますか？

自然と土木の道を望んでくれればうれしい

有馬(敬) できればそういうのもいいなあと思つていますし、自分の場合は親とずうつと生活していましたんで、本当に自然と土木の道という感じになったものですから、同じようなことができればいいなあと思つていま

す。

皆川 端的にいうと、三代目も武蔵工大に……。

有馬(敬) そうですね。そういうふうに見えてくれるならばうれしいですね。

司会 何かとつても穏やかな感じに見えるんですけど、三代目も同じ顔をして穏やかな顔で、武蔵工大です、となるような気がしないでもないですけれども。

そろそろ時間が迫ってきましたので、これからの武蔵工大に対して何を望まれるか、どうあるべきかということをお伺いしたいと思います。

指導要綱の欠点を補う学校教育をしっかりと有馬(禎) 高等学校までは教育指導要綱がころころ変わるからいけないだと思ひますけれども、指導要綱を武蔵工大の先生がよく

理解してというか、把握してその欠点を補う教育課程というのをお願いしたい。

例えば、最近では、パイ、三・一四一五を三でいいという話でしょう。

皆川 円周率の問題ですね。

有馬(禎) 小数点から下は捨てちゃった方が楽だという。そのように育てられた子供を何とかカバーできる学校であつてほしいというのが私の希望ですね。

司会 より個性的な、要するに画一的な教育ではなくて、武蔵工大は武蔵工大としての教育のあり方をしっかりと踏まえてくれと、そういうことですね。

授業の合間に、早目のうちに実社会の話を

有馬(敬) 就職を志望するときの前段階で、業種によつて、実際こういう仕事をするんだよということを、また、こういうことがあるんだよということを教えていただければと思います。授業の合間に、早目のうちにいつていただけるといいですね。四年になつてからだと、もう実際就職活動になつちゃうんで、もつと前からお話しただけだと思います。小玉 そういうことを我々も反省して、今、中塾さんとか、卒業生に来てもらつて、そういうことをPRしてもらつてます。それは確



かに私も感じていたことですね。

司会 要するに、学生時代に社会をもう少し見せてほしかったということですね。

有馬(敬) はい。

法令知識の教育をしつかりと

須藤(忠) 私は、建設業を志す者にとつては本当によき時代に学生生活を過ごし、また、社会人となり、六月に退職いたしました。今勤めておられる方、これから卒業される方、これから入学される方は何かと大変な時を迎えました。日本の歴史を見ても、土木工事というのはなくなることはありませんから、頑張つてほしいですね。今、大学でどう教育をされているかわかりませんが、私は施工部門が多かったものですから、施工関連で工事を担当する者にとつて工事事故、労災事故というのが一番怖いわけです。安全衛生法とか道路交通法等に関係する事故は大変ですから、その辺のことを十分に教えて欲しいと思つています。

小玉 それは防災工学という科目があります。須藤さんのときはそういう科目はなかったんですが、最近はやつぱりそういう防災関係の授業もちゃんと取り入れてやっていますので。ゼネコンへ行く人はやつぱりそれは必要だと

思いますね。

須藤(忠) 施工技術以前に安衛法、道交法、産廃、騒音その他に関係する法令の知識がないと最近の施工管理は努まりません。

現場実習を多くするのも一つの方法

須藤(圭) 僕は今施工管理の仕事をしていますが、僕もまだ若いですけれども、最近卒業してきた若い人を見てみると、頭はいいんですよね。パソコン等を駆使しての計算能力は素晴らしいと思います。就職を前に進路等を決定する時は、特に、企業に就職を希望する場合、施工管理、設計部門等がありますが、設計部門を希望したのに施工部門になり現場が向かないと退職してしまう人が多くいます。そういう事を少なくするために現場実習を多くするのも一つの方法ではないでしょうか。

小玉 学生が社会へ出て勉強するというのは大事だよね。だから、フィールドリサーチといて、学生実習を去年から始めたんですよ。三年生で現場に出てもらうという形で、社会の勉強してもらおうという形をとっています。んで、ちよつとまた変わってきています。

建学の精神「公正・自治・自由」の誇りを忘れずに

高橋(三) 私が最近一番残念に思う事は、空手部を強化するために、こいつは全日本より素質があると思つて、その選手の高校へ行って先生に頼むでしょう。「武蔵工へ何とか入れるから、この生徒をください」と、OBの人が頭を下げて頼みに行くわけですが、それをこの人は選手として資格が少ない、全国大会の出場回数が少ないとかいって、学校の推薦委員の先生方が無視したら、もう二度と頼めないんですよ。だから、だんだん空手部は衰退してしまつていい選手を引き抜けないんです。だから、OBの意見も入れてほしいんですよ。

皆川 私学ならできるはずですよ、公立じゃないんだから。

高橋(三) 私学なんだからできるわけですよ。

それで、「公正・自治・自由」という、こないだ建学の精神はないんです。武蔵工は日本でただ一つ生徒のつくった学校なんですよ。これを忘れちゃいけないんです。武蔵工だけは建学の精神で、私は創立三〇周年にOBの連中を工業会で集めて、建学当時のことを聞いたんですよ。そうしたら、今の芝浦工

大から生徒が先生を引っ張ってきて武蔵工をつくって、五反田の明電舎かなんかの倉庫にミカン箱で生徒は勉強したんだそうですからね。それが武蔵工の第一期生で始まりだった。こんな立派な学校はないんです。誇りを持っていえる学校なんだということを認識してもらいたいですね。

司会 利明君、どうですか。

現場に学生を出して、社会人と触れさせる

高橋(利) 私はあんまり勉強しなかったんですけれども、社会へ出て役に立ったというか、学校で習ってきたことが実際社会に出て役に立つというのは、最初ほとんどなかったんですね。現場へ行くと、とりあえず現場で覚えろという感じで、数字じゃなくて体で覚えさせられましたから。今、先生もいわれたように、これから、土木をやっていらつしやる方は現場に学生を出して、社会人と触れ合うべきでしょうね。いろんな意味で社会の厳しさを学生時代に触れさせてあげて下さい。高校と違って、大学というのは社会へ出る準備期間みたいなものですから、そういうのもっともってと学生たちに経験させてやった方がいいんじゃないかなあという感じです。

発想豊かな学生をつくらう

中埜(豊) 物事に対して逃げない学生をつくってもらいたいんです。社会に出れば、どうしても厳しい状況になり、そこから逃げたくなりますね。一度逃げてしまうと、もう癖になります。ですから、逃げない学生をつくってもらいたいと思います。

それから、若いときは結構仕事はできるんですが、だんだん上になっていくと、伸び悩んでしまう社員が多いように思います。結局上になったとき必要になる新しい発想ができない。そういう状況を見ると、やっぱり発想が大切だなあと感じます。なるべく土木だけじゃなくて、いろんな事に興味を持ち理解しようとする発想の豊かな学生をつくっていたきたいなあと思います。

小玉 クラブ活動も大事なことだね。やっぱり幅広くなるんで。

中埜(豊) そうです。発想の豊かさとか、人とのつながりは仕事にもその他のことにもいろいろと生かされるものだと思います。

就職が厳しい時こそ、もって武蔵工大のアピールを

中埜(智) 卒業年次でいうと、本日の出席者の中で一番就職が厳しい時に入ったと思

ます、入社三年目なんですけど、武蔵工大の土木工学科のビジョンというのが業界の方々に伝わっていない部分があると思います。どういう生徒を育成して社会に出しましたというのをもってアピールできるような形であれば、就職が厳しい中でも結果は出ると思います。年配の方々から、武蔵工大というのは優秀な方々が多い、というのをよく聞くんですけども、平成に入って出られた方の名前はあまり聞かえてこない。こういう人材を育てましたというアピールがなければ、武蔵工大というのは本当に、新聞の片隅にしか載らない存在になってしまっていると思います、やはりもってアピールされることが必要だとも思います。

小玉 確かに今は就職はものすごい厳しさがあるんで、それは我々も反省しなきゃいけない。波があつて、今就職する学生は気の毒だとも思います。だけど、その厳しさに何とか打ち勝つて入るような学生を育てないといかんと思っています。いや、本当に貴重なお話を聞かせていただいております。

司会 きょうは本当にありがとうございます。

小玉 本当にありがとうございます。楽しい時間でした。本当によかったですね。

親子三代武蔵工大・土木

多分、最初で最後ではないかと言われる親子三代武蔵工大卒業。
今回、福島県出身者で佐藤康実氏（昭六土卒）と共に、親子三代にわたって武蔵工大土木工学科を卒業された安宏氏（昭三七土卒）、光洋氏（平七土卒）に登場してもらった。

私はどうしても東京へ行きたい。それで、親が出た武蔵工大へ行きたいと親父にも言ったんです。……東海林稔さんといって、その人に大変うれしかったという話をしていました。

皆川 私が佐藤光洋君の卒業研究の指導をした関係で、お父さんの安宏さんが昭三七年の土木卒業、おじいさんの康実さんが二期生（昭六土）ということを知りました。三代にわたって武蔵工大、それも三人とも土木です。今日お伺いする前、他の学科の先生方も含めていろんな方とお話ししました。親子二代ということならかなりいるだろうが、三代となると今までないだろうというのが共通の認識なわけです。そして、これからも多分出てこないだろうということ、大変興味深く思っております。



初代康実氏晩年のスナップ

安宏さんはお父上の康実さんから見れば二代目で子の立場、光洋君から見れば親の立場ということ、二つの立場であられるわけです。そのへんで、安宏さんのお話からぜひ伺いたいと思います。

佐藤 親父は昔の武蔵高専を卒業して、名古屋市役所下水道局に就職したんです。恩給がつくまでというので、一八年間勤めまして、その後長男だから親の面倒を見なければならぬということ、出身地の郡山に戻ってきました。その頃は恩給がつくまでは役所をやめるなどという時代だったのと、親父のおじいさんという人が郡山に戻るようによく言っていたらしいですね。

皆川 康実さんは一期生ですか。

佐藤 親父たちは土木一期生だと言っていますが、大学の名簿を見ると二期生となって

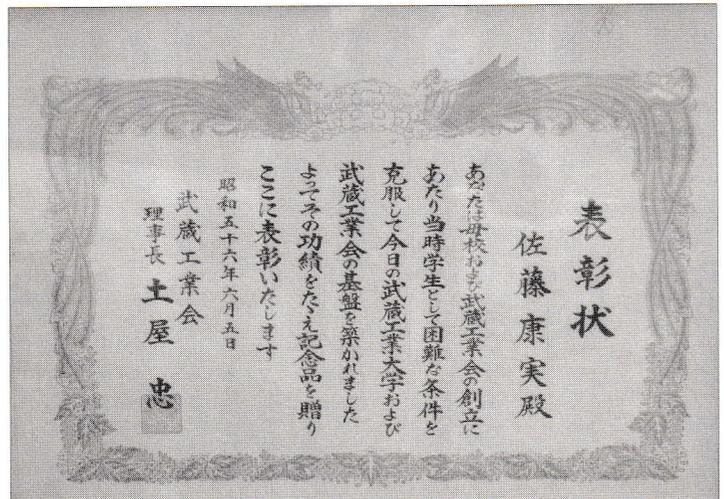
いるようですね。それで、役所を辞めた後、名古屋の日産建設という会社に勤めて二、三年いてこちらへ戻りました。日産建設を辞めたんではなくて、郡山に日産建設の営業所を作ったんですね。当時大手の建設会社だったんですけど、郡山では日が浅く、役所の仕事をいただいていたようです。

皆川 武蔵に入るのを決めたのは、康実さんが卒業生だったからですか。

佐藤 そういうこともありましたが、私が高校を卒業するときに、この郡山には日大の工学部があり、どうせ土木に進むならそこへ行ったらどうかと高校で言われたんです。でも私はどうしても東京へ行きたい。それで、親父が出た武蔵工大へ行きたいと親父にも言ったんです。おかげで武蔵工大へ進むことができました。

皆川 そのとき、康実さんの様子はどうでした。

佐藤 それは喜んでいましたね。親父の同級生がまだ武蔵にいます、今は亡くなってしまいました。東海林稔さんといって、その人に大変うれしかったという話をしていたようです。私には何も言いませんでしたけどね。皆川 康実さんの学校時代の話は何か聞かれていますか。



初代康実氏は、母校および武蔵工業会の創立に寄与したとして工業会より表彰された

佐藤 親父のですか。親父のときはまだ学校ができたばかりで、放校とかストライキとかいろいろあったらしいですね。親父たちは及川先生に付いてね。武蔵は芝浦工大から分かれてきたそうですね。慶応の先生を頼ってがんばったっそうですね。その頃は大岡山にあっただけですか。

皆川 そのようです。

佐藤 そういふ話はしょっちゅうしてました。あまり詳しくは聞いていませんが、卒業できるように一生懸命だったとはよく言っていましたね。

試験のとき、多摩川にかかっている橋の名前を書けついでいうんです。丸子橋とかね。それで合格をもらいました。

皆川 安宏さんが武蔵工大に入られた頃の大学の様子はどうだったですか。

佐藤 学校はまだ木造の校舎ですよ。研究室もみな木造でした。たった一つだけ鉄筋コンクリートの建物がありまして、卒業する頃また一つできました。学校といってもまるっきり木造のね、今の事務局がある所に木造の建物がありました。

皆川 現在の武蔵にお出になられたことはありますか。

佐藤 いやあ、最近ちよくちよく行ってました。今年から、後援会の理事をやっています。その前は評議員だったんです。二年間。それで今年も学校へ行きました。

皆川 それはそれはお世話になっております。在校当時、土木科の先生方がいらっしやいましたか。

佐藤 私の担当は神山先生でした。小玉先生

もおられました。

皆川 三七年ご卒業ということは、小玉先生は三一年ご卒業だから、まだ助手でおられた。佐藤 神山先生、小玉先生、それから成山先生、そう、ガンで亡くなられた成山先生ですね。それに、測量の田辺先生。西脇先生もおられました。先生には橋梁を教わりました。私はデキが悪かったから橋梁なんて分からなくてね。試験のとき、多摩川にかかっている橋の名前を書けっていうんです。丸子橋とね。それで合格をもらいました（笑い）。

皆川 その当時、今で言う研究室ってあったんですか。

佐藤 あのね、土質とコンクリートはありましたね。我々の卒論は道路だったんですが、道路の先生は都庁のお役人でした。ですから特別一生懸命はやらなかったですよ。土質とコンクリートの研究室は木造の平屋の建物にありましたけど、研究室っていうのは何もなかったですね。

皆川 あの頃、寮なんかあったんですか。

佐藤 寮は自由が丘にありましたね。私は行ったことはないんですが、寮の人が何人かいましたね。付属から来た人は皆大いばりで、地方から来た私たちは馴染むのに半年ぐらしかかりました。



佐藤安宏氏

皆川 その頃の土木の学生というのは、他の科の学生と比べて違ってましたか。

佐藤 空手部に入っている人が多かったですね。バンカラで皆空手部だと大いばりで、五〜六人は同じ下宿にいました。空手部は強かったようです。今、理事やっている中部さん、キャプテンだった。私と同級生だった。あの頃空手部は本当に強かったですね。

皆川 生活の方はどうでしたか。

佐藤 東京へあこがれて行ったけど金はないし、金は決まったぶんしか送ってもらえなかったし、大変でした。

皆川 その頃いくらぐらい送ってもらってましたか。

佐藤 一三、〇〇〇円家から送ってもらってました。だいたい下宿代を払ってあと生活

費というくらいで、それでほとんどでした。酒などあまり飲めませんでした。ラーメンが一〇円でも安ければ一キロでも二キロでも歩いて食べに行っただすね。年中腹が減ってました。食べるのに必死でした。

皆川 そうするとアルバイトでも。

佐藤 アルバイトなんてなかったですよ。中には、日曜日に二子玉川園の切符切りに行った人もおりましたが。

皆川 送金が一三、〇〇〇円ということですが、当時の初任給はいくらぐらいでした。

佐藤 四年生のとき一三、〇〇〇円送ってもらってんですが、授業料とかは別で。そのとき卒業して初めてもらった給料が一三、五〇〇円でした。ですから、今息子に仕送りしていますが、その金額が今の初任給とだいたい同じくらいですから、昔も今も変わりませんね。息子は仕送りの金額に良い顔をします（笑い）。一〇万円という部屋代が高いですよ。郡山から見ますとね。

皆川 それで三七年に卒業して就職された。

佐藤 社長も常務も先輩で、先輩が一〇人くらいおられました。ゆくゆくは郡山に戻って親父と一緒に仕事をやるつもりでしたから、何でも教えてもらって、いずれ役に立つようにと思いました。七〜八年見習いをお願いします

て就職したんですが、それを四年近くで辞めて郡山に帰ってしまいました。親父が定年になって勤めも仕事もないし早く一緒にやろうというものですから。会社でも、これからやると現場監督でもしてがんばってもらいたいと言われていた矢先でした。親父は帰ってこいと言うし、会社は辞めさせてくれないし、大変困りました。親父が退職後食べていけないということで、私は夜逃げ同然にして戻ってきました。社長にもあいさつしないで辞めて来てしまいました。それが今でも心残りです。

下宿には下着とか行李一個ぐらしか荷物はないわけです。それをもって帰ってきました。その後、こちらでこの会社が仕事をするというので、これは恩返しだと思っていたんですが、それは駄目になってしまいました。皆川 そのとき作られたのが「むさし建設」ですか。

佐藤 私がそのとき三〇歳前、戻ってすぐ一年です。一年ぐらいう下請けをやってまして、四二年に会社を設立しました。親父は社長にならないということで私が社長になりました。親父は何年か手伝うということですね。

皆川 会社の名前を「むさし」にされた。

佐藤 親父も私も武蔵ですから。それで平仮

名にしたのは、漢字だと難しいでしょ。一般の人だとさっと書けない。佐藤はこころあたりにもいくらかもあるし、学校の名をもらって付けました。その頃、平仮名の会社なんてほとんどなくて、最近仮名とかアルファベットの会社名が多いですけど、けっこう先見の明があったねと言われますよ。

皆川 会社を作るといふのは大変だったと思うんですが。

佐藤 そうですね。自分と親父と、親父と一緒に仕事をしていた人だけで始めました。毎日地下足袋をはき、五時起きして出かけたものです。楽しかったですね。ただ親父は、会社は大きくしてはダメだとよく言っていました。物価の上昇に見合う成長でよい、食べていければいいとね。



佐藤光洋氏

皆川 せっかく会社を作ったんだから大きくしようと思わなかったんですか。

佐藤 そういう気はないですね。技量もないかも知れませんが、大きくしても苦労ばかりですし、それに全体に目が行き届かない。仕事に完全に対応できない。自分の配下が自分のものではなくなる。ですから、うちの会社は、わたしの専門外の建築はやりません。自分の知っている土木だけです。

皆川 社訓というものはありますか。

佐藤 特にありませんが、とにかく朝・昼・晩現場には行っていました。現場を歩かないと気分が悪くてね、いつも飛び歩いています。

「俺んところは今度入れれば三代目になる。だからいかなることがあっても孫を入れてもらわねば困る。」

皆川 息子さんの光洋くんはたまたま受かったから入学したと言っていますけど。

佐藤 これはね、親父がね、福島県支部長をやったんです。福島県は早いですよ。近頃はあつちこつちできていますけど。もう四〇年ぐらい前に作りました。近頃では支部の総会に四〇人ぐらい集まります。親父が支部長やっている頃、東京で支部長会議をやるで

しよう。親父は酒を飲むとこれがダメなんです。「俺んところは今度入れれば三代目になる。だからいかなることがあっても孫を入れてもらわねば困る。」と言ったらしいんですよ。

それで親父が聞かれたんですよ。「佐藤さんのところのお孫さんは今、高校何年生だね。」と。そしたら親父は「今、幼稚園の一年生だよ。」と答えたらしいですよ。そうしたら皆大笑いだったですよ（笑い）。支部の集まりがあると、自分が一期生か二期生でしょう。回りの人たちは皆後輩なわけです。だからしきりと言ってたようですよ。

皆川 光洋くんは、おじいちゃんに言われたこと覚えてる？

佐藤(光) じいちゃんに直接聞いたことはないけど、何かにつけてその話は聞かされました。

佐藤 とにかく親父は武蔵工大を愛していましたね。工業会から第一回の表彰を受けたんです（写真参照）。そのとき親父と東海林さんと北海道の支部長の田中さん三人が受けた。金一封をもらいましたが、このとき親父は喜んでましたねえ。何よりうれしいと支部の総会か何かで皆に披露して半分寄付したようですよ。

皆川 ああ、これは昭和五六年の表彰ですね。

佐藤 表彰のとき親父は病院にいて行けなかったんです。代わりに私が参りました。渋谷の東急ゴールデンホールかな。その年の一二月に親父は亡くなりました。

皆川 亡くなられたのは五六年ですから、三代目が入学するのはもちろんご存じないわけですけど、安宏さんは康実さんの遺志を継いで光洋さんを何とか武蔵に入学させたいと……。

佐藤 よく言われていましたからね。学長とか理事長とか支部総会などで福島に来られた。井出先生とか、白川理事長さんも柏三水会で知っていた。高橋三郎さん、中部さんも何回か来られました。皆に言ってたらしいですね。二代目ならいくらでもいるとね。

皆川 光洋くん、お父さんから聞いてたの？

佐藤(光) 大学受験のとき受けてみると……。

佐藤 日大の工学部に受かったって絶対やらないと言いましたね。いくら地元にあってもです。

皆川 後援会、工業会のお力添えをいただいているんですが、今の武蔵工大に何かおっしゃりたいことはありませんか。

佐藤 そうですね。先輩も一生懸命やっています。各県からもっと子どもを入れてほしいですね。福島からも、もっと入れてほしいで

す。福島あたりからだ、武蔵工大は難し過ぎる。何とか、会長推薦で入れるとかしてほしいですね。それから、卒業生を福島へ送ってほしいですね。転勤とかじゃなくて、県庁とか市役所とかを勧めてほしいです。今、福島県には卒業生が二〇〇人います。その内、四〇人が毎年集まっています。でも土木がほとんど、八割方土木です。電気や機械の人は一回出て話題に困って次からは出なくなる。

皆川 他の支部でもそういう傾向があるように聞いています。

佐藤 武蔵は数が少ないからまとまりがいいですよ。この県庁にもいることはいるが、ほとんど日大です。地元には大学がありませんから人脈を作っている。何とか武蔵の卒業生にも来てもらいたいですね。

皆川 技術者の先輩として息子さんに何かおっしゃりたいことはありませんか。

佐藤 特別にはねえ、望んではいません。ただ、真面目に、体で汗を流せ、ということですかね。こいつが入学式のとき、学長の話を聞いて感動したんです。勉強やって一点、二点取ってもダメ。部活に入って友だちをうんと増やせ、と言われて。そのとおりだと思いますね。それから、土木はケガが怖いですが、体に気を付けてほしいですね。



自宅前にて左より、安宏氏、光洋氏、四代目希望の洋君

皆川 光洋くん、今日初めて聞いたこともあると思うんだけど、親というより先輩として参考になった？

佐藤(光) ためになることを聞きました。

佐藤 個人のことで言いますと、あまりにも今まで順調過ぎた。挫折というものを今まで味わっていない。でも将来挫折するとき、そのとき学生時代の友だちに相談したりして、何とか乗り切ってほしいですね。

皆川 親子三代同窓生というのはおそらく最初で最後かも知れません。でも光洋くんが近い将来結婚し、子供ができてその子が武蔵に進めば四代ということもあるわけです。そうですね。

佐藤 私が元氣なら、ぜひ武蔵にやらせます。必ず四代目を作りたい。この子のお兄さんの子でもいいから。私は武蔵工大を誇りに思っていますし、あんなに環境のいい学校はほかにない。すばらしいところはないですよ。

皆川 二〇年後の四代目の誕生を期待しています。

佐藤 実現させたいですね。私にとって、武蔵は本当に心ですよ。

皆川 またそのときは、インタビューに伺います(笑い)。

■出席者

佐藤安宏氏 (37土)

佐藤光洋氏 (H7土：インタ)

ビュー当時土木工学科4年)

■インタビュー

皆川 勝 (54土)

福島県郡山市・佐藤安宏氏宅

平成6年8月7日収録



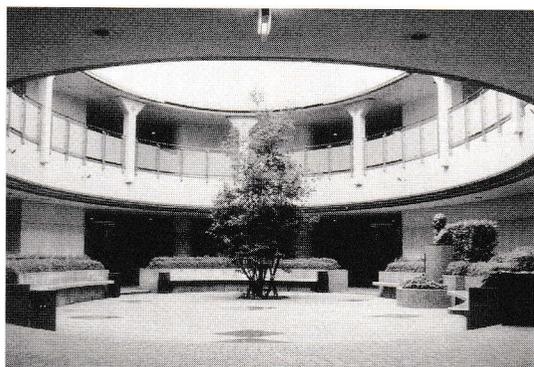
尾山台校舎全景（昭和32年当時）



現在の図書館前のくつろぎ広場



現在のキャンパス夜景



現在の五島記念館の内部



現在の五島記念館

研究室紹介

応用力学研究室

土木工学科教授
星谷 勝

応用力学の看板から、多くの方は構造物の設計・施工の基礎となる力学の研究をしているところと想像されると思う。

実は、確かに、設計・施工の管理技術の研究や、埋設管の地盤反力係数の理論解を弾性理論により誘導し、現行示方書で規定している数値の根拠を探る試み、また、耐力を持たせた小口径のパイルの開発などにみられるように応用力学の範疇の研究もしている。

一九七〇年代には盛んに強化土工法の実験もしてきた。温度差発電の深海までの取水管の解析などとも思い出に残る。

この研究では、取水管の挙動はヘドロの地底へ定着させた長い杭の先端を動的荷重で振動させた場合と同じ結論になることがわかった。すなわち、海面が荒れ狂っても波動は先端まで達する前に減衰してしまうから、深海での管の固定作業は不要で単に沈めておき所定の深さだけ確保すればよいと結論した。ナウル共和国の実証プラントは実現したのである。

しかし、私たちの研究の基軸は信頼性理論をベースとして「構造物はいかに壊れるかに基づいた確率的手法による設計法」の

開発である。

自然界に晒され何年にもわたり使用に供される構造物は静的および動的荷重の洗礼を受けるが多くの不確定要素に囲まれているので確率論をわが工学分野へ導入することはごく自然のことであろう。

私の研究室へはその時々企業から研究員の参加が得られてきたので、互いに刺激し合い、さまざまな研究をタイミングよくすることが出来た。成果は論文の形で国内外へ発表し、また、その結果として研究員は論文博士を取得できた。ただ、これらの成果がどれだけ実用に役立ったかは後世の判断に委ねることになる。もちろんシールドトンネルの自動掘削システムの予測・制御、あるいは土留め工法の情報化施工のシステムなどに使用されたものもある。

金を使わず、紙とコンピュータが道具なので、経済不況の今でも研究が続けられることは幸いである。

重要なことは、これらの研究は教育と一体となっていることであり、卒業研究も大学院の研究も共同作業で進めている。

最後に、研究室の構成は星谷・丸山の教員と隈元客員教授、須藤客員研究員（博士、

地崎工業)、山本客
員研究員(攻玉社工
科短期大学助教授)
および大学院・学部
学生、プラス二名の
秘書である。

丸山 収助教授



星谷 勝教授



昭和48年頃の応用力学研究室の方々と星谷先生の御家族

紹介

構造工学研究室

土木工学科教授
増田 陳紀

本研究室は、西脇威夫現名誉教授が助教として本学に着任された昭和三四年に、橋梁研究室として発足した。昭和三〇年代四〇年代あるいは五〇年代のアーチ橋や橋梁振動などのテーマで卒論をまとめられた卒業生および四年次必修の構造物設計製図(二)で「みっちり」と「プレートガーダー等の設計演習を受講された土木工学科の卒業生には、「橋梁研」の名称がある種の特別な感情を持って今でも記憶されているようであることは、当時の卒業生の方とお話するたびに改めて感じるところである。卒業生には研究室一期生の興石繁先輩(現橋梁メンテナンス)、同じく二期生の公文陽一先輩(現川田建設)などがいらして、その後多くの卒業生がこれら初期の諸先輩から多くの面でお世話になってきた。昭和三九年卒で建設省同期入省者の中でも抜きん出ていらした山本崇史先輩が国際協力事業の遂行中にビルマにて航空機事故により他界されたことは、本研究室としても痛恨の極みである。

昭和五四年に増田陳紀現教授が講師として着任し、まもなく研究室名を鋼構造研究室に改称した。それまでの主として鋼橋を

対象とする研究に加えて鋼構造全般を視野に入れた研究も守備範囲に加えることとしたものである。昭和五六年に皆川勝助手(現建設情報研究室助教)が加わり、昭和五〇年代から六〇年代の初めまでは皆川氏の「厳しい繰り返し荷重を受けた鋼構造物の力学特性」に関する学位論文の研究を中心として、一連の構造物非線形挙動の解析に関する研究など新たな展開があった。昭和六〇年代から平成の初めにかけては、

土木工学専攻の場合、当時進路の問題でなかなか博士課程に学生が進学し難い状況の中で、研究室の陣容の充実もあって黒田充紀君(現山形大学機械工学科助教)が修士課程・博士課程へと進学し、西脇教授の御指導下で五〇年代から卒論・修論として取り組んでいた高力ボルト引張接合の研究を進展させ学位を取得した。研究室のこれらの一連の研究に対して平成四年には土木学会田中賞(論文賞)が授賞された。

平成二年には皆川助手が講師に昇格独立し、黒田氏も博士課程を修了して、研究室は再び教員二名の体制に戻った。この間の教育の成果といえるかどうか定かではなく、むしろ学生個人の努力によるものとは思

が、昭和六十二年から平成四年の六年間に六三年卒の高橋広幸氏（現日本道路公団）をはじめ三名が国家公務員一種試験に合格し、充分とはいえないが私立大学の一研究室としてはそれなりの成績を上げた。もっとも、現状はその後に続く者の出現を強力に支援しなければならぬ状況である。昭和四〇年代後半以降のここまでの研究室の年間活動での一大特徴は、一、二週間にわたる夏の江田島合宿である。これには、本四連絡橋等現場見学ならびに江田島内自衛隊教育参考館視察を含み、現役学生から二〇数年前の卒業生に至るまで共通の話題となる経験であった。本四関連工事、中国四国自動車道の完工に加え学生気質も変化し、最近はこの慣習が途絶えており、いささか寂しい気がしないでもない。

平成一〇年三月に西脇教授が定年で御退職され、平成一〇、一一年度は指導教員一名であったが、平成一二年より、昇格された白旗弘実講師（平成九年に助手として着任）と再び指導教員二名体制で教育研究に当たっている。白旗講師の主テーマは超音波探査を中心とする非破壊検査の土木構造物への実用化に関する研究であり、研究室

としてはこれを含めた従来からの研究に加えて、さらに鋼構造物の合理化（複合構造の実用化、新形式接合部の開発、シェル構造を中心とする構造物の耐荷力など）に関する研究を学外との共同研究も含めて行っている。現陣容は教授一名、講師一名、修士課程二年生二名、一年生四名、研究生一名、学部四年生一七名である。西脇名誉教授もお元気で、週何回かのコンサルタント会社での顧問としての指導の合間に、週一回はほぼ定期的に来学されて学生へ熱心な助言を行っていた。以上、主として研究室の経緯と現状を述べたが、卒業生の皆さんの活躍も頼もしく、前述の国家公務員試験一種合格に加えて、研究室出身者で学位を取得された方も多く、最近では本年三月に昭和五八年卒の桜澤雅志氏（現福田組）が地盤工学の分野で長岡科学技术大学より工学博士の学位を授与されている。また、受験資格取得後早々に技術士試験に合格した方も多く、昭和五六年卒の西本哲也氏（現片山ストラテック）、昭和六〇年卒の街道浩氏（現川田工業）をはじめそれぞれの職場ならびに業界で、武蔵工業大学卒業生が一目置かれる原動力の

一つとなつてゐることは喜ばしい。これらの研究室出身者との交流の場として、武蔵橋友会を組織し定期的に総会・懇親会・講演会等を開催するとともに、会誌を発行し、他の研究室出身者の方を含む卒業生の皆様からは適宜現場見学を主催していただいている。この場を借りて改めて深く感謝申し上げます。この場を借りて改めて深くお願い申し上げます。以上、紙面の都合で一部の方のお名前のみ記載いたしました。が他に多くの方々それぞれに該当されますことを申し添えます。



昭和63年 瀬戸大橋の架設現場を視察する構造工学研究室の方々

★ コンクリート研究室

土木工学科教授
小玉 克巳

コンクリート研究室は一九六三年木造実験室（一階コンクリート実験室、土質実験室、二階測量実習室、その他）の一隅に創立されたのですが、一九五七年卒の善養寺時夫氏、横山英夫氏の両氏が故松村孫治先生の紹介で建設省土木研究所においてコンクリート工学で卒業研究を行ったのが最初です。大学においてコンクリート工学の卒業研究は一九五八年卒の卒業生からで、当時二〇〇トンの耐圧試験機、物理的試験等の器具、型枠、空気量試験機、スランプ試験機等で始めたのです。この当時指導に当たっておられた故川浦先生のご苦労は大変なものであったと推測します。研究テーマは各種A E剤を使用したコンクリートの性状でした。

小玉がコンクリート工学の卒業研究を指導する事になったのは、川浦先生が病気で入院された一九六一年の卒業生からです。この年度の卒業生に対する研究指導は川浦先生がされており、小玉はもっぱらコンパ、合宿、現場見学が役目でした。

一九六二年文部省からの助成金で三〇トン万能試験機が設置され、初めて鉄筋コンクリート梁を製作して曲げひび割れ、破壊

性状についての研究と供試体の形状・寸法の違いによる強度についてのテーマで研究を行いました。

一九六三年に実験室内にコンクリート研究室にづくり学生の顔を連日、直に見ながら指導することが出来るようになりました。

一方、建設省土木研究所コンクリート研究室に学生を連れて行き各種試験機をお借りして実験を行い卒業研究の指導と小玉自身も貴重な勉強をさせて頂きました。

一九六五年現在の二〇〇号館にコンクリート実験室・コンクリート研究室が出来、助成金で一〇〇トン万能試験機（現在構造実験棟）、フレッシュコンクリートの性状試験機が設置され材料試験・コンクリートのフレッシュ、硬化性状等の試験が出来るようになりました。

一九六九年から鉄筋コンクリート構造物の一施工法であるスリップフォーム工法に注目しコンクリートの初期材令の強度、ロットの座屈に関する研究を行い、この種工法の安全施工基準の作成（労働省）に協力させて頂きました。

一九七四年コンクリート工学の権威である國分正胤先生をお迎えし、コンクリート

研究室の体制が整いました。先生がご在職中の研究内容は超高強度コンクリート、高炉スラグの骨材としての活用、膨張コンクリート、鋼繊維コンクリートの複合機構、コンクリートの引張疲労、コンクリートの凍結融解と気泡組織等であり小玉の学位論文「繰り返し応力を受けるコンクリートの劣化に関する基礎的研究」にとって上記の研究が非常に有効な研究でした。当時の院生・学部生に感謝しています。

一九八四年三月國分先生が退職され、一九八九年四月に吉川弘道先生（間組技術研究所）を迎え新たにスタートしました。吉川先生は鉄筋コンクリート構造の動的挙動解析と設計法を主たる研究テーマとしております。

さらに一九九八年四月に新進気鋭の栗原哲彦先生（岐阜大学）を迎えました。栗原先生はコンクリートの破壊性状を主たる研究テーマとしております。

なお詳しい研究内容は武蔵工業大学工学部土木工学科コンクリート研究室のホームページ

(<http://c-pe.8.civil.musashi-tech.ac.jp>)

をご覧ください、研究室にお出かけくださ

い。お待ちしております。

現在のスタッフは、小玉克己教授、吉川弘道教授、栗原哲彦講師、斎藤秀夫技士です。

現在の小玉先生、栗原先生、斎藤さん



昭和41年頃のコンクリート研究室

紹介

土木計画研究室

土木工学科教授
岩崎 征人

一九六八年四月に岩崎赴任時に、『交通工学研究室』は川浦先生(当時助教)お一人であった。

一九七九年に川浦先生(当時教授)ご退任時までの約一〇年間は、川浦・岩崎の二人体制で教育と研究に当たっていた。研究分野はもっぱら交通工学、特に現象解析、であった。

一九七九年から、岩崎一人の研究室体制になったが、それまでと同様交通工学分野の研究と教育がなされた。

一九八六年四月に、東京工業大学から渡辺隆教授が赴任され、新たに道路工学分野の研究領域が加わった。

一九九二年四月には、東京大学から、若手の中村隆司が赴任し、渡辺教授退任時(一九九六年三月)までの四年間は一時的に三人体制が取られた。中村が加わったことにより、研究領域は飛躍的に広がり、それまでの研究室名称がそぐわなかった事もあり、研究室名称を『土木計画研究室』と改称した。

一九九六年三月の渡辺教授退任後から現在まで、岩崎・中村の二人体制で研究室が運営されている。『土木計画研究室』は、

例年修士学生が七、八名、卒論学生は二〇名前後となっている。

二〇〇〇年四月には、古市朋輝(一九九八年卒)が当研究室としては初めて博士課程に進学した。OBや外部からの研究者が研究に参加する機会も増えつつあり、学生との交流が進みつつある。

古市君は、道路交通の安全性と円滑性を確保するための道路の設計に人間工学的な考えを導入し、道路の構造設計(幾何構造、道路施設および沿道景観も含んで)により運転者の感覚を入れた設計方法を確立するための基礎的な研究を行っている。

岩崎は、古市の研究を指導しつつ、この研究に多自由度・動揺式ドライブングシミュレータを利用するための方策について研究している。また、全学的な組織として、二〇〇〇年三月に発足した産官学研究交流センターの最初のプロジェクトである「ITS (Intelligent Transport Systems)」に関する国からの受託研究の代表として工学部と環境情報学部の教員と共同研究を実施している。さらに、道路の交通容量や交通安全の問題について外部機関において他の研究者との議論の場に参加している。

中村は、土地利用に関して、都市と田園地域との調和、宅地と農地などの土地利用調整、例えば自動車に依存しない土地利用の実現、といった環境と土地利用の総合性、道路などの交通網整備と土地利用・広域的な調整などの観点から研究を行っている。市町村の現場に出かけ、国土利用計画などの土地利用計画についての議論にも参加する機会も多くなってきた。

研究室の学生については、多変量解析ソフト、GISソフトの利用が定着し、インターネットを利用した情報収集がここ数年で一般化してきた。

研究室の定例行事としては、夏の合宿、秋の九大学計画系研究室の野球大会が大きなイベントとなっている。野球大会は、昨年久しぶりに最下位となり、本年度は幹事校としてこの野球大会を主催する責務を負うことになっている。

研究室の学生の進路は、公務員志望が比較的多く、最近では就職状況が厳しいが、これまでのところ毎年公務員への就職が継続している。就職先の絶対数としては、コンサルタント系が多いのが実情である。



平成12年の9大学計画系研究室対抗野球大会

紹介

水工学研究室

土木工学科教授

綾 日出教

水工学研究室は現在、綾日出教教授、長岡裕助教授、田中厚至助手の三名のスタッフの指導のもと、修士二年六名、修士一年五名、学部四年生一六名が水に関する幅広い分野の研究に励んでいます。対象分野は水環境に関するテーマが多くなっていますが、大きく分けると、排水処理技術に関する研究、水資源に関する研究、河川環境に関する研究、海岸環境に関する研究に分けられます。

排水処理技術に関する研究では、ここ一〇年以上に亘って、膜分離リアクターを用いた排水処理技術に関して研究を継続しています。膜分離リアクターとは、バクテリアによって排水中の汚濁物質を処理した後、バクテリアと水をフィルターを用いてろ過分離するというもので、従来の技術に比べて水質が非常に良いことで知られています。本研究室では、メタン発酵への応用、活性汚泥プロセスへの応用、イオウを用いた硝酸除去への応用、飲料水の浄水技術への応用、活性炭との組み合わせによる高度浄水処理技術への応用などを検討してきましたが、国内外で高く評価される研究成果を上げてきました。本研究室の看板テーマとい

ってもいいでしょう。また、微生物膜を利用した排水処理技術の高度化とそのメカニズムの解明に関しては、主に長岡助教授が担当してきましたが、レーザードップラー流速計を用いた微生物近傍の測定という技術的に大変困難なことに成功してきています。

水資源に関する研究では、一〇年以上に亘って続けられてきた綾教授による沈殿地における密度流の数値シミュレーション、配水管網の計算の最適化手法の開発は、国内でも非常に高く評価されてきており、今後の新たな発展も期待できるテーマです。また、最近始められた降雨確率に関する研究は、ダム建設の是非に対して鋭い投げかけを行う大変ユニークな研究と言えるでしょう。その他にも、長岡助教授が一年ほど前より始めた飲料水の価値に関する研究も、地道ながら面白いテーマといえるでしょう。河川環境に関する研究は、長岡助教授と一九九八年より赴任した田中助手を中心として三年ほど前より始められた比較的新しいテーマです。近年、治水のみではなく環境を配慮した多自然型河川工法が注目されていますが、このなかで、蛇かごあるいは

擬石を用いた新しい法面工法に関する力学的設計を流体力学的側面から検討しています。風洞を用いた実験や数値シミュレーションなど多くの手法を用いており、今後の成果が期待されます。

海岸環境に関する研究も長岡助教と田中助手を中心として、現在、海草周りの乱流発生機構という新しいテーマに対して挑戦を続けているところです。

以上のように本研究室のテーマのベースとなっている分野は、流体力学、数値解析、統計学などのハードな学問に限らず、水質化学、微生物学などの学問にまで広がっていることがわかれると思います。ですから、どんな分野が得意な学生でもそれなりに活躍できる場を提供できるというのが大きな特徴です。

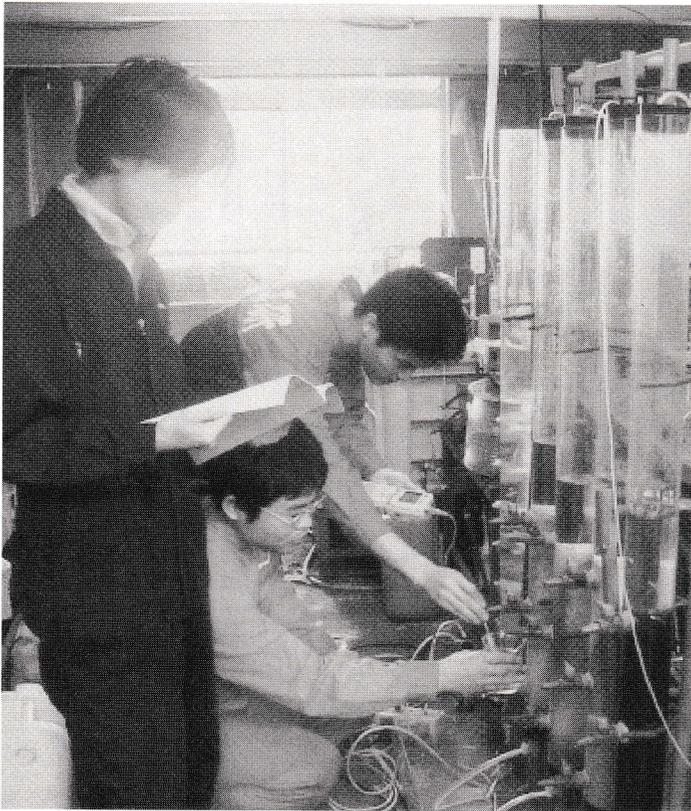
所属学生の普段の研究活動は、比較的自主性に任されています。ですから、実験装置の作成や改良なども自分で考え、自分自身で行います。実装置も学生の手作りの比較的小型のものがほとんどですし、土木工学科の中では比較的珍しいのではないのでしょうか。

所属学生にとってのビッグイベントは、

九月の卒論の中間発表および二月の卒論発表会でしよう。日ごろの研究成果を発表するこれらの会には、関連する企業の研究者も招待される研究室全体にとって最も重要な行事です。三〇名以上の人を前に研究成果を発表するのは、慣れない学生にとっては非常に緊張することでしょうが、終わった後のビールもまた格別なのではないでし

ようか。両発表会では、教員および院生が発表を採点し、優秀発表者を表彰しています。歴代の顔ぶれを見ると、普段は目立たない意外な学生がいたりするので、彼らにとっても良い励みになると思われます。

以上、水工学研究室の現状について簡単に報告いたしました。



現在の水工学研究室の実験風景

紹介

地盤工学研究室

土木工学科教授

片田 敏行

地盤工学研究室は昭和三〇年代に始まり、以下のような変遷をたどって現在に至っています。

まず、神山光男講師の着任（昭和三〇年四月）により土質研究室（通称・土質研）が発足しました。このときの研究室一期生（昭和三二年卒業）が小玉克巳教授（コンクリート研究室）です。また、昭和三五年四月には一年間の研究生を経て目黒栄治技士が土質研究室の職員になりました。

そして、昭和五七年三月に中岡二郎教授（昭和三二年二月着任）が退職されたのを機に、土質研、施工研究室（通称・中岡研）、成山元一講師の建設機械研究室（昭和五一年四月、基礎研究室に改称）の三研究室が一緒になり、新たに土質・基礎研究室が発足しました。スタッフは神山教授、成山講師、片田講師（昭和五六年四月着任）、目黒技士の四名でした。

昭和六三年六月に講師の成山先生がご病気でご逝去、平成四年四月に神山教授が付属中高校長兼務とられました。そこで手薄になったスタッフを補うために平成五年四月に東工大より末政直晃助手が着任されました。

研究室の専門分野の学会である土質工学会が地盤工学会と改称されたのを機に、平成一〇年四月に研究室名を地盤工学研究室と改称しました。平成一二年三月には神山光男教授がご定年退職されました。

現在は片田敏行教授（武蔵工大・昭和五〇年三月卒）、末政直晃助教授（東工大・昭和六〇年三月卒）、目黒栄治技士の三名で研究と教育に当たっています。

学生は修士二年四名、修士一年五名、学部四年一八名です。

研究は大別して片田が地盤動力学的なテーマを、末政が地盤基礎工学的なテーマを専門としています。今年の修論、卒論テーマは以下のとおりです。

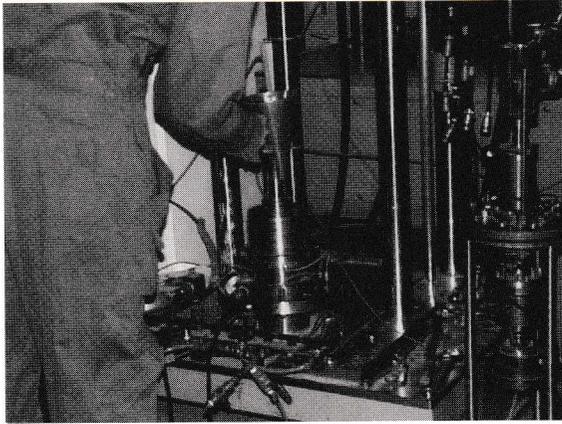
一、静的問題

①原位置試験による粘土混じり砂の液状化強度の推定、②液性限界時の土の力学特性に関する研究、③杭の鉛直荷重—沈下特性に及ぼす周囲摩擦の影響、④鉄筋系補強擁壁の側方変形挙動に関する研究、⑤地盤の変形・流動状況の実験的および数値的解析

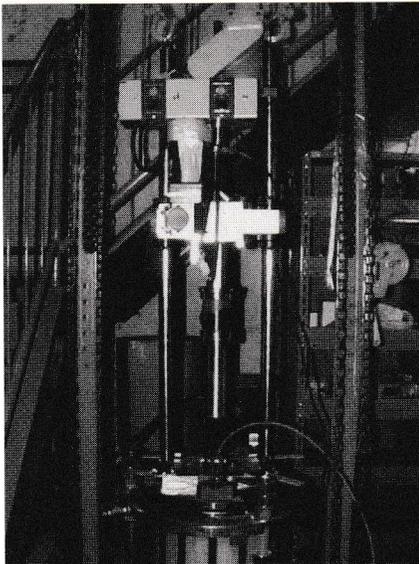
二、動的問題



写真一：小型遠心荷重装置内に模型地盤を設置しようとしているところ。模型と実物の相似率を合わせるために回転によって加速度50G程度に上げる。その遠心力により応力を大きくした後に荷重実験を行う。



写真二：側方流動現象を解明するために、液状化した砂の大ひずみ領域における力学特性を解析するために開発された多段式リングせん断試験機。供試体を作成しているところ。



写真三：杭の鉛直支持力特性を実験的に解析するのに用いる加圧土槽。杭を埋設した模型地盤全体をゴムスリーブで加圧して、応力を大きくして模型杭の荷重実験を行う。

①粘性土地盤における杭の地盤反力特性、②液状化性地盤における杭基礎構造物の地震時応答特性、③埋設管路網における地震時挙動特性、④液状化地盤における杭基礎構造物

三、学外との共同研究

に関する一体解析、⑤鉛直衝撃動における杭体損傷の可能性、⑥大規模宅地開発地域における地震時の危険性評価

①移動式クレーンの動的不安定性解析、②アンカーで支保された矢板の変形・崩壊挙動の解析、③抑止構造物に作用する土石流荷重に関する実験的解析

紹介

建設情報研究室

土木工学科助教授
皆川 勝

中岡二郎先生（名誉教授）並びに故田辺幸男先生（二四年卒、三一年着任）の指導のもとに昭和三二年に発足した測量研究室

が、田辺先生のご逝去により土木計測研究室として故成山元一先生（三三年卒、三三年着任）に引き継がれた。しかし、残念なことに、成山先生が卒論指導をすることなく逝去されて、教員不在の状態に陥った。

そこで田辺先生の下で技術職員として測量の指導にあたっていた佐藤安雄技士（四五年着任、当時金沢安雄技術員）に加えて、平成二年に講師に昇格した皆川勝（五四年卒、五六年院修、当時銅構造研究室助手）を迎えて、研究室として産声を上げた。

平成二年度の研究テーマは、①非加法的測度と Choquet 積分を用いた人間の主観的評価プロセスの解析手法に関する研究、②非加法的測度による景観評価プロセスの数量化の試み、③構造景観の簡易的予測システムの開発、④製図教育への CAD 導入の効果とその問題点、⑤スプリット・タイプ型継手を有するはり柱の接合部挙動の実験解析であり、皆川の本来の専門である土木構造に加えて、ファジイ理論などの情報システムに関する研究や景観など新しい

研究テーマを模索する数年がスタートしたといえる。

平成三年に皆川（当時講師）がテキサス農工大学へ一年間海外留学した後、研究室の名称を建設情報研究室と正式に改め、土木建設における情報システムの応用研究、人工知能の研究が本格的に始められた。

平成五年には大学院修士課程学生の指導がスタートした。この頃、情報システムに関する研究と平行して、コンクリート部材の耐震性向上に関する実験的研究が開始され、修士論文第一号として、篠原雅人君（現在、建設機械化研究所勤務）により「新素材により巻き立て補強された RC 柱の履歴性状に関する研究」が提出された。

その後、おおむね構造と情報システムの研究がバランスよく進められた。立ち上げ当時から平成一二年程度現在まで、研究分野の比率は、卒業論文では、構造対情報Ⅱ三七対四九、修士論文では、構造対情報Ⅱ五対七となっており、近年特に情報系のテーマを選択する学生の割合が増加している。世の中の IT 革命ブームの影響も少なくないように思われる。

進路は、公務員、ゼネコン、コンサルタ

ントとさまざまであるが、研究室で計算機、サーバ、ネットワークなどの管理をした経験を生かして、勤務先でもそのような仕事を任される卒業生も多いようである。当研究室を巣立った学生数は、学部卒業生九二名、修士課程修了生七名で、若手技術者あるいはその卵として頑張っている。

現在の研究テーマは、①衝撃的荷重を受ける構造部材の破壊シミュレーション、②桁端部に緩衝装置を持つ免震橋梁の地震時挙動、③次世代マークアップ言語と情報共有、④マルチユーザーVRMLによる対話型コラボレーションシステム、⑤ウェブGISによる情報共有、⑥移動体通信に対する情報発信、⑦教育用橋梁設計支援システム、などで、橋梁の地震時の衝撃を緩和するシステムの研究、インターネットを基盤とする情報共有技術の応用研究などに取り組んでいる。

平成一二年度の人員構成は、皆川助教授、佐藤技士のほか、修士学生五名、学部四年生一〇名、三年生二名である。

平成3年 夏合宿は明石海峡大橋の視察。一期生の学生諸君と皆川先生



平成12年春のOB会。多摩川河川敷でバーベキュー



昭和6年の卒業生は26人(2期生)



昭和7年の卒業生は23人(3期生)

緑土会の歴史

年	月	緑土会の歩み	会員	累積 会員数	月	土木工学科の先生方 および研究室	月	武蔵工業大学	月	世界と日本の情勢
昭和三五年			九六	一三七四		この頃、山極二郎先生、楠宗道先生ご退職	六	空手部が日本空手道大会で優勝	一一	ベトナム戦争開始
昭和三四年			九八	二二七八	四	橋梁研立上げ	九	生産機械工学科、経営工学科設置 五島昇氏が理事長に就任	一一	この年、岩戸景気 安保発効
昭和三三年			八一	一一八〇	四	測量研立上げ	三	建設工学科廃止 付属目黒高等無線学校開設	九	狩野川台風で死者八七四人
昭和三二年	四	緑土会ポケット版名簿第四号発行	三七	一〇九九	四	施工基礎研立上げ コンクリート研立上げ	四	電気通信工学科、土木工学科、建築工学科増設	一一	小河内ダム完成
昭和三一年			一九	一〇六一			一一	八木学長が文化勲章受賞	七	もはや戦後ではない、が流行 佐久間ダム完成
昭和三〇年	三 四 六	卒業生わずか二名に学生会を傘下 名簿第三号発行	五	一〇四三	四	土質研立上げ	四	教職課程設置 八木秀次氏が学長に就任 学校法人五島育英会と改称	六	株価暴落 国連加盟 東海道本線全線電化
昭和二九年	六	学生会誌「ついで」創刊	七	一〇三八			一一	五島慶太氏が理事長に就任	三	吉田首相バカヤロイ解散 朝鮮休戦協定
昭和二八年		活動停滞 支部長	一六	一〇三一			七	任	三	第五福竜丸水爆実験で被爆 造船疑獄事件で指揮権発動 自衛隊法公布
昭和二七年							六	任	九	洞爺丸転覆、死者一一五五人 神武景気始まる

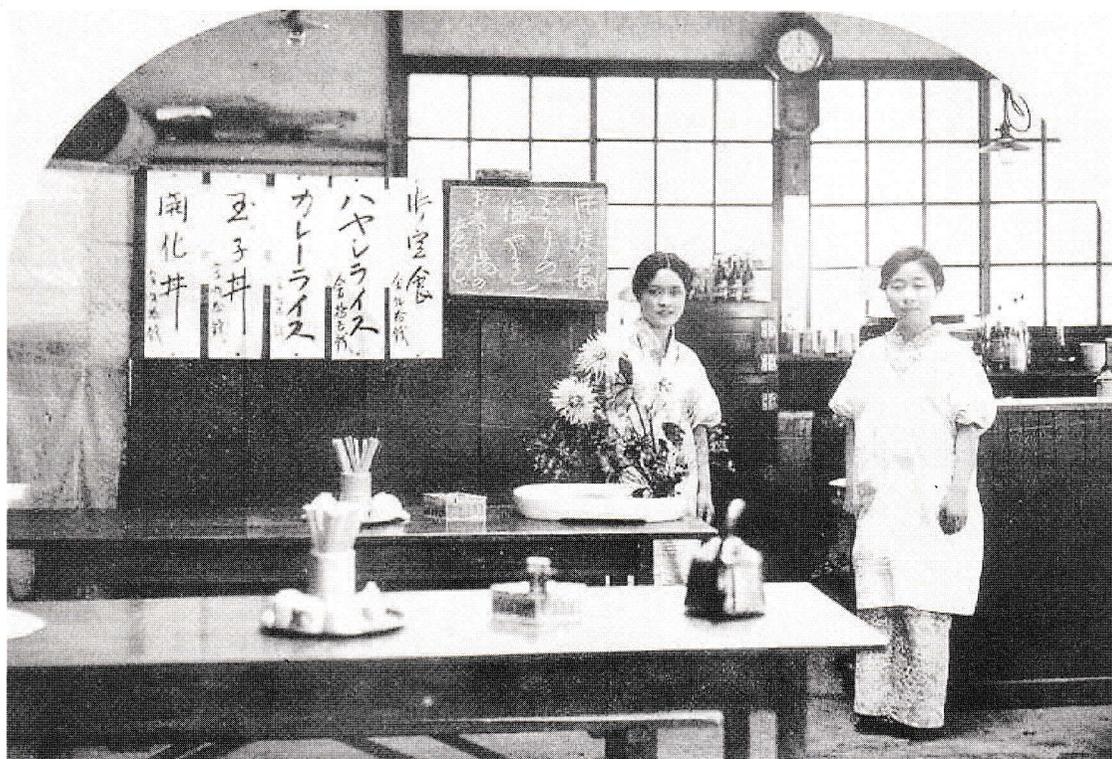
昭和四四年	昭和四三年	昭和四二年	昭和四一年	昭和四〇年	昭和三九年	昭和三八年	昭和三七年	昭和三六年
四		九 一一	一一 一一	四 四				
開催 総会（東京都職員会館）	この年、総会開催せず	名簿第六号発行 支部設立呼びかけ	総会（大学内）開催、終 身会費一〇〇〇円に	今川衛初代会長他一〇名 より初の工業会理事に 就職は建設会社が圧倒的 名簿第五号発行				
九九	一〇七	二七	二八	二四	二七	九四	九五	一四三
二四〇八	一三〇九	一一〇二	二〇七五	一九四七	一八三三	一七〇六	一六一二	一五一七
四	三		三		四		四	
施工基礎研が施工研に 港湾研立上げ（四九年で閉鎖）	酒井勇先生ご退職（以後、五一年三月まで非常勤）		松村孫治先生ご退職		水理研立上げ		都市計画研立上げ 交通工学研立上げ	
四	三	五	四	四	八	三	四	四
電気通信工学科を電子通信工学科に改称	卒業式で初の工学修士誕生 短期大学部廃止 院博士課程（機、生機、電、建）開設	星野直樹氏が理事長に就任	院修士課程（機、生機、電、建）開設	生産機械工学科を機械工学科に吸収	唐沢俊樹氏が理事長に就任 五島昇前理事長が会長に就任	原子力研究所完成		建築工学科を建築学科に改称 付属信州工業高等学校を開設
五	四	六	七	一〇	一〇	六	九	八
東大入試中止 東名高速道路開通	霞ヶ関ビル完成 米、キング牧師暗殺 初の心臓移植手術 水俣病認定 川端康成、ノーベル文学賞受賞 北爆停止 この年、GNP世界第二位に	第三次中東戦争	中国、文化大革命 新東京国際空港として三里塚決定	米、ベトナム北爆開始 佐藤首相、沖縄訪問 朝永振一郎、ノーベル物理学賞受賞	新潟大地震 東海道新幹線開通、東京五輪開催	黒四ダム完成 坂本九「上をむいて歩こう」全米一位 ケネディ大統領暗殺	国鉄金田正一、奄三振世界記録 キューバ危機	ガガーリン宇宙船で地球一周 東独、ベルリンの壁構築

年	月	緑土会の歩み	会員	累積 会員数	月	土木工学科の先生方 および研究室	月	武蔵工業大学	月	世界と日本の情勢
昭和四五年	七	創立四〇周年記念電算機講習会開催	九五	二五〇三				この年、学内でも学生運動激化	七	アポロ月面着陸
昭和四六年	九	武蔵工業会館開館 この年、名簿第七号発行	二四	二二六一七				学生寮への入寮中止 学生の一斉授業放棄 学生の授業妨害に対する処分	三 三 五	大阪万博開催 日航よど号ハイジャック事件発生 米、北爆再開
昭和四七年			一〇〇	二二七一七				院修士課程土木工学専攻開設	二 五 六 六 九	成田空港第一次強制代執行 ドルショック この年、日米貿易摩擦激化 連合赤軍浅間山荘事件 沖縄県発足 田中角栄・日本列島改造論 米、ウォーターゲート事件発覚 田中首相訪中、国交正常化
昭和四八年	四	大政正次郎氏（一七）第二代会長に就任	二五	二二八三二				学生が学年末試験を一斉放棄 卒業式で初の工学博士誕生 暴力行為で学生を処分	二 八 一〇 一〇	為替変動相場制へ 金大中拉致事件 第一次石油ショック 江崎玲於奈、ノーベル物理学賞受賞
昭和四九年	二	総会（東交会館）開催、年度幹事二名制に 名簿第八号発行	七三	二九〇五				曾益氏が理事長に就任 生産機械工学科が廃止	八 一〇 一〇 一一	ウォーターゲート事件でニクソン大統領辞任 佐藤栄作、ノーベル平和賞受賞 巨人軍長嶋茂雄現役引退 田中首相、金脈問題で辞任
昭和五〇年	一一	総会開催	一一	三〇一六				山田学長連続六期重任 副学長に寺沢正男教授が就任	三 四	山陽新幹線博多まで開通 ベトナム、全土解放で戦争終結
昭和五一年			二三	三二二九九				都市計画研と交通工学研が都市交通研に 建設機械研が基礎研に	四 五	ロッキード事件発覚 中国、天安門事件

年	月	緑土会の歩み	会員	累積 会員数	月	土木工学科の先生方 および研究室	月	武蔵工業大学	月	世界と日本の情勢
昭和六二年	五	名簿第一二号発行	二四	四四〇一	三	井口昌平先生ご退職	三	東急建設との産学交流開始	三	米、対日経済制裁発表 東京株式市場大暴落 利根川進、ノーベル医学生理学賞受賞
昭和六一年	四	小林博氏(二〇)第三代 会長就任 大政正二郎会員、武蔵工業 会理事長に就任 総会(大成クラブ)開催	二五	四二八七	四	千葉利晃先生ご退職 水理研が水工学研に 任に	二	オレゴン工科大学と国際 交流覚書交換	八	本四架橋、大鳴門橋開通 日航機、御巣鷹山墜落
昭和六三年	一一	総会(大成クラブ)開催	二〇	四五三一	四	渡邊隆教授が土木工学専攻主任 に 田辺幸男先生ご逝去	二	大学入試センター試験試 行実施	三	青函トンネル開通 瀬戸大橋開通 リクルート事件発覚 牛肉オレンジ自由化
平成元年	一一	総会(大成クラブ)開催	二三	四六五四	六	成山元一先生ご逝去	一	五島昇会長逝去	一	新元号・平成 消費税スタート
平成二年	一一	総会(大成クラブ)開催	二〇	四七七四	九	古浜庄一教授 古浜庄一副学長が学長に 就任	六	創立六〇周年記念式典	六	中国、天安門事件 歌手美空ひばり死去・国民栄誉賞
平成三年	一一	総会(大成クラブ)開催 名簿第一二号発行	二七	四九〇一	四	星谷勝教授が土木工学科主任に	四	五島記念館一期工事完成 工学部入学定員臨時増	一	この年、株暴落始まる
					六	山田良之助元学長逝去	六	湾岸戦争突入 証券会社の損失補填発覚 雲仙普賢岳で大火砕流発生 ソ連邦消滅	六	この年、景気拡大最長記録更新

平成四年	一	総会（大成クラブ）開催	一五七	五〇五八	四	測量研が建設情報研に改称	四	水素エネルギー研究センター設置		
平成五年	四	小林康一氏（二三）第四代会長に就任	二〇九	五一六七	四	カリキュラム改定・大綱化に伴い必修減			七	北海道南西沖地震、奥尻島に大津波発生
	一一	総会（大成クラブ）開催			四	綾日出教授が土木工学科主任に			九	冷害で米不足、緊急輸入
平成六年	一一	総会（新横浜プリンスホテル）開催	二三三	五二九〇	四	星谷勝教授が土木工学専攻主任に	三	五島記念館竣工	六	PL法成立
						交通研が土木計画研に	五	堀江音太郎氏が理事長に就任	九	関西国際空港開港
平成七年	一一	総会（大成クラブ）開催 名簿第一四号発行	二三三	五四二三	四	小玉克巳教授が土木工学科主任に	五	パテュー大学と学術交流協定締結	一	阪神淡路大震災で死者六三〇〇人 住専の不良債権問題表面化
					四	岩崎征人教授が土木工学専攻主任に			一一	
平成八年	一一	総会（新横浜プリンスホテル）開催	二二六	五五四一	三	渡邊隆先生ご退職	一	スロバキア大学と学術交流協定締結	八	俳優渥美清死去・国民栄誉賞
					一	東京理工系大学交流協定締結	一	大蔵省、銀行へ初の業務停止命令	一一	
平成九年	四	中部恭二氏（三七）第五代会長に就任	二二六	五六六七	三	西脇威夫教授ご退職	二	横浜キャンパス竣工	三	動燃東海事業所で三七人被爆
	一一	総会（新横浜プリンスホテル）開催			三	王方一先生ご退職	四	環境情報学部開設、学部長に小沼通二教授就任	一一	温暖化防止会議が京都で開催
					四	岩崎征人教授が土木工学科主任に	四	機械システム、電子情報、エネルギー基礎工学科設置	一一	企業倒産による負債総額戦後最悪に
					四	増田陳紀教授が土木工学専攻主任に				
平成一〇年	一一	総会（大成クラブ）開催	二二六	五七九三	四	カリキュラム改定・必修科目復活	四	工学部長に堺孝夫教授就任	六	省庁再編成基本法が成立
					四	吉川弘道教授が土木工学専攻主任に	六	工学研究センター発足	一〇	金融再生関連法成立

年	月	緑土会の歩み	会員	累積 会員数	月	土木工学科の先生方 および研究室	月	武蔵工業大学	月	世界と日本の情勢
平成一二年	一一	七〇周年記念祝賀会開催	二六	六〇五七	三	土木学会関東支部研究発表会を 本学で開催 神山光男先生ご退職	四	工学部長に伊藤泰郎教授 就任 工学研究科長に堤井信力 教授就任	一〇	有珠山噴火 三宅島噴火長期化で全島避難 白川英樹、ノーベル化学賞受賞 この年、大手企業の経営破たん続く
平成一二年	一一	総会(大成クラブ)開催	三六	五九二九	四	土質・基礎研が地盤研に 鋼構造研が構造工学研に	一	マサチューセッツ工科大 学ヴェスト学長記念講演 エネルギー環境技術開発 センター発足	二	大手銀行へ公的資金注入 山陽新幹線トンネルでコンクリート 剥落 完全失業率四・九%で記録更新 台湾大地震で死者二〇〇人以上 東海村JCOの臨界事故で一五〇人 被爆
					四	教授就任 堀川清司氏が学長に就任 環境情報学部がISO1 4001取得	九			



昭和6年頃 玉子丼が金貳拾銭



昭和17年頃の売店。計算尺12円、食パン5銭

昭和三〇年以降の武蔵工業大学土木工学科の先生方

(敬称は省略させていただきました)

55	56	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	昭和/平成	
80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	西 暦	
																						山極 二郎
																						楠 宗道
																						松村 孫治
																						酒井 勇
																						川浦 潔
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	神山 光男
○	○	○	○	○	○	○	○															田辺 幸男
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	小玉 克己
○	○																					中岡 二郎
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					西脇 威夫
○	○	○	○	○	○	○	○	○														成山 元一
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						王 方一
△	△																					渡部 弥作
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	岩崎 征人
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	星谷 勝
○	○	○	○	○	○																	千葉 利晃
○	○	○	○																			国分 正胤
○	○	○	○	○	○	○																井口 昌平
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	増田 陳紀
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	片田 敏行
	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	皆川 勝
			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	綾 日出教
					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							渡邊 隆
							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	丸山 收
								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	吉川 弘道
									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	長岡 裕
											○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	中村 隆司
												○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	末政 直晃
																	○	○	○	○	○	白旗 弘実
																		○	○	○	○	田中 厚至
																		○	○	○	○	栗原 哲彦
																						叶野 容子
																						菊永 章子
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	目黒 栄治

昭和／平成	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54			
西 暦	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79			
常勤の先生方																												
山極 二郎	○	○	○	○	○																							
楠 宗道	○	○	○	○	○																							
松村 孫治	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○																	
酒井 勇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	△							
川浦 潔	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
神山 光男	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
田辺 幸男		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
小玉 克己		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
中岡 二郎			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
西脇 威夫					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
成山 元一					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
王 方一										○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
渡部 弥作												○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	△	
岩崎 征人														○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
星谷 勝																				○	○	○	○	○	○	○	○	
千葉 利晃																				○	○	○	○	○	○	○	○	
国分 正胤																				○	○	○	○	○	○	○	○	
井口 昌平																								○	○	○	○	
増田 陳紀																											△	
片田 敏行																												
皆川 勝																												
綾 日出教																												
渡邊 隆																												
丸山 收																												
吉川 弘道																												
長岡 裕																												
中村 隆司																												
末政 直晃																												
白旗 弘実																												
田中 厚至																												
栗原 哲彦																												
常勤の技術系職員の方々																												
叶野 容子					○																							
菊永 章子											○	○																
目黒 栄治						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

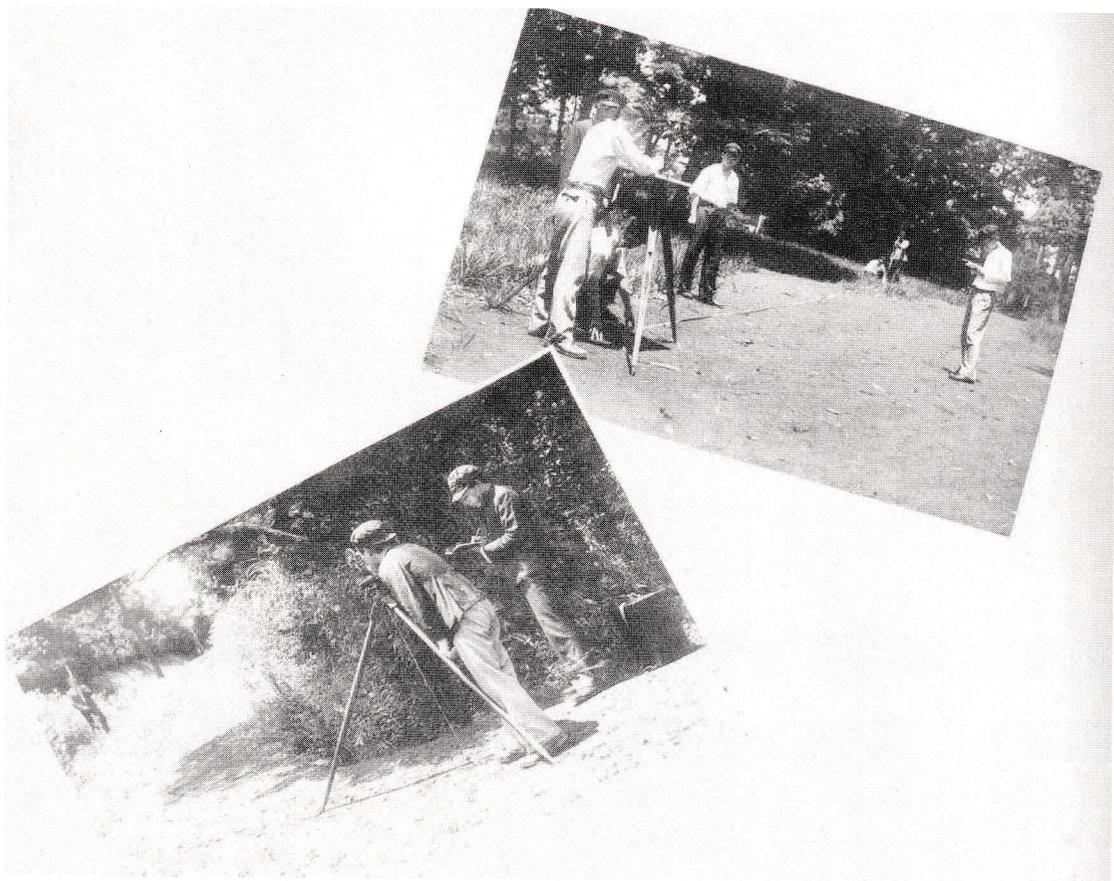
55	56	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	昭和／平成
80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	西 暦
																					阿部 祥子
																					佐藤 一弘
																					下滝 博子
																					池谷 静広
																					武藤 俊子
																					青沼 晴雄
																					吉野富美子
																					龍治 裕子
																					松川 宏
																					石橋真理子
																					長崎美智子
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	金沢(佐藤)安雄
○	○																				大野 春雄
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	斎藤 秀夫
																					森田美智子
																					北爪 淑子
																					高橋泰次郎
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	仲宗根 茂
				○	○																保 和志
																					武田 宏
																					山田 順治
																					左合 正雄
																					平野 武文
																					鈴木 俊男
																					新妻 幸男
																					春日屋伸昌
								△	△	△	△	△									高橋 裕
																					若桑 訥
																					高橋 昭治
																					大島 義一
																					城野 好樹
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△					矢野信太郎
																					成瀬 洋
△	△	△	△	△	△	△	△														有賀 世治
																					佐藤 敦久

昭和／平成	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54		
西 暦	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79		
阿部 祥子											○	○															
佐藤 一弘											○	○	○	○	○												
下滝 博子											○	○															
池谷 静広											○	○	○	○													
武藤 俊子												○															
青沼 晴雄												○	○	○													
吉野富美子													○	○													
龍治 裕子														○													
松川 宏															○	○											
石橋真理子															○	○	○	○									
長崎美智子																○	○										
金沢(佐藤)安雄																○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
大野 春雄																○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
斎藤 秀夫																○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
森田美智子																		○	○								
北爪 淑子																			○	○							
高橋泰次朗																			○	○	○	○	○				
仲宗根 茂																											
保 和志																											
非常勤の先生方																											
武田 宏					△																						
山田 順治					△																						
左合 正雄					△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△				
平野 武文					△					△																	
鈴木 俊男					△					△	△	△	△														
新妻 幸男					△					△	△	△	△	△	△	△	△										
春日屋伸昌										△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△						
高橋 裕										△	△	△	△		△	△											
若桑 訥										△	△																
高橋 昭治										△																	
大島 義一										△	△																
城野 好樹											△																
矢野信太郎											△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
成瀬 洋											△	△															
有賀 世治											△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
佐藤 敦久											△	△	△	△	△												

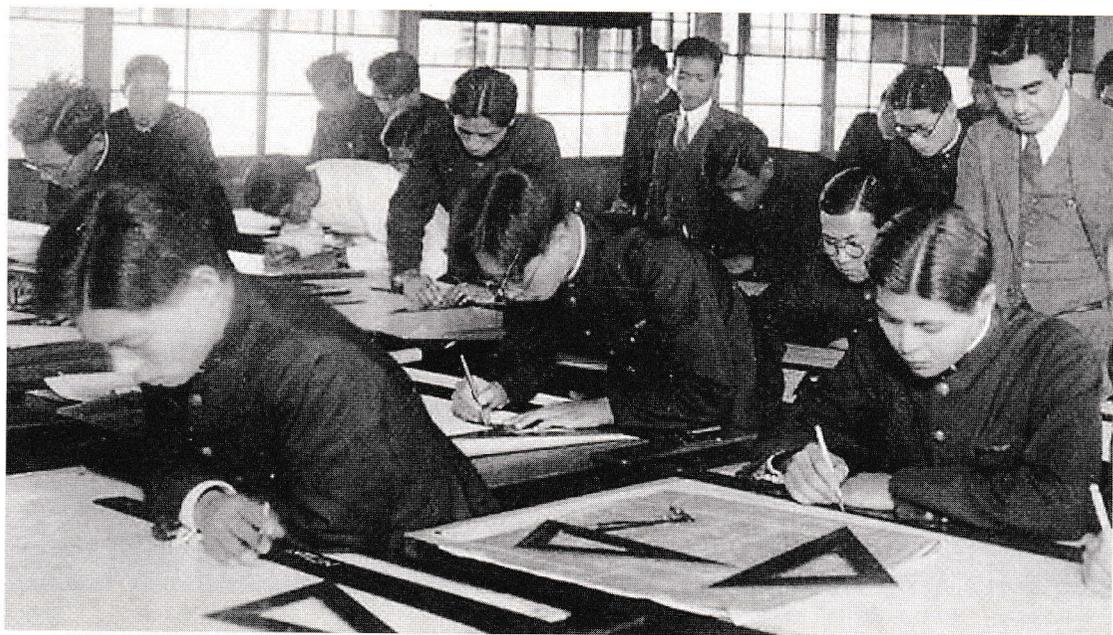
55	56	57	58	59	60	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	昭和/平成
80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	西 暦
																					樽崎 泰道
△	△	△	△																		畑野 正
△	△	△	△																		高橋 寛
																					藤田 至則
																					星埜 和
																					佐々木道夫
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△		西川 泰
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△												鈴木 康弘
																					工藤 浩
																					奥川 淳志
△	△	△	△																		内藤 幸穂
		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△								三上 澄
		△	△	△	△																片倉 正彦
				△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	中村 宏
				△	△	△	△	△	△	△	△										深沢 義朗
				△	△	△	△	△	△	△								△	△	△	隈元 力
								△	△	△	△										西 敏賢
								△	△	△	△	△									水谷 武司
								△	△	△	△	△	△	△	△						力丸 厚
									△	△	△										前田 研一
												△	△	△							石井 清
												△	△	△	△	△	△				石戸 明
												△	△								竹村 次朗
													△	△	△	△	△	△	△		橋本 渉一
													△	△							鈴木 英二
															△	△	△	△			丹羽 外二
															△	△	△	△	△	△	石井 孝男
																	△	△	△	△	長野 正孝
																	△	△	△	△	橋本 修治
																	△	△	△	△	横山 義雄
																		▽	▽		巖 網林
																		△	△		和田 温之
																		△	△		岩瀬 正人
																		△	△		草柳 俊二
																			△		安藤 勝敏

昭和/平成	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
西 暦	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79
樽崎 泰道													△												
畑野 正													△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
高橋 寛													△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
藤田 至則														△	△	△	△								
星埜 和														△	△	△	△								
佐々木道夫																△	△								
西川 泰																		△		△	△	△	△	△	△
鈴木 康弘																		△	△	△	△	△	△	△	△
工藤 浩																			△	△					
奥川 淳志																				△	△	△			
内藤 幸穂																							△	△	△
三上 澄																									
片倉 正彦																									
中村 宏																									
深沢 義朗																									
隈元 力																									
西 敏賢																									
水谷 武司																									
力丸 厚																									
前田 研一																									
石井 清																									
石戸 明																									
竹村 次朗																									
橋本 涉一																									
鈴木 英二																									
丹羽 外二																									
石井 孝男																									
長野 正孝																									
橋本 修治																									
横山 義雄																									
蔽 網林																									
和田 温之																									
岩淵 正人																									
草柳 俊二																									
安藤 勝敏																									

◎常勤教員、○常勤技術系職員、△非常勤、▽兼担、■現職



昭和6年頃の測量風景。平板測量は今と変わらず



昭和6年頃の製図授業風景

昭和/平成	西	曆	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54
梅崎 泰道																											
畑野 正																											
高橋 寛																											
藤田 至則																											
星野 和																											
佐々木道夫																											
西川 泰																											
鈴木 康弘																											
工藤 浩																											
奥川 淳志																											
内藤 幸徳																											
三上 澄																											
片倉 正彦																											
中村 宏																											
深沢 義明																											
隈元 力																											
西 敏賢																											
水谷 武司																											
力丸 厚																											
前田 研一																											
石井 清																											
石戸 明																											
竹村 次朗																											
橋本 涉一																											
鈴木 英二																											
丹羽 外二																											
石井 孝男																											
長野 正孝																											
橋本 修治																											
横山 義雄																											
渡 綱林																											
和田 温之																											
岩間 正人																											
草柳 俊二																											
安藤 勝敏																											

◎常勤教員、○常勤技術系職員、△非常勤、▽兼任、■現職

●昭和40年度までの工学部土木工学科専門科目配当表

講 座	科 目	担 当 者	必選の別	単 位	週 時 間 数								
					1年		2年		3年		4年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
第一講座 (応用力学)	応用力学(1)演習	松村	○	4			2	2					
	応用力学(2)及び演習	松村	○	2			2	2					
	鉄筋コンクリート工学	松村	△	3					3	3			
	橋梁工学(1)	小玉	○	4					2	2			
	橋梁工学(2)	西脇	○	4					2	2			
	構造物設計製図(1)	鈴木	△	3								2	2
	構造物設計製図(2)	西脇、小玉	○	2							3	3	
	土木製図学	西脇、小玉	△	1									2
	土木製図学	田辺	○	2			3	3					
	ゼミナール卒業論文	高橋	○	2		2	2						
第二講座 (水工)	水理学(1)演習	王	○	4			2	2					
	水理学(1)演習	王	○	2			2	2					
	水理学(2)及び演習	王	△	2					2				
	河川工学	高橋(裕)	△	3								2	2
	発電水工学	中岡	△	3								2	2
	港湾工学	若桑	△	3					2	2			
	ゼミナール卒業論文		○										
第三講座 (施工)	土木材料科学	酒井	△	2			2						
	コンクリート工学	小玉	○	2				2					
	土質工学	神山	○	4					2	2			
	土木実験	神山、小玉	○	2					3	3			
	土木施工法	酒井	○	4					2	2			
	建設機械	中岡	△	3									
	測量学(1)実習	田辺	○	4			2	2					
	測量学(2)及び実習	田辺	○	2			2	2					
	測量学(1)実習	田辺	○	2			3	3					
	測量学(2)及び実習	春日屋	○	4					2	2			
ゼミナール卒業論文		○											
第四講座 (都市工学)	都市計画学	酒井	△	3			2	2					
	道路工学(1)	大島	△	3							2	2	
	道路工学(2)	川浦	○	4					2	2			
	道路工学	川浦	△	3							2	2	
	衛生工学	左合	△	3			2	2					
ゼミナール卒業論文		○											
講座外	土木行政学	高橋(昭)	△	2								2	
	建築学大意	三木		2									2
	機械工学大意	寺沢		2								2	
	電気工学大意	坂内		2								2	
	工業経営学	桐淵		2								2	
	原子力工学概論	山本、井上	△	4								2	2
	解析学	根本	△	4			2	2					
	応用数学論	池原	△	4			2	2					
	代数学特論	志賀		4					2	2			
	応用物理学	樋口		4			2	2					
	原子物理学	萩原	△	4			2	2					
	工業化学	福田		4					2	2			
		西川、越後谷		4			2	2					

(1) 卒業論文を申告するとき(4学年の4月)には90単位以上を修得していなければならない。但し、応用力学(1)、同演習、水理学(1)、同演習、測量学(1)、同実習、土木製図のうち1科目でも未修得の場合は卒業論文の申告は出来ない。

昭和四〇年代からのカリキュラムの変遷

●〈改訂〉昭和41年度の土木工学科専門科目教育課程表

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
土木構造	応用力学(1)及び演習	中岡	○	6			4	4					
	応用力学(2)及び演習	中岡	△	3					3	3			
	鉄筋コンクリート工学	小玉	○	4					2	2			
	橋 梁 工 学 (1)	西脇	○	4					2	2			
	橋 梁 工 学 (2)	鈴木	△	3							2	2	
	構造物設計製図(1)	西脇、小玉	○	2						3		3	
	構造物設計製図(2)	西脇、小玉	△	1									3
	土 木 製 図	田辺	○	2			3	3					
	ゼ ミ ナ ー 学 卒 業 論 文	高橋	○	2	2	2							
水工学	水理学(1)及び演習	王	○	6			4	4					
	水理学(2)及び演習	王	△	2					2				
	河川工学	高橋(裕)	△	3						2		2	
	発電水力学	中岡	△	3						2		2	
	港湾工学	渡部	△	3					2		2		
	防災工学	有賀	△	2								2	
	ゼ ミ ナ ー 学 卒 業 論 文		○										
施 工	土 木 材 料 学	酒井	△	2			2						
	コンクリート工学	小玉	○	2				2					
	地 質 工 学	成瀬	△	2								2	
	土 質 工 学	神山	○	4					2	2			
	土 木 実 験	神山、小玉	○	2					3	3			
	土 木 施 工 法 学	酒井	○	4					2	2			
	建設機械	中岡	△	3			2	2					
	機械化施工	矢野	△	2								2	
	測量学(1)	田辺	○	4			2	2					
	測量学(1)実習	田辺	○	2			3	3					
	測量学(2)及び実習	春日屋	○	4					2	2			
土木応用数学	春日屋	△	2							2			
ゼ ミ ナ ー 学 卒 業 論 文		○											
都市工学	都市計画学	酒井	△	3			2	2					
	道路工学(1)	大嶋	△	3							2	2	
	道路工学(2)	川浦	○	4					2	2			
	衛生工学	川浦	△	3							2	2	
	ゼ ミ ナ ー 学 卒 業 論 文	佐藤、左合	△	3			2	2					
関連科目	土木行政学	城野	△	2								2	
	建築学大意	三木		2									2
	機械工学大意	寺沢		2								2	
	電気工学大意	坂内		2								2	
	工業経営学	桐淵		2								2	
	原子力工学概論	山本	△	4								2	2
	解析学		△	4			2	2					
	応用数学		△	4			2	2					
	函数論			4					2	2			
	数理統計学			4			2	2					
	応用物理学	萩原	△	4			2	2					
	原子物理学	福田		4					2	2			
	工業化学	西川、越後谷		4			2	2					

卒業論文着手の条件

卒業論文着手の条件は3学年学年末試験終了時において、下記事項をみたし、学則第10条に基づく90単位以上を修得しなければならない。

(1) 教養課程の科目については2年までの全必修科目を修得すること。

(2) 専門科目については応用力学(1)及び演習、水理学(1)及び演習、測量学(1)、測量学(1)実習、土木製図を修得すること。

● 〈改訂〉昭和50年度の土木工学科専門科目教育課程表

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	
土木構造	応用力学(1)及び演習	星谷、小玉、西脇、奥川、千葉	○	2.5		4							
	応用力学(2)及び演習	小玉、千葉	○	2.5			4						
	応用力学(3)及び演習	星谷、千葉	○	2.5				4					
	構造力学(1)及び演習	西脇	○	2.5					4				
	構造力学(2)及び演習	星谷	○	2.5							4		
	コンクリート原論(1)	国分	○	1.5			2						
	コンクリート原論(2)	国分	○	1.5				2					
	鉄筋コンクリート構造理論	国分	○	1.5					2				
	鉄筋コンクリート及びプレ	国分	○	1.5						2			
	ストレスコンクリート構造	西脇	○	1.5						2			
	鋼構造学	西脇	○	3					2	2			
橋梁工学	鈴木	○	3								4		
構造物設計図(1)	国分、小玉	○	2							4			
構造物設計図(2)	西脇	○	2								4		
水工学	水理学(1)及び演習	王	○	2.5			4						
	水理学(2)及び演習	王	○	2.5				4					
	水理学(3)及び演習	王	○	1.5					2				
	河川工学	王	○	3						2		2	
	電力工学	王	○	3						2		2	
	港湾工学	畑野	○	3					2			2	
	防災工学	渡部、有賀	○	1.5									2
土木計画	計画数理学(1)	川浦	○	1.5			2						
	計画数理学(2)	中岡	○	1.5				2					
	計画数理学(3)	西脇	○	1.5				2					
	国土計画	川浦	○	1.5					2				
	都市計画	川浦	○	1.5						2			
	交通工学(1)	岩崎	○	1.5					2				
	道路工学(2)	川浦	○	1.5						2			
	道路工学(1)	岩崎	○	1.5							2		
	道路工学(2)	川浦	○	1.5								2	
	道生工学	高橋、左合	○	3									4
土木施工	応用地質学(1)	西川	○	1.5			2						
	土質工学(2)	神山	○	1.5				2					
	土木施工学	神山	○	3					2				
	土木施工管理	中岡	○	4.5					2				
	土木測量学(1)実習	矢野	○	1.5								2	
	測量学(2)実習*	田辺	○	3									
	測量学(1)実習	田辺	○	2.5			4		4				
	測量学(2)実習	田辺	○	3						2			
	測量学(2)実習	田辺	○	1									
	関連科目	卒業情報	全員	○	1.5	2							
情報処理		中岡	○	1.5		2							
土木基礎		神山、王、小玉	○	1					4		4		
土木実習		成山	○	1.5	4								2
土木図学		有賀	○	1.5		2							
土木建築学		原	○	3		2							
土木機械工学		原	○	1.5			2						
土木電気工学		原	○	1.5				2					
土木原子工学		原	○	1.5					2				
土木解析工学		原	○	3				2		2			
土木数理学		原	○	3					2		2		
土木統計学		原	○	3					2		2		
土木応用学		原	○	3					2		2		
土木工業		原	○	3					2		2		
土木工業		原	○	3					2		2		
土木工業		原	○	3					2		2		

* 測量学(2)実習は夏期休暇に集中的に実施。この課程表は一部変更されることがある。

● (改訂) 昭和62年度の土木工学科専門科目教育課程表

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	
工学基礎	応用物理学	福田		4								2	2
	無機工業化学	元井		2			2	(2)					
	有機工業化学	小林		2			2	(2)					
	統計処理	加藤(満)		2									
	情報処理概論	松山	△	2			2						
	電子計算機システム	松山	△	2				2					
専門共通系	卒業研究論	全員	○	6									
	土木汎論	全員		2	2								
	数値解析法(1)	増田		2				2					
	数値解析法(2)	増田		2					2				
	土木実験	神山、西脇、渡辺 (隆)、王、小玉	○	4					4	4			
	土木製図	成山	○	2	4								
	工業数学(1)	増田	△	2			2						
	工業数学(2)	片田	△	2				2					
	工業数学(3)	岩崎		2					2				
	工業数学(4)			2						2			
	技術英語	渡辺(隆)、増田、 岩崎		2			2						
	土木技術史			2			2						
	計測工学	片田		2							2		
	土木行政	有賀		2								2	
土木工学総合演習	全員		2								2		
防災工学	有賀		2								2		
ゼミナール(1)	全員		2								2		
ゼミナール(2)	全員		2								2		
力学系	応用力学(1)	星谷、片田	○	2		2							
	応用力学演習(1)	星谷、片田	○	1			2						
	応用力学(2)	星谷、増田	△	2			2						
	応用力学演習(2)	星谷、片田	△	1				2					
	応用力学(3)および演習	増田		3				4					
	マトリックス構造解析	増田		2					2				
	振動工学	星谷		2						2			
	信頼性設計法	隅元		2								2	
材料・構造系	土木材料学	渡辺(隆)、小玉	○	2			2						
	コンクリート工学	小玉	△	2				2					
	鉄筋コンクリート構造工学	小玉		2					2				
	プレストレストコンクリート構造工学	小玉		2						2			
	弾性学・塑性学	西脇		2				2					
	構造物設計序論	西脇		2				2					
	鋼構造学	西脇		2					2				
	構造安定論	西脇		2						2		2	
	橋梁力学	鈴木(康)		2						2			
	橋梁工学	鈴木(康)		2							2		
	構造物設計製図(1)	小玉	○	3					4				
構造物設計製図(2)	西脇	○	3						4				
水工系	水理学(1)演習	綾	○	2			2						
	水理学(1)演習	王	○	1				2					
	水理学(2)	綾	△	2				2					
	水理学(2)演習	王	△	1					2				
	水理学(3)	王		2					2				
	水文	綾		2						2			
	河川工学	王		2						2			

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	
水 工 系	発 電 土 木 工 学	中村(宏)		2								2	
	海 岸 工 学		三上	2						2			
	港 湾 工 学		三上	2								2	
土 木 計 画 系	確 率 ・ 統 計 概 論	岩崎	△	2		2							
	土 木 計 画	岩崎	△	2			2						
	都 市 ・ 国 土 計 画	渡辺(隆)		2								2	
	交 通 工 学	岩崎		2			2						
	交 通 計 画	岩崎		2				2					
	道 路 工 学	渡辺(隆)		2					2				
	鉄 道 工 学	深沢		2								2	
	上 水 道 工 学	綾		2						2			
下 水 道 工 学	綾		2								2		
構 造 ・ 基 礎 系	応 用 地 質 学	西川		2			2						
	土 質 力 学 (1)	神山	○	2		2							
	土 質 力 学 演 習 (1)	神山	○	1			2						
	土 質 力 学 (2)	神山	△	2			2						
	地 盤 基 礎 工 学	片田		2				2					
	土 質 動 力 学	片田		2					2				
	地 震 工 学	片田		2						2		2	
	土 木 施 工 (1)	成山		2						2			
	土 木 施 工 (2)	成山		2								2	
	土 木 施 工 管 理	矢野		2									2
	測 量 学 (1)	田辺	○	2		2							
	測 量 学 (2)	田辺	△	2			2						
	測 量 学 実 習 (1)	田辺	○	2		4							
測 量 学 実 習 (2)	田辺	○	2			4							
測 量 学 実 習 (3)	田辺、成山	△	2					2	夏期休 暇中				
関 連 科 目	建 築 学 大 意	広瀬		2									2
	機 械 工 学 汎 論	太田		2						2			
	電 気 工 学 汎 論	天野		2						2			
	経 営 工 学	遠藤(健)、増井		2								2	
	原 子 力 工 学 概 論	堀内		2								2	
	オペレーティングシステム	石川(知)		2									
	特 別 講 義			2									

○：必修 △：選択必修 その他：自由選択
イ．教育課程表の科目担当者名は、昭和62年度の科目担当者である。
ロ．この教育課程表は一部変更されることがある。

●〈改訂〉平成4年度の土木工学科専門科目教育課程表

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必選の別	単位数	週 時 間 数								
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
工学基礎	確 率 ・ 統 計 学 (1)	中村(隆司)		2		2							
	工 業 数 学 (2)	吉川		2			2						
	工 業 数 学 (3)	増田		2			2						
	工 業 数 学 (4)	丸山		2				2					
	数 値 解 析 (1)	長岡		2					2				
	数 値 解 析 (2)	皆川		2			2						
	技 術 英 語	西脇、綾、岩崎		2						2			
	無 機 工 業 化 学	木村(脩)		2			2	(2)					
	有 機 工 業 化 学	中村(隆一)		2			(2)	2					
	情 報 処 理 概 論	松山(実)		2			2	2					
応 用 物 理 学	福田(徳)		4			2	2						
専門共通系	卒 業 研 究	全員	○	6									
	土 木 汎 論	全員		2	2								
	土 木 技 術 史	高橋(裕)		2			2						
	土 木 行 政	石戸		2			2						
	防 災 工 学	水谷		2				2					
	土 木 製 図	皆川	○	2	4								
	土 木 設 計 演 習 ・ 製 図 (1)	小玉	○	4				4					
	土 木 設 計 演 習 ・ 製 図 (2)	皆川	○	4						4			
	土 木 実 験	渡辺(隆)、王、小玉、長岡	○	2					4	(4)			
	測 量 学	力丸		2			2						
応 用 測 量 学	力丸		2				2						
測 量 学 実 習 (1)	丸山、中村(隆司)	○	2			4							
測 量 学 実 習 (2)	丸山、中村(隆司)		2										
特 別 講 義			2				4						
力学系	応 用 力 学 (1)	星谷、片田		2	2								
	応 用 力 学 (2)	星谷、吉川		2		2							
	応 用 力 学 (3)	増田		2			2						
	応 用 力 学 演 習 (1)	星谷、丸山		2			2						
	応 用 力 学 演 習 (2)	片田、丸山		2				(2)	2				
	弾 性 学 ・ 塑 性 学	増田		2			2						
	マ ト リ ッ ク ス 構 造 解 析	増田		2				2					
	構 造 安 定 論	皆川		2					2				
	振 動 工 学	星谷		2						2			
材料・構造系	土 木 材 料 学	西脇、渡辺、小玉		2		2							
	コ ン ク リ ー ト 工 学	小玉		2			2						
	鉄 筋 コ ン ク リ ー ト (1)	小玉		2			2						
	鉄 筋 コ ン ク リ ー ト (2)	吉川		2				2					
	鉄 筋 コ ン ク リ ー ト 演 習	吉川		2					2				
	構 造 物 設 計 序 論	西脇		2			2						
	銅 構 造 学	西脇		2			2						
	橋 梁 力 学	前田(研)		2				2					
橋 梁 工 学	前田(研)		2					2					
水工系	水 理 学 (1)	綾		2		2							
	水 理 学 (2)	長岡		2			2						
	基 礎 流 体 力 学	王		2			2						
	水 理 学 演 習	王、長岡		2				(2)	2				
	河 川 工 学	王		2			2						
	発 電 土 木 工 学	中村(宏)		2				2					
	上 下 水 道 工 学	綾		2			2						
	水 圏 環 境 工 学	長岡		2				2					

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
水 工 系	都 市 ・ 地 域 環 境 工 学	綾		2						2			
	海 岸 工 学	三上		2			2						
	港 湾 工 学	三上		2				2					
土 木 計 画 系	土 木 計 画	岩崎		2			2						
	都 市 計 画	中村(隆司)		2			2						
	国 土 ・ 地 方 計 画	渡辺(隆)		2					2				
	交 通 工 学	岩崎		2			2						
	交 通 計 画	岩崎		2				2					
	道 路 工 学	渡辺(隆)		2			2						
施 工 ・ 基 礎 系	鉄 道 工 学	深沢		2				2					
	応 用 地 質 学	西川		2			2						
	土 質 力 学 (1)	木村(孟)		2			2						
	土 質 力 学 (2)	木村(孟)		2				2					
	土 質 力 学 演 習	片田		2				2					
	地 盤 基 礎 工 学	片田		2				2					
	土 質 動 力 学	片田		2					2				
	土 木 施 工 (1)	矢野		2			2						
	土 木 施 工 (2)	矢野		2				2					
	土 木 施 工 管 理 法	矢野		2					2				
信 頼 性 設 計	石井		2						2				

○：必修科目 その他：自由選択
 教育課程表の科目担当者は一部変更されることがある。

●〈改訂〉平成5年度の土木工学科専門教育課程表

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数									
					1 年		2 年		3 年		4 年			
					前	後	前	後	前	後	前	後		
専門基礎科目	数 学 (1)	伊藤(隆)、山ノ下、 佐藤(シ)、井上他	○	4	2	2								
	数 学 (2)	押川、平井(雍)、他		4	2	2								
	数 理 統 計 概 論	中村(隆司)		2		2								
	微 分 方 程 式 論	吉川		2			2							
	ベクトル解析学	増田		2				2						
	フーリエ解析学	丸山		2					2					
	関 数 論	長岡		2							2			
	情 報 処 理 概 論	松山(実)、他		2			2							
	数 値 解 析 法	皆川		2				2						
	物 理 学 (1)	鎗木、稲葉		4	4									
	物 理 学 (2)	鎗木、稲葉		4		4								
	化 学 (1)	桜井、小笠原		4	2	2								
	化 学 (2)	多留、小林(光)、 高砂子		2	2									
	化 学 (3)	桜井		2		2								
	生 物 学	坂本(一)		2		2								
地 球 学	角		2											
物 理 学 実 験	菱山、他	○	1	3	(3)									
化 学 実 験	多留、他	○	1	(3)	3									
無 機 工 業 化 学	永井		2						2					
有 機 工 業 化 学	中村(隆)		2					2						
専門共通	卒 業 研 究	全教員	○	6										
	土 木 技 術 史	岩崎		2			2							
	土 木 行 政	石戸		2			2							
	土 木 英 語	西脇、綾、岩崎		1							2			
	土 木 製 図	皆川	○	2	4									
	土 木 設 計 演 習 ・ 製 図 (1)	小玉	○	2					4					
	土 木 設 計 演 習 ・ 製 図 (2)	皆川	○	2						4				
	土 木 実 験 演 習 (1)	渡辺(隆)、小玉、 王、長岡	○	2					4					
	土 木 実 験 演 習 (2)	渡辺(隆)、小玉、 王、長岡	○	2							4			
	測 量 学	力丸		2			2							
	応 用 測 量 学	力丸		2					2					
測 量 学 実 習 (1)	丸山、中村(隆司)	○	2			4								
測 量 学 実 習 (2)	丸山、中村(隆司)		2					4						
力学系	応 用 力 学 (1)	星谷、増田		2	2									
	応 用 力 学 (2)	星谷、吉川		2		2								
	応 用 力 学 (3)	丸山		2			2							
	弾 塑 性 学	増田		2				2						
	振 動 工 学	星谷		2							2			
材料・構造系	コ ン ク リ ー ト 工 学	小玉		2			2							
	鉄 筋 コ ン ク リ ー ト	吉川		2				2						
	鉄 筋 コ ン ク リ ー ト 構 造	吉川		2					2					
	鋼 構 造 学	西脇		2				2						
	橋 梁 工 学	鈴木(英二)		2					2					
	構 造 物 設 計 論	西脇		2							2			
水工系	水 理 学 (1)	長岡		2		2								
	水 理 学 (2)	綾		2			2							
	河 川 工 学	王		2				2						
	海 岸 ・ 港 湾 工 学	三上		2				2						
	発 電 土 木 工 学	中村(宏)		2					2					
	上 下 水 道 工 学	綾		2					2					
	都 市 ・ 地 域 環 境 工 学	綾		2							2			

学 科 目	授 業 科 目	担 当 者	必 選 の 別	単 位 数	週 時 間 数								
					1 年		2 年		3 年		4 年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
土木計画系	土 木 計 画	岩崎		2			2						
	都 市 計 画	中村(隆司)		2									
	交 通 工 学	岩崎		2			2						
	道 路 工 学	渡辺(隆)		2			2						
	鉄 道 工 学	橋本(渉)		2				2					
施工・基礎系	応 用 地 質 学	西川		2			2						
	土 質 力 学 (1)	竹村(次)		2			2						
	土 質 力 学 (2)	竹村(次)		2				2					
	地 盤 基 礎 工 学	片田		2				2					
	土 木 施 工	矢野		2				2					
	土 木 施 工 管 理	矢野		2					2				
土木ゼミ ナール	応用力学ゼミナール(1)	星谷		2				2					
	応用力学ゼミナール(2)	丸山		2					2				
	応用力学ゼミナール(3)			2				2					
	土木材料ゼミナール(1)	小玉		2				2					
	土木材料ゼミナール(2)	吉川		2					2				
	土木材料ゼミナール(3)			2					2				
	構造工学ゼミナール(1)	西脇		2				2					
	構造工学ゼミナール(2)	増田		2					2				
	構造工学ゼミナール(3)	皆川		2				2					
	水工学ゼミナール(1)	綾		2				2					
	水工学ゼミナール(2)	王		2					2				
	水工学ゼミナール(3)	長岡		2					2				
	土木計画ゼミナール(1)	渡辺(隆)		2				2					
	土木計画ゼミナール(2)	岩崎		2					2				
	土木計画ゼミナール(3)	中村(隆司)		2				2					
	施工基礎ゼミナール(1)	神山		2				2					
	施工基礎ゼミナール(2)	片田		2					2				
施工基礎ゼミナール(3)			2						2				

イ. 教育課程表の科目担当者は、平成5年度のものである。

ロ. この教育課程表は、一部変更されることがある。

* 週時間数の () 書きのものはクラスにより前期または後期の配当科目である。

●〈現行〉平成12年度の土木工学科専門教育課程表

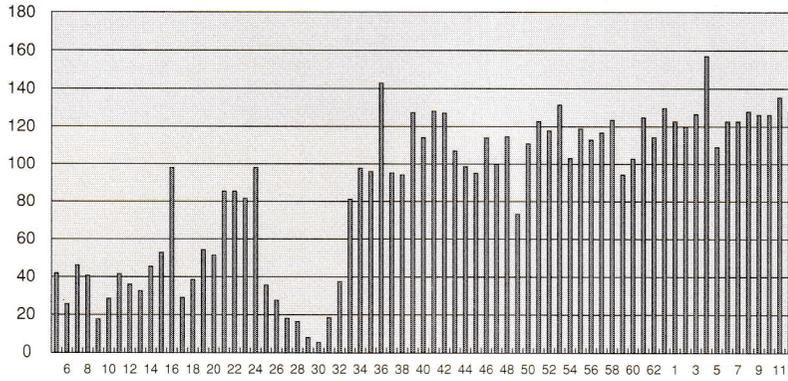
科目群	授業科目	担当者	必修の別	単位数	週時間数								
					1年		2年		3年		4年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
専門基礎	数学(1)	笹尾	○	4	2	2							
	数学(2)	知沢		4			2	2					
	数理統計学	中村(隆)		2			2						
	応用確率学	星谷		2				2					
	微分方程式論	末政		2				2					
	ベクトル解析学	白旗		2					2				
	フーリエ解析学	古田		2							2		
	関数論	古田		2								2	
	物理学(1)	稲葉、内山		4		4							
	物理学(2)	稲葉、内山		4			4						
	基礎化学	吉田(真)		4	2	2							
	物理化学(1)	多留		2			2						
	物理化学(2)	渡辺(誠)		2				2					
	生物物理学	坂本(一)		2									
地学	角		2										
物理学実験	稲村(二)、門多、手束、神戸、杉本、他	○	2	4	(4)								
化学実験	高砂子、吉野(一)、吉田(真)、大部	○	2	(4)	4								
無機材料化学	篠山		2								2		
有機材料化学	小林(光)		2						2				
土木工学基礎	応用力学(1)	星谷、皆川	△	2	2								
	応用力学演習(1)	皆川、栗原	○	1	2								
	応用力学(2)	星谷、丸山	△	2		2							
	応用力学演習(2)	星谷、丸山	○	1		2							
	水理学(1)	綾、長岡	△	2	2								
	水理学演習(1)	綾	○	1	2								
	水理学(2)	綾、長岡	△	2		2							
	水理学演習(2)	長岡	○	1		2							
	土木実験演習(1)	小玉、吉川、片田、長岡、末政、栗原	○	2						4			
	土木実験演習(2)	岩崎、増田、中村(隆)、丸山、白旗	○	2							4		
情報処理	CAD演習	栗原	○	2	4								
	コンピュータ演習	白旗	○	2		4							
	コンピュータ概論	安井		2			2						
	数値解析	綾		2				2					
	測り量	白旗	△	2		2							
	リモートセンシング	巖		2			2						
	測量実習(1)	中村(隆)、末政	○	2			4						
測量実習(2)	長岡、栗原		2					4					
土木構造系	構造力学	皆川		2			2						
	弾塑性	増田		2				2					
	振動工学	丸山		2						2			
	鋼構造	増田	△	2				2					
	鋼構造演習	増田、白旗	△	1					2				
	橋梁工学	石井		2					2				
コンクリート系	コンクリート工学	小玉	△	2			2						
	鉄筋コンクリート(1)	吉川	△	2				2					
	鉄筋コンクリート(2)	吉川		2					2				
	コンクリート演習	吉川、栗原	△	1					2				
水圏・環境系	河川工学	綾		2				2					
	海岸港湾工学	星野(正)		2						2			
	土木とエネルギー	中村(宏)		2					2				
	上下水道工学	綾		2				2					
	社会基盤環境工学	長岡		2						2			

科目群	授業科目	担当者	必選の別	単位数	週時間数								
					1年		2年		3年		4年		
					前	後	前	後	前	後	前	後	
土木計画系	土木計画学	岩崎	△	2				2					
	土木計画学演習	岩崎、中村(隆)	△	1				2					
	都市計画学	中村(隆)		2			2						
	都市環境学	中村(隆)		2						2			
	景观工学	長野		2			2						
	交通工学	岩崎		2					2				
	鉄道工学	安藤		2					2				
道路工学	橋本(修)		2							2			
地盤工学系	応用地質学	和田		2			2						
	土質力学(1)	片田	△	2			2						
	土質力学(2)	末政	△	2				2					
	土質力学演習	片田	△	1				2					
	地盤基礎工学	末政		2					2				
地震工学	片田		2							2			
土木共通	土木概論ゼミ(1)	栗原		1	2								
	土木概論ゼミ(2)	片田		1		2							
	設計演習製図(1)	小玉	□	2								4	
	設計演習製図(2)	皆川	□	2								4	
	総合演習ゼミ(1)	吉川	○	1					2				
	総合演習ゼミ(2)	末政	○	1								2	
	応用力学ゼミナール	星谷、丸山		2								2	
	建設情報ゼミナール	皆川		2								2	
	構造工学ゼミナール	増田、白旗		2								2	
	コンクリートゼミナール	小玉、吉川		2								2	
	水工学ゼミナール	綾、長岡		2								2	
	地盤工学ゼミナール	片田、末政		2								2	
	土木計画ゼミナール	岩崎、中村(隆)		2								2	
	土木の歴史	長野		2									
	土木と行政	岩淵		2									
	土木施工	横山(義)		2									
	コンストラクションマネジメント	草柳		2									
	技術英語	岩崎		2									
	フィールドリサーチ	小玉、皆川		2									
	特別講義(1)	小玉											
特別講義(2)	吉川												
卒業研究	全員		○	6									

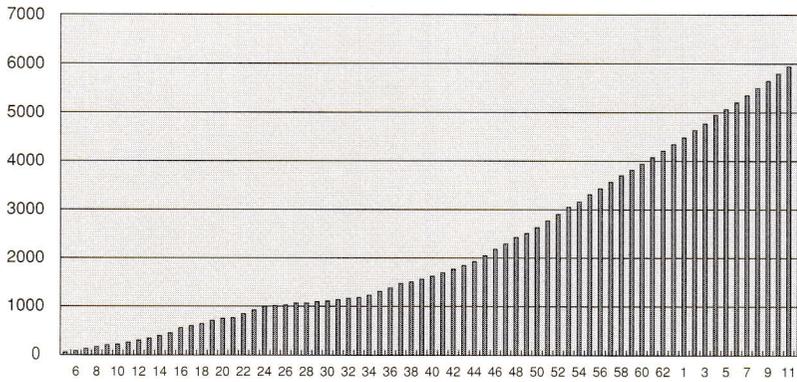
○印…必修 △印…選択必修 □印…設計演習製図選択必修

会員数の推移

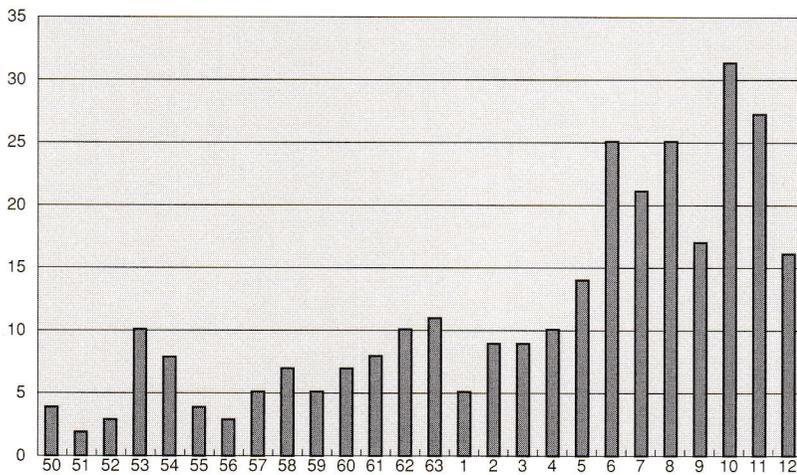
●年度毎の会員数



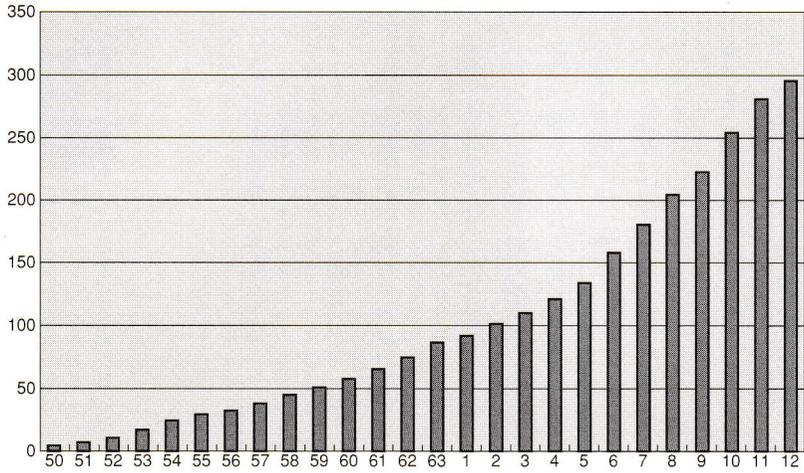
●会員数の累積



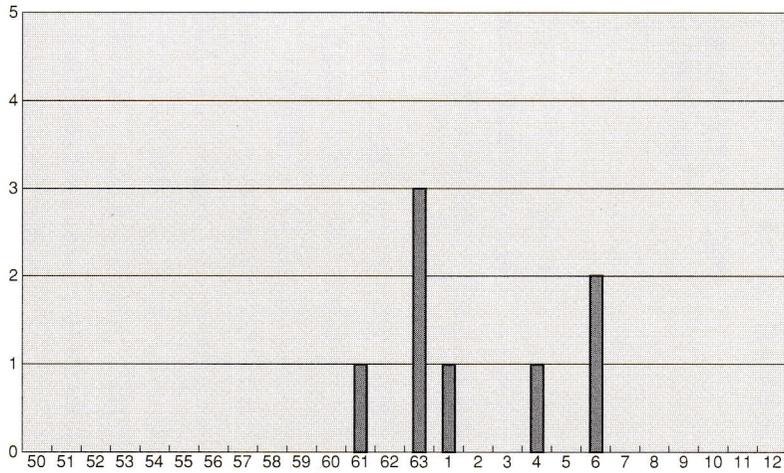
●年度毎の修士修了者数



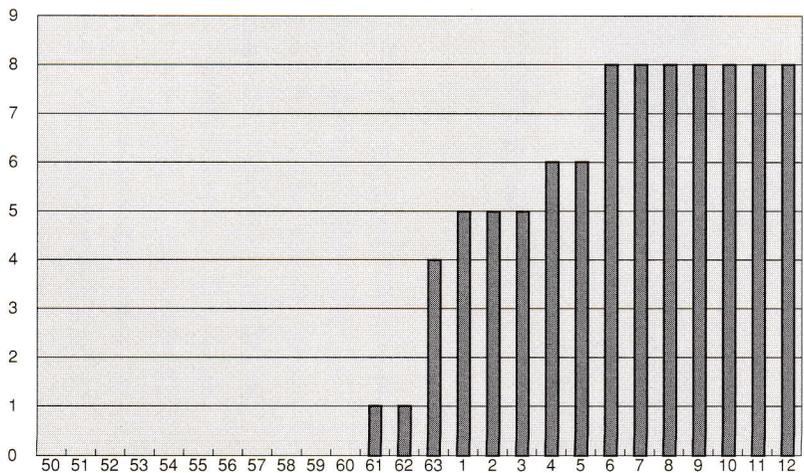
●修士修了者累積数



●年度毎の博士の学位取得者数



●博士の学士取得者の累積



自由 投稿

第三京浜道路 多摩川橋

工事施工の思い出

昭三十五 上野 茂

学校を卒業して建設会社に勤務した私は、一五年たつてようやく規模もある程度の工事の責任者として起用された。それがなんと学校に近い第三京浜道路の多摩川に架かる橋の下部工事で、日本道路公団の発注であった。

この昭和三十七年頃は日本が高度成長にはいる黎明期で、東海道新幹線、首都高速道路、地下鉄などの工事が盛んに行われ、土木屋にとっては何の心配もいらぬ栄華の時代であった。

第三京浜道路は、急激に増える東京、横浜間の交通に対処する自動車専用道路の建設が急がれ、弊社施工の「多摩川

橋」の部分が最初に着工された。

高水敷を含めた川の中にピアが八本ならび、切回しを行いながら、基礎の床付はすべて土丹に岩着とした。アバウト二本は左右堤防上であり、左岸の都道は支障を来し、三百メートルに亘って堤防上から下方へ移設した。コンクリートは現場プラントで練り、ダンプトラックで運んでバケットによりクレーンで打設した。品質管理はすべて学校のコンクリート研究室にお願した。研究室からも応援を戴き、母校が近いことが誠に有難かった。

工事は、ご発注者はじめ河川管理で建設省のご指導を戴きながら、昼夜兼行で約九ヶ月をかけて完成した。

七〇周年を祝い 更なる発展への提言

昭三十五 田中弥寿男



創設七〇周年おめでとうございます。

母校は、優秀な技術者、研究者を世に送り、緑土会員の活

躍と相俟つて、数ある工学系大学の中で今や知名度は抜群で、高い社会の評価を受けていることは吾等の喜びと誇りであります。

これから大学が冬の時代を迎えるに当たって、私立大学は活き残りを懸命に模索しています。国立大学も法人化が提案されている実情を踏まえ、母校の校名変更の問題は将来の繁栄に重大な影響が懸念されるので、この際、育英会に対して、この問題の再考を願う運動を提言します。会員諸兄弟のご賛同を得れば幸甚です。

ISO 認証取得に想う

昭三十五 内山 博



ISOブームは、
「これの認証取得を取らなければ、将来入札に参加できない」という危機感が背景にあった。

北海道内の中堅・中小建設業者にも取得企業が増えた。入札条件を意識した「第一次ブーム」から、最近では経営体質を強化するための「企業改革」へと変わ

ってきたように思う。

昨年の四月五日朝礼において、当社の業務である「建設コンサルタント・測量・GIS」にISO9001の導入宣言をした。「キックオフ」にあたって、将来の維持運用を考え自社の実態に合わせた品質システムを構築する。したがって、コンサルタントを入れないで、自前で行くこととした。

審査登録機関による予備審査が、今年の五月一八日、一九日に行われた。いまは、本審査待ちである。暑い夏が終わって、首尾よく「登録証を手にしたとき」、何か気が抜けたようにならないようにしたいと思っっているこの頃です。

土木と云う名

昭和三十三年 野口義教

過日、工業会北海道支部の総会の際、学長代理として児玉教授のご臨席を頂きました。

ご祝辞の中で現在の大学をとりまいている問題点、また二十一世紀における武蔵工業大学の在り方等を含めた大変貴重な

なお話を聞かせていただきました。有り難うございました。

お話の中で、時代の変遷により「土木」と言う言葉を二十一世紀に合った言葉に変える機運があることをお聞き致しました。

「土木」と云う名について先輩に聞いた話ですが、「築土構木」……土を築いて木材を組み立てる。昔は医業、造船業も土木の中に入っていたとのこと。両者が自活できるようになり土木より分かれた、目的としては、

- 一、文化向上の基礎の土台をつくる。
- 二、社会人の幸福になる基礎の土台をつくる。

また、経験工学でもあり、地球の彫刻家なんて言われて、世間の人には土木は三Kの一つと言われても誇りをもって土木人として心を込めた作品を残してきた訳です。

今後は、「土木」と言った一つの工学の範囲では、その目的を果たすことは出来ないというか、宇宙をも含むあらゆる分野を入れたものでなければならぬと思います。素敵な言葉で登場することを

期待しております。

「土木遺産」を生み出そう

昭三四年 松本和生

近年、我が国の土木分野においても歴史的近代土木遺産を再評価し、保存・活用すべきとの議論が進みつつあるが、土木技術者として大変喜ばしいことである。

従来、我が国の土木史研究はどちらかというと軽視されがちであったが、歴史的土木遺産に対する社会の価値観の変化もあり、特にこの一〇年間は近代土木遺産に対する考え方が大きく変わり、制度的にも重視される様になって来た。

この様な流れのなかで、文化庁では新しい文化財の概念に、我が国の近代化を支えた産業・交通・土木等からなる近代化遺産を加えることとし、一九九三年より、秋田市の水道水源施設、群馬県碓氷峠の煉瓦造り鉄道橋群、同隧道群、琵琶湖疏水施設等を土木部門の近代化遺産として初めて国の重要文化財及び史跡として指定した。

元来、土木構造物は公共施設として機

能し続けているものが多く、優れた土木構造物は建設以来の長い年月に、その地域のシンボルとなり住民に親しみ愛されるものが多い。つまり土木遺産は、その地域の文化を語る資産として地域づくり、まちづくりに活用されていく事が大切である。すなわち時代を語る重要な文化遺産である。

地域に愛され、次世代に誇れるこの「土木遺産」を造り、生み出し、守る、担い手こそ我ら土木技術者であり、七〇年の伝統を誇る我が緑土会員の使命であると思う。

感謝をこめて



昭三十五卒 谷島恒男

私が今日あるのは中岡、西脇両先生をはじめ同窓諸兄など多くの方々の援助の賜物であると感謝しております。この機会に書き記すこととしました。

私は授業料と生活費の捻出のためのアルバイトの日々を送る貧乏学生でした。

授業料の未納のため二年前期の試験を受けることはできないと学校から通知を受け、退学することもならず、事務局のすすめで中岡先生に相談しました。何のために学校にきているのか分からない状況の私は、先生に授業料を立て替えていただくことになり、膝頭を押さえ嗚咽しました。この援助を卒業まで受けました。

三年の九月、トラス橋の設計製図の審査を新任の西脇先生に受けました。この時の実践的な指導のみならず、先生自身の研究はもとより学生指導に打ち込まれる先生の姿は土木工学科を睥睨するものがありました。私はその姿に多くのものを学んだと確信しております。

私は卒業後は西脇先生のお世話になっておりましたが、肺結核であることがわかり、療養することになりました。

中岡、西脇両先生の親身なお世話に、私は援助していただいてもお返しする自信がないと細々といました。即座に、中岡先生が「これから先、君が援助を必要とする人にこの分をすればよいのですよ。」と言われたことを覚えています。

昭和三五年一〇月一日から四年三か月

の療養生活でした。この間、左右の肺の部分切除の手術等を受けました。この療養生活中、両先生にきめ細やかなお見舞い、援助をうけて療養に努めることができました。

そして、四〇年一月四日付で、西脇先生のお世話で、東京都立大学工学部土木工学科の鋼構造研究室に勤務することになりました。四六年一〇月一日、先生の高専専門学校への推薦をお断りして、一〇年で建設が終わるという都市高速道路の建設に参加するために名古屋高速道路公社に勤務しました。

公社では高速道路計画、環境対策等の業務に従事しました。私は、こうした業務が初めての経験であり、多くの同窓諸兄（武蔵工大同窓会誌NO・一三七JU LY一一七ページ掲載）に助けられ、その職責を全うすることができました。

無論、学生時代に金銭の用立て、ノートへの貸与、レポートの提出等々で援助を受けた諸兄についても忘れ得ぬものです。あらためてお礼申し上げます。

遙かな多摩川

昭三八五卒 牧野成雄

昭和三四年冬、入学願書を提出後、多摩川に出て、二子玉川まで歩き、玉川電車で渋谷に出て、家（西荻窪）に帰った。合格し、以後四年間、毎日多摩川を見ながらの通学となった。

よき師、よき友に恵まれ、楽しい学生生活を送った。時には、巨人軍のグラウンドに行ったり、まだ、きれいだっただ多摩川で、ボートやヨットに乗ったり、丸裸で泳いだりして、青春を謳歌していた。

就職では、国家公務員上級職試験にはからずも合格したため、民間会社を断り、公務員に賭けてみた。開発の残っていた北海道に憧れ、北海道開発庁に採用された。

何をやりたいかには、幼少の頃より母から洪水の恐怖を聞かされていた為か、国土保全事業を行う河川部門を希望した。その結果、北海道開発局石狩川開発建設部に配置となった。以来、公務員退職後も、川の仕事に携わっている。

受験生の時、多摩川を歩いて以来、川とのつきあいは長くなり、丹沢や富士山

の遠景とともに、武工時代や多摩川の思い出は、遙かな昔になってしまった。

緑土会の創立七〇周年を祝す

昭和三九卒 松本 孝

緑土会が創立されて七〇周年を迎えたことは、人生で言えば古希に相当する年代を重ねたことに対し皆様方とお祝いいたしたいと存じます。

思えば、私が当時入学した昭和三五年は松村孫治教授が土木工学科の科長で担任は西脇助教授でした。校舎も未だ整備中で付属高等学校と中学校が同居し木造の教室が一部使用されておりました。多摩川の台地から眼下には多摩川を始め川崎迄が一望できる眺めで学校の周辺にはねぎ畑が点在していました。通学路には多摩川通りの桜並木をはじめ、多摩風致指定地区として住宅街を抜けたところに学校があり環境条件の良い土地でした。学校経営も五島育英会が経営にあたりおりました。在学中は中岡二郎教授の「建設機械ゼミナール」で建設機械の知識と工場見学を始め夏期実習の関東地方

建設局常陸太田工事事務所での材料試験や軟弱地盤処理工法や土木研究所の施設を借りての卒業論文「河川での洗掘と堆積」等が特に印象に残っております。

卒業を控えた昭和三九年頃は東京オリピックを迎える準備として、各種競技場の建設とこれらを結ぶ交通網の整備が一段と進んでいました。プロジェクトとして東海道新幹線の開業や高速自動車道路の整備が本州の太平洋ベルト地帯で進められていました。このように当時は建設業界の投資も盛んで、日本が高度成長を遂げる社会基盤の整備が整いつつあった時期でもありました。就職して私は、しばらく民間にいましたが郷里に帰りました。四国は本州と瀬戸内海という狭い海峡に挟まれた島で本四との連絡橋建設は四国島民にとつての強い願望でありました。現在は東側が神戸淡路鳴門自動車道、瀬戸中央自動車道（児島・坂出ルート）、西瀬戸自動車道（しまなみ海道）と三橋が完成供用すると共に地域経済と人的交通発展のいっかくを担っております。四国での高速自動車道路網の整備も四国の県都を結ぶXルートが完成し利便

性として充実されつつあります。旧国鉄連絡船の発着跡地と高松駅にはサンポト高松として再開発が進み、その勇姿を見せ始めており、長年勤めました、わが県庁舎のノッポビルも平成一二年に完成し業務を行っている状況です。二十一世紀にはどのような時代が開けてくるのか、少子高齢化時代を迎えて世の中は早いテンポで動いていくのだと実感しているこの頃です。



財香川県建設技術センターのある土木試験所前にて

戦前と戦後の二世卒業生

昭四〇卒

高橋章悟

緑土会創設七〇周年、おめでと〜ございます。

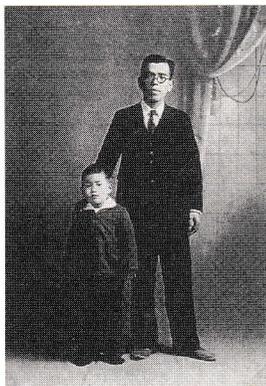
小生は、父とは専攻学部や誕生日（元旦）が同じとか、何かと共通点を感じて

おります。そして生前は、学校が大岡山時代のこと、学友のことなど昔の懐かしい思い出をよく聞かされました。

私は、小さい頃から物を作ることが大好きで、今では珍しくなった真空管ラジオ、自前の風作り、七夕作り、板塀作り、その他二階建て物置も作りました。そして今では造園や園芸にも手を出しております。

土木を専攻したのは、父の影響と父の学友が大手ゼネコンに勤務していたからでしょう。

今は亡き父（正一・昭和九年卒）と二世代に渡って緑土会には、長い間お世話になっております。



昭和23年七五三のとき写す（章悟5歳、父34歳）

福岡雑話

昭四〇卒

瀬戸口大三

福岡の四〇年卒はずっと私一人でしたが、昨秋、N建設のS君が支店長として赴任し、やっと二人になりました。

そもそもこの二人は因縁が深く、我々を初めて担任された小玉先生に大変ご心配とご迷惑をかけ「君達は四年で卒業しようなんて思っていたら大間違いだぞ。」と一年の期末に卒業延期を言い渡された二人なのです。

気合いを入れられた二人は猛勉強？し、落とした教養科目を卒業年度に取り返して、ヨレヨレ状態でめでたく卒業できたのであります。



大学時代、私はラグビー

ー（現在も

現役、写真

参照）、彼

はボディビル

で体を鍛え、今でも

二人とも体力

には自信

があり、中洲の街や周辺のフェアウエーを飽きずに闊歩しているところです。

最後に緑土会の七〇周年を心よりお慶び申し上げますとともに会員各位の益々のご活躍を祈念して、今夜もS君と焼酎で祝杯をあげるつもりです。

想い出の共有造りを目指し、 益々盛り上がる「緑土四〇年会」

昭四〇土幸 新藤博之

有志で始めたゴルフが何時しか会員九〇名余の緑土四〇年会となり、懇親と情報交換を目的にゴルフと旅行を主行事とし、青春時代の郷愁と想い出を酒のつまみに日頃のストレスを癒している。

最近では子供養育の手も離れ、苦勞を共にしてきた奥方も交え、間もなく訪れる第二の人生を共に謳歌すべく夫婦で参加する会員が増え、夫婦で共有する旅情の想い出を創出している。

酒を酌み交わしながら、家庭の中ではめったに見せぬ童心に帰る亭主どもの騒ぎを垣間見て、わたしも上品ぶっておとなしくしているのが馬鹿らしいわ、と自

然に騒ぎの中に溶け込める雰囲気は、青春時代の想い出を共有する仲間同士の独特な強い絆あればこそと感じる緑土四〇年会である。

母校・緑土会の 限らない発展を願って

昭四〇土幸 島田 徹



今日の日本の社会経済の繁栄は、科学技術の発展の恩恵に負うところは論を俟たない。緑土会員はじめ母校OBは、これを背景として社会資本整備等に少なからず貢献し、相応の評価をいただいていると考えている。

問題は、今後如何に対応して行くべきか……。視点を上げれば地球環境、科学技術と人間の係り方等、科学技術万能だけでは対応しきれないものがあるのでは……。人間として対応すべき倫理的な何かがあるのではないかと……。

この意味において母校・緑土会が将来も持続的に限らない発展をして行くには、

理科系と文科系双方の考えを兼ね備えた人間地球社会に幅広く総合的観点より貢献できるものでなければならぬ……。特に、これからの卒業生の理想に期待して止まない。

緑土学生会の思い出

昭四六土幸 齋藤憲一

私が緑土学生会長の時（昭和四五年）は「七〇年安保」の年で、学生運動が最も盛んな時期でありました。

当時は機動隊の校内導入、ヘルメット姿の活動学生（ほとんどが外部の者と記憶）、ジグザグデモ、校内封鎖、立看板等が校内のあちこちにあり、先生方や緑土ノ先輩諸兄には大変心配をおかけいたしました。

学生執行部に対抗できる組織は、緑土学生会を含む六科の学生会が結束し、全学生の総意をまとめることしかありませんでした。幸い土木科ノ緑土学生会は冷静・穏健に対応することができました。

この様な中、いわゆる当時の言葉で「ノンポリ学生」であった私は、今から

考えるともう少し違った動きが出来たのではないかと猛反省「自己批判」しております。

大学時代の思い出

昭四九幸 柴崎雄一

私は子どもの頃から宇宙物理学者になる事が夢であった。しかし、現役・浪人と夢敗れ、最終的には「おまえの名前は本の中の土木学者の名をとった。」と母から言われ、本大学の土木工学科に入学した。大学に通いはじめると、クラブの勧誘が始まり応援団のしつこい勧誘からとりあえず逃れる為に剣道部に入学した。下宿も決まりクラス・担任・剣道部と落ち着いた時、一年生のカリキュラムを見た。私はその時初めて、これから進む道が今までの夢の道と全く違う事に気が付き、それからの一年間は前期パチンコ・後期麻雀の日々であった。そして気付くと、私は出来たばかりの留年制度の第一号になっていた。絶対信じていた担任―当時仏の西川と呼ばれていた―の応用科学を落としてしまったのである。「事前

確認の大切さ」を身にしみて感じた。この出来事は私の人生で大きな教訓となった。

二年目からの私は一年目三〇日しか行かなかった剣道部にも真面目に通い、授業も真剣に受け、西脇先生の橋梁の図面はAをもらった。そして四年目がきた。

大学の紛争の煽りで武工も学年度末試験・ボイコットへと及んだ。しかし、私はその時、一年留年している事、土木への道を決め進んでいる事、今の妻がいた事、一年生の時、大学立法粉砕でクラス委員長をやった時と意義が違う事などでスト破り派に廻った。「今回は違う、遊んでいる暇はない……。」と。

五年生の六月、今の会社が内定した。その時私は、今の妻の事、今後の会社の事を考え「新入社員の身で結婚するから休みを下さい。」とは言えない。会社に入ったなら真つ直ぐ仕事一筋で行く為にも、「入社前・卒業前に結婚させて下さい。」と両親、特に母親にお願いした。昭和四九年三月一七日、その時の研究室の田辺先生が独身であったので、コンクリート研の小玉先生に仲人をお願いして結婚式

をあげた。

それから二六年、私は学生時代の信念を通し土木の道で頑張っている。平成二年六月に「省面積立坑システム」で土木学会賞を受賞。

我が青春の空手道部

昭四九幸 木村充男

武蔵工業大学緑土会創設七〇周年おめでとうございます。

私が本学土木工学科に入学した昭和四五年は、「万国博開催、よど号事件、七〇年安保闘争、三島由紀夫の自決事件」など希望と不安が入り混じった一九七〇代の幕開けにふさわしい年でした。学生時代の想い出として強く残るのは、やはり四年間のクラブ活動を通じ諸先輩、同輩、後輩達との出会いと苦楽を共にしてきた時のことです。

私には一四歳上の従兄がおり、本学の空手道部OBでした。その従兄から学生時代のことや社会人になったOBの活躍ぶりなど、中学・高校の頃から聞かされて、その影響もあり、私も武工に入った

ら空手道部に入部しようと思っております。当時の武工空手道部は輝かしい実績を上げた諸先輩が大勢いて、自分がイメージしていたものと実際の活動は想像をはるかに越えるほど厳しいものでした。親からは「おまえは学校に何しにいつているんだ。」と言われるくらい、当時の学生生活は空手道中心に回っております。

私が一年の後半からは、日本空手道協会欧州主席師範であった金澤先生が帰国され、再び本校の空手道部を指導されることになりました。二年の夏合宿は先生が着任され一年目の合宿とあつて過去に例を見ないほど長いものでした。二週間に渡る合宿での稽古は毎日六時間を越え心身ともに厳しかったけれども、銚子市内で演武会を催し、空手道を広める一助になったこと等、大変充実したものでした。合宿最後の納会の晩には台風が上陸して、明くる朝は道路・鉄道がいたるところで寸断され帰る手立てがなくなりました。部員が困惑していたところ、全員が道路復旧工事に駆り出され、夕方まで土のう積みにも追われました。その時、私

は一年の時に落とした必修科目の追試試験を明日に控え困っていましたが、地元土建業の方のご好意で、その夜千葉駅まで送っていただき、お陰で追試も無事パスすることができました。今となつてはかけがえのない思い出になっています。金澤師範ならびに諸先輩のご指導の甲斐あつて、我々が四年のときには、関東学生空手道選手権でベスト八、全国空手道選手権大会大学の部では三位の成績を上げ、武工空手道部の伝統をなんとか保つことが出来ました。この四年間、仲間との共同生活のなかで自己を押さえる心が養われ、稽古によつて、何事にも立ち向かつて行く精神培われたと思います。

卒業後、私は日本設計株式会社に入社し、早いもので二六年が過ぎました。空手道部で培われた精神は、技術屋となる各ステップにおいて計り知れない力を与えてくれました。また、これからの厳しい時代を乗り越えるエネルギーになるものと確信しております。

余談ですが、現在私の娘は本学の環境情報学部にお世話になっております。サークル活動に夢中で、学校には毎日通つ

ています。今では私が親から言われたことをそのまま、娘に言い聞かせている今日のごろです。

最後に、「武蔵工業大学土木工学科」ならびに「緑土会」の益々のご発展を祈念いたします。

青春の思い出

昭五〇幸 神田彰久

緑土会の七〇周年にあたる今年は、我々にとつては卒業二五周年の節目の年にも当たる。

これを機会に久々に集まろうということで、今年の三月には北野建設・小平氏の住居に近い戸倉・上山田温泉に研究室（水理研）の仲間を中心に集合した。また、七月には拡大同期会の「いちご会」（入学した七一年と卒業の七五年のひとり五や「一期一会」の語呂などからこの名称が付けられている）の会合も名幹事・水野氏のご尽力により久々に開催され、我らの同期のホープ・片田教授を交えて全国から二〇名程が東京フォーラムに顔を揃えた。

三月の会合では、日頃の憂さを晴らすべく、ゆったりと温泉に浸かり、夕方合流された小平氏の奥方共々、久々に旧交を暖めることができた。そこでの話題は通例に漏れず、やはり卒業間際のものが多く、物持ちの良い小平氏が持参した卒業写真も花を添え、中に写る仲間の若き顔に、この写真集があることすら忘れていたため懐かしさもひとしおであった。

この短い期間のことが何故これほど強く印象に残っているものか常に驚かされるが、正にこれが我らの「青春」であったということか。

思い出は徐々に風化し、不思議に悪いことは忘れ、良い印象のみに傾くようだ。一例を挙げると、我々の前後の代を含め、要領の善し悪しに拘わらず、また小生を含め、随分とその後尾を引いた者が多かった試験ボイコット騒ぎの話がある。

現在では何であんなに意固地になったのか全く忘れていたが、学内を封鎖した機動隊と睨めっこをしたお陰でその年は殆んど単位が取れず、卒業が決まるまで冷や汗のかきどおしであった。

また、「二班は明るく遊び好きで、二

班は真面目で暗い」という通説がいまだに取り沙汰されている。勿論冗談話であるのだが、単に事務的に五〇音順で分けられただけの班構成なのに、何故か当て嵌まる仲間も多いようだ。

小生はその一班に属し、決して明るくはなかったかも知れないが、ご多聞に漏れず勉学に熱心な学生ではなく、尾山台駅からの通学路にあった何件かの雀荘の中から悪友達（名譽のために彼らの名は伏せる）の聲が掛かると、迷いもなく、そのまま学校へ行かず夜半まで居続けたことを覚えていた。そして、これだけは通説の「例外」で、この仲間には二班の面々も多く加わっていた。

また、隔世の感があるものに試験での電卓使用許可の話がある。電卓がまだ出始めの頃で、それでも無け無しの小遣いを使い果たして入手した電卓を各自が教室に持ち込み、取り仕切りのうまい四釜氏が皆の電卓コードの蛸足配線に四苦八苦していたことが懐かしい。当時の電卓は光電管式で遠くからも数字が見え、試験中でも自分の計算結果と前方の秀才の結果を見比べることができたことを覚え

ている。

さて、温泉行きの行事は今後五年置きに開催することを約して帰途に善光寺に詣で、有名な門前のそばを食べて散会した。卒業何十周年まで集まれるのやら、今後の楽しみの一つとしたい。因みに次回は亀井氏が住む山形ということになっている。取り止めのない話になって恐縮の至りであるが、参加希望の方は是非連絡を賜りたい。

二〇年今ヲ昔

昭五三主幸

神藤安夫

現在、東京都江東区で地下鉄一二号線（大江戸線）の施工に従事しています。工程的には今年一二月に全線開業する為、最後の仕上復旧工事を実行施工しています。

最近感じているのは、私が社会に出た二〇年位前の昭和五三年に比べると、都市部での工事環境は大きく変化し、地域生活住民の権利意識が非常に強くなり、住民に対する工事説明の良否が、工程を確保する大きな条件になってきています。

その為に高度な技術を研鑽するだけでなく、それをわかりやすく説明する能力を養っていくことが、土木技術者に強く求められています。

これからも厳しい社会情勢の中で、良質な社会基盤整備をする為に、皆さん、健康でがんばりましょう。

ムサ工の思い出

昭五七五卒 生原 修

本学を卒業して二〇年になりました。在学中の思い出は色々で、良かったこと、良くなかったこと、いっぱいです。

良かったことは、①4年生の設計製図で図面の誤りを西脇先生が見逃されたこと、②それだぶん4年で卒業できたこと、③その後の打ち上げ（確か学食でビールをかけあったような）が楽しかったことなどです。

良くなかったこと、後悔していることですが、それは、あまり勉強をしなかったことです。

私は卒業後に応用力学や鋼構造や土質力学を、一からやり直す羽目になりました。

た。

一年生の線形代数をサポートしていたお陰で、微分方程式が今でもさっぱり分からず、悲しい思いをすることがしばしばあります。

七〇周年記念に際して

昭五七五卒 山崎晃弘



武蔵工業大学・緑
土会創設七〇周年お
めでとうございます。

そして、今日まで
武蔵工業大学・土木工学科の発展にご尽力頂きました先生方、諸先輩に敬意を表します。

私は社会に出て一七年目を迎えております。社会人になって思うことは、同じ会社先に先輩・後輩がいるというだけで、何か心強さを感じる。また、顧客先の担当者が武蔵工大出身者であることが判ると、妙に親近感が湧くのですから不思議なものです。それだけに、同じ学舎で過ごした学生生活共通の認識に重みを感じます。

緑土会の今後益々の発展を祈念しますと共に、私も社会に貢献すべく精進を重ねていきたいと思っております。

先生の緑土会名簿

昭五七五卒 橋爪喜孝

「緑土会」という命名は、なんと美しい響きなんだろうと、私は学生の頃から思っていました。

そして、緑土会と聞くと、故田辺先生のことを思い出します。

先生は卒業生の和を、とても大事になされておりました。

先生が亡くなられて、友人と先生のお宅を伺ったことが有り
ます。

先生が生
前に愛用さ
れていた
「緑土会名
簿」を手
にしたとき、
私は驚きま



した。

卒業生の住所変更が、全て書き込んであるのです。

定規で丁寧な横線に旧住所を消し、その下に細かい文字で新住所が書かれ、二度三度と変更した人も、そのたびに訂正してありました。

その作業が、この名簿の始めから終わりまで、びっしり成されていたのです。

もう二〇年近く前の事ですが、あの緑の表紙のよれよれになった名簿は、今でも心に残っています。

伝統を継承しつつ、

時代の最先端を！

平一〇十幸 伊藤和也

緑土会創設七〇周年記念に際し、平成一〇年卒業の同期生と共に喜びと誇りをもってお祝いを申し上げます。私が在学していた時代（と言ってもつい最近ですが……）は第二次ベビーブームのピークであり、学生数も一学年約一五〇人と大人数でした。このような大人数の学生を僅か二〇人弱の先生方で面倒を見て下さ

ったことは、大変なご苦労があったのではないかとお察しします（私達は授業を必ずしも真面目に受けていなかったし……）。

中でも、研究室に配属され卒論に着手する四年次には、各研究室に二〇人以上（一教員あたり一〇人ぐらいの割合でしょうか？）もの学生が配属されたのにも関わらず、内容の濃い研究をさせていただき、先生方のパワーに頭が下がる思いです。

私は大学院生（修士）時代を含めて三年間土質基礎研究室（現、地盤工学研究室）で研究を行いました。四年生に与えられた研究テーマは地盤工学分野でも非常に多岐多彩でした。院生になってから聞いた話ですが、研究テーマは毎年先生が興味あるテーマを持ち合い（互いに一〇〜二〇テーマくらいあるらしい）、譲り合って（？）半分程度にするのとこのとでした。研究に対するこのような好奇心・探究心を持っている先生方のもとで大学生を送れたことは、非常にラッキーだったと思っています。少し固めな事はかり書きしましたが、新

緑会ソフトボール大会の打ち上げでは食2Fでビールかけをして天井を濡らしたり、腕相撲の勝ち負けで大騒ぎしたり、MIT祭（今はMITech祭でしたっけ？）で最終日には体育会連絡員に囲まれて「土木コール」をしたり等々……、土木工学科全員（含む先生）で盛り上がったことなどは、同期で集まって飲むときには今でも話題になります。

どうか、これからも七〇年間に培われた武蔵工業大学土木工学科の伝統を継承しつつ、時代の最先端を突き進んで行かれることを切望しております。

ケニアで想う……

平八十幸 田中八重（旧姓会田）

何もない、とにかく何もないのである。あるのはどこまでも広がる台地と、どこまでも続く青い空だけである。アフリカ、ケニアはそんなところであった。

ケニアの首都ナイロビは高層ビルが立ち並び、人も車もたくさんいて日本でもよく見かける町ようだった。そんなナイロビから野生の動物たちがいる国立公



園を目指す。そして車で一〇分ほど走ると、また何もなくなる。時折小さな町があるのだが、そこではたいてい道に人があふれかえっている。その人たちは何をするといいでもなく、ただ道端にいて世間話でもしているようだった。きっと彼らは何もすることがないのであろう。ただ時だけが過ぎていくのを待っているだけのようにも思われた。彼らに目的や希望はあるのだろうか。

道路は舗装されていないところもあり、されていてもガタガタ道がほとんどである。道路工事や建物の建設工事も行われていたが、どこでもいつになつた終わるのだろうか。といった感じで作業を進めており、かつ、危険である。

ともかく社会資本が乏しい。電気・ガス・水道・道路、これだけは人が生きていくために、どこの国でもこの町でも、最低限必要なのだと思っていた。しかし、そんなことはないかもしれない。

日本では、社会資本の整備が整いつつあり、快適な生活が送れる。我々土木の仕事は減っていくようであるが、焦点を世界に向ければやること、できることはたくさんあると思った。しかし、本当にそうなのであろうか。ケニアは、どのような国になることを望んでいるのか。まずはそれが大切で、必ずしも先進国のようになる必要はないのではないか。快適な生活と引き換えに、我々は多くのものを失ってきた。もちろん衛生的でないこと、目的や夢がないまたは持てない（ように少なくとも私には見えた）ことは良くないことであると思うが。

我々には広く見える大地も、動物たちには狭いということを感じとればよいのだろうか。動物たちは、車から頭を出し動物を見てキヤキヤいっている我々人間をどのように見ているのだろうか。いつか人間が動物園の檻の中で誰かに見られる日が来るのだろうか。

今日もケニアの動物達は何を考え、何を想い草を食んでいるのであろうか。

武蔵工業大学緑土会七十年の歩み
緑 土

平成13年3月25日 印刷
平成13年3月30日 発行

編集兼発行者 武蔵工業大学 緑土会
70周年記念事業会

〒158-8557 東京都世田谷区玉堤1-28-1
武蔵工業大学
工学部土木工学科内

印刷所 (株) 山海堂

